

活字書体の夢芝居

KOかもめ龍爪Mで読む高村光太郎『書について』

KOきざはし金陵Mで読む恩地孝四郎『書籍の風俗』

KOまどか蛍雪Mで読む柳宗悦『京都の朝市』

KOくらもち銘石Bで読む種田山頭火『鉢の子から其中庵まで』

KOひさなが志安Mで読む中島敦『悟浄歎異』

KOにしき陳起Mで読む泉鏡花『浮舟』

SDゆきぐみラージW3で読む樋口一葉『たけくらべ』

SDときわぎロマンチックW3で読む芥川龍之介『文章』

KOおゝはなぶさMで読む夏目漱石『余と万年筆』

KOすずりMで読む岡本綺堂『修禪寺物語』

書について

高村光太郎

この頃は書道がひどく流行して来て、世の中に悪筆が横行している。なまじつか習った能筆風な無性格の書や、擬態の書や、逆にわざわざ稚拙をたくんだ、ずるいとぼけた書などが随分目につく。

一

絶えて久しい知人からなつかしい手紙をもらったところが、以前知っていたその人の字とは思えないほど古法帖めいた書体に改まっている、うまいけれどもつまらない手紙の字なのに驚くような事も時々ある。しかしこれはその人としての過程の時期であって、やがてはその習字臭を超脱した自己の字にまで抜け出る事だろうと考えてみずから慰めるのが常である。やはり書は習うに越した事はなく、

もともと書というものが人工に起原を發し、伝統の重疊性にその美の大半をかけているものなので、生れたままの自然發生的の書にはどうしても深さが無く、その存在が脆弱ぜいじやくで、甚だ味氣ないものである。

二

この生れたままの自然發生的な書というものにもいろいろあつて、生れながらに筆硯ひつけんてき的感覚を多分に持っている人の、或る点まで立派に書格を保有し、無邪氣で、自然で、いい加減な習字先生のよりも遙に優れたものとなる。そういう例は支那人よりも日本人に多く、いつの間にか、性格まる出しの、まねてまねられない、或は奇逸の、或は平明清澄の妙境に進み入り、殊に老年にでもなると、おのずか

ら一種の氣品が備わつて来て、慾も得もない佳い字を書くようになる。そういう佳品を目にするのはたのしいものであるが、さればといつて、此を伝統の骨格を持ち、鍛冶かじの効をつんで嚴然とした規格の地盤に根を張つた逸品の前に持ち出すと、やっぱり免れ難い弱さがあり、浅さがあり、何となく見劣りのするものである。人工から起つたものは何処までも人工の道を究めつくすのが本当であり、それには人工累積の美を突破しなければならぬのである。生れながらに筆硯の感覺を持つてゐる人ですらそうであるから、もともとそういう性来を持たない者の強引の書となると多くは俗臭に墮する傾がある。意地ばかりで出来た字、神経ばかりで出来た字、或は又逆に無神経ばかりで出来た字、ぐうたらばかりで出来た字が生れる。世の中にはなかなかそういう書が幅をきかせている。私などもその一

人であるが、これではならぬと思つてつとめて天下の劇跡に眼を曝すことにしているのである。

三

書はもとより造型的のものであるから、その根本原理として造型芸術共通の公理を持つ。比例均衡の制約。筆触の生理的心理的統整。布置構造のメカニズム。感覺的意識伝達としての知性的デフォルマシヨン。すべてそういうものが基礎となつてその上に美が成り立つ。そういうものを無視しては書が存在し得ない。書を究めるという事は造型意識を養うことであり、この世の造型美に眼を開くことである。書が真に分かれれば、絵画も彫刻も建築も分かる筈であり、

文章の構成、生活の機構にもおのずから通じて来ねばならない。書だけ分かつて他のものは分からないというのは分かりかたが浅いに外なるまい。書がその人の人となりを語るといふことも、その人の人としての分かりかたが書に反映するからであらう。

顔真卿がんしんけいはまったくその書のように人生の造型機構に通達した偉人であり、晩年逆徒李希烈に殺されるのをあらかじ予め知って、しかも従容として運命の迫るのを直視していた其の態度の美が彼の比類無い行草の藁書類こうしゆに歴々と見られる。斯かくの如き書を書くものは正に斯の如き心眼ある人物である。後年の名筆であつてしかも天真さに欠け、一点柔媚じゅうびの色気とエゴイズムのかげとを持つ趙子昂ちやうしこうの人物などと思ひ比べると尚更はつきり此事がわかる。書を学ぶのはすなわち造型美の最も端的なるものを学ぶ事であり、ただ字がうまくなる勉強だ

けでは決してない。お手本や師伝のままを無神経にくり返してただ
手際よく毛孔もうくの無いような字を書いているのが世上とうじやうに滔々たる書匠
である。

四

漢魏六朝の碑碣ひけつの美はまことに深淵のように怖ろしく、又実にゆ
たかに意匠の妙を尽している。しかし其は筆跡の忠実な翻刻という
よりも、筆と刀との合作と見るべきものがなかなか多く、当時の石
工の技能はよほど進んでいたものと見え、石工も亦立派な書家の一
部であり、丁度日本の浮世絵に於ける木版師のような位置を持って
いたものであろう。それゆえ、古拓をただ徒いたずらに肉筆で模し、殊に其

の欠磨のあとの感じまで、ぶるぶる書きに書くようになっては却て俗臭堪えがたいものになる。今日所謂六朝風の書家の多くの書が看板字だけの気品しか持たないのは、もともと模すべからざるものを模し、毛筆の自性を殺してひたすら効果ばかりをねらう態度の卑さから来るのである。そういう書を書くものの書などを見ると、ばかばかしい程無神経な俗書であるのが常である。最も高雅なものから最も低俗なものが生れるのは、仏の側に生臭坊主がいるのと同じ道理だ。かかる古碑碣の美はただ眼福として朝夕之に親しみ、書の淵源を探る途として之を究めるのがいいのである。

羲之ぎしの書と称せられているものは、なるほど多くの人の言う通り清和醇粹じゅんすいである。偏せず、激せず、大空のようにひろく、のびのびとしていてつつましく、しかもその造型機構の妙は一点一画の歪みにまで行き届いている。書体に独創が多く、その独創が皆普遍性を持つているところを見ると、よほど優れた良識せなを具えていた人物と思われる。右軍の癖というものが考えられず、実に我は法なりという権威と正中性とがある。献之になるともう偏る。恐るべき力量は十分ありながら、父の持つていたような天空海闊てんくうかいかつの氣宇に欠ける。それ以後の百星に至っては、おのおの独自の美つくを創り出していて歴代の壯観ではあるが、それぞれ少しずつ末梢まつしやう的なものを持つている。

六

書はあたり前と見えるのがよいと思う。無理と無駄との無いの
いいと思う。力が内にこもっていて騒がないのがいいと思う。悪筆
は大抵余計な努力をしている。そんなに力を入れないでいいのにむ
やみにはねたり、伸ばしたり、ぐるぐる面倒なことをしたりする。
良寛のような立派な書をまねて、わざと金釘流に書いてみたりもす
る。書道興って悪筆天下に満ちるの観があるので自戒のため此を書
きつけて置く。

使用書体

欣喜堂 かもめ龍爪M

組版 小澤いずみ

公開 二〇一三年一月一日

書について

底本 「昭和文学全集第4巻」小学館

一九八九（平成元）年四月一日初版第一刷発行

一九九四（平成五）年九月一〇日初版第二刷発行

入力 門田裕志

校正 仙酔ゑびす

二〇〇六年十一月二〇日作成

青空文庫作成ファイル

このファイルは、インターネットの図書館、

青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

書籍の風俗

恩地孝四郎

本も時代によって、さまざまな風俗を成す。前述したように本はいつもその時代の趣味好尚を映じ出している。即ち、僧俗時代、貴族時代、そうした時代の本はやはりそうした時代を明示する姿を以て遺されている。燦爛さんらんたる光耀を伴うような、神への尊崇と神への敬順を具象化したような宝玉や金属で飾られた寺院本、紋章や唐草や絡み模様などでけんらんと装われた貴族蔵本などは自ら過剰な、華飾的な此等の生活と風俗を具えている。蓋し当然事である。印刷術の発明、大量化以来、本は、甚だその働き場を拡大された。私蔵装飾本は、本のうちの甚だ少数なる一部となった。そして大多数は公刊装本によるものが規準となった。現代に於ては、本も甚だ多衆的なアンチームな姿を以て世紀を縦断している。この現代である。所で日本の現在、本はどんな姿をしているか。改めていうまでもな

いが、一応は述べなければならぬことだ。日本はその過去の本に於ては、西洋本と甚だ異なる綴本装幀をもっている。巻物形式までは略同様であつたが、綴本形式になつてからはまるで変つた形式となつた。即ち袋綴じであつて、截口が綴る方にある、西洋の逆態である。西洋と東洋とは、いろいろなものが逆であるが、本もその例を如実に示している。表紙を本文に綴じ合せる方法は西洋では早く姿を没したが、日本ではそれが、洋風装本の渡来までそのまま存続していた。チョン髻と同様である。この和風綴本、これは現在もむろん存在する。数から云つても、教科書類のこの方式のものを加えたら、相当な量であろう、が一般公刊本にあつては極めて少数がそれであるのみである。そして本の綴装といへば、殆ど大部分の人は洋式装しか頭に浮べないであらう程、洋装が常態となつた。丁度男子は、

街頭に於ては殆ど洋装であるが如しだ。これ即ち日本現在の風俗に協応するものであつて、現在生活の洋風化の実情をはつきりと具象しているものである。本箱本棚を考へてもたて豎に並べる洋式の方が普通である。和装は特殊な好み以外に普通は行われぬ。そして和装はその意匠を施すべき範囲が甚だ狭い。つまり和装本の形式は、丁度和服が殆ど手のつける余地のない程、完成し切つた形体であると同じである。現在公刊本に此の和装の形式が變形乍ら用いられるのは、僅に箱だ。即ち、題貼り形式がそれである。稀に数奇を好んで本にも之が用いられるが、木に竹をついだ感じでおちつけない。

折本仕立に至つては画帖、書帖の類の外は殆どないといつてもいい位だ。であるから、この記述では和本仕立の装綴については之を省いて触れることをしない。

現在行われている洋式装本をみるに大別して三種である。即ち、略装、本装、華装だ。猶、この外に仮装を分ける方がいい。これは略装に含ませてもいいが、観念が別の所から出発するから分ける方が正しい。

仮装は、ただ糸かがりをし、簡単な上被で之を覆い、綴じ放しの截ち切らず、即ちアンカットが常道である。時にしゃれて、又は特に形を特別なものにするためには截たれるが、三方折り放しのままが本然の姿だ。之はつまり、読者が自分の好みに本装をするために用意された形式であつて、刊行者は中味だけを提供するというわけ。之を截たないのは、本装の折に截断によつて本が小形になることを忌むためである。紙の折都合よりもっと別の形、当然の形より変えたい場合には、非常に舌を片よつて多く出したりする。それだけ

でみると随分変な奇態な外観を呈している。仮装は、巷間之をフランス装という程、フランスの本は仮装が多い。仏蘭西では所蔵家が自らさせる所蔵装綴が普及發達しているし、又自ら手がけて装本をたのしむの、彼国の美術心の發達によるものと云えよう。日本の仮装は一般に相当親切に綴じられているが本場の仮装の綴じは各詮自性、ただ散り散りにならぬ程度のぐたぐたなものが多い。由来から考えればそれでいいわけであって、かかる本は、再読三読するためには本装をしなければならぬ。フランス装の名が出来ているだけあって日本の本は仮綴でも相当丁寧にかがられているし、小口などもよくそろえてあるもの少くない。蓋し日本のように再製製本が大部分崩れた本の作りなおしやノートの合冊位にしか用いられぬ習慣や、又芸術的な製本をやる製本業が全く發達していない現状ではこ

うしたことも一方法であり、仮装も立派に一装本形態として独立性を多分に持つて来るわけである。この仮装を、その観念を更に一層徹底させて、上被も用意せず、糸も通さない出版もある。所蔵装幀に対して一層懇切な刊行である。が之は、余り頁数の多いものや、ザツなものには余り見かけない。日本では二三あつたかないかの寡少な方法である。

略装は、簡略な装本態であつて、日本の所謂フランス装などは当然この部類に入るわけであるが、余り費用をかけず、しかも綴本として纏まとまつたものとするための方式である。この様式では、しばしば釘綴じが行われる。糸でかがり合せるのでなく、針金で綴じるのであるが、ぞんざいなやり方の場合には、釘を表裏から打ちつけて固定する。名の通りの釘どじもある。正しく云えば釘どじと針金どじに

分つべきだ。この方式では、表紙は大抵紙が用いられる。本の小口は切り整えられている場合が多い。むしろ気取った場合はアンカットのも少なくない。表紙と中味の連絡は、中身の騰かり糸で表紙に膠こ着ちやくされ、その上を見返し紙が抑える。ぞんざいなのは背と峰に貼付けただけのもある。之は表紙の紙が切れて放れ易い。釘どじのものは背に布、寒冷紗しやなどを膠着、それが糸の代りをつとめる。略したのは、見返しで中身と表紙とを貼り結ぶ。之は見返し紙が余程丈夫でないで見返しの折目が切れて中身が離脱して了う。ヨタ本形態である。略装は近頃本を安く作る必用上、よく採用されている。が、どうも安物をつくる心得で出版者も工作者もやつつけるのでいい味のものも尠くなる。気軽で親しみ易く又読むにも軽量で扱いいい、心易い様式、好ましい姿であるのに、そうした心組で、ガラクタ本

にして了う場合が多いことは遺憾である。この仮装略装本を非常に愛着して、この方式の上にいる本を作りたいたいといつも願っているが、前述のような事情で失望しがちである。だがこの形式は将来十分発展性のあるものと考える。愛書家も徒いたずらに華装ばかりを尊重しながら、ずに、こうした所に平明直截な美を打ち立てることに留意してほしい。

本装は、まず本らしい。本として一人前な、制服をつけたといった所の様式である。略装の紙表紙がボール貼りに代ったものといっている。このボールは、厚薄によって、本の味が大変違つて来る。

薄手のものか例えばマニラボール、芯地など用いたものは、略装の味に近くなり、心易さが増して来るし、翻読にもおつくうな気持が来ない。ポケット辞書類が大抵この薄表紙であるのはその間の性質の自然な利用である。又その逆に極端に厚いものもある。これは併

し稀な例であつて、特殊な好みの外は用いられぬ。板のようにどつしり堅固な感のほしい時には適當である。此の場合、ボール紙の三方に匏かんなをかけて斜に落とす所謂面をどるのが普通であつて、その仕上りは一つの稜を増すわけであるから、重厚であり複雑な味を附加される。又この稜を厭うてカマボコ形に円味でおどす場合もある。

これは敦厚どんこうな感じである。これと似たのはボールと被装物との間にやわらを入れて、つまり綿入れ着物のような柔い盛り上がりをやるものがある。この種のもは日本では、大形の写真貼などの外は刊行本には殆どない。近刊拙著詩文集はその方式でやることになつてゐる。本装になると背が一つの重要な働きをもつて来る。綴じつけにいろいろな種別が出来て来るからである。これは二大別して、綴じつけと、貼りつけの二種になる。Binding と Casing とであつて、

「どじつけ」と「くるみ」である。どじつけは、表紙の板紙へ綴り糸を固着して後に装表の材料を被せ装飾する。一般に所蔵本の丁寧なものに用いるもので古くは此の法によったもので堅固の点では遙に後者を凌ぐものである。「くるみ」の方は表紙と中身とは別々に仕上がって、それが繋ぎ糸で連結されるもの、今日の大部分の刊行本が扱っている方法であって操作の簡単なことを長所とするが堅牢の点は前者にはるかに劣るものである。その連結法の差異の外に、も一つ背の別様を述べる必要がある。それは背の形と、背が浮いているか、密着しているかである。浮いているのは腔背であって、本の開きが、らくである代りによい技術でないとすぐにふらふらになる。刊行本には最も一般的に見る方式。膠着しているのは丈夫な点はいいが、その硬いもの、硬直背 (Tight Back) のものは開きが窮屈

である。それを避けるために軟撓骨 (Flexible B.)^{なんどう}がある。これは開きがずつとらしくである。が、背に箔など入れてある場合離脱したり、皺が寄ったりして、美術的なものには不可である。形の上から見ると丸形と角形になる。丸背には、大山 (強孤形)、中山 (緩孤形) それど、角丸 (かまぼこ形) とある。普通見る丸背は前二者であつて、角丸は、技術の未熟のために余り日本では少ないが西洋本は多くがこれである。本の品もこれが最上である。角背は、背が平面なのでフラットバックと云われるが、角背は多くの場合裏打を固くしてその特長を強化する。その折れ目、耳を立てたのを角山という。角背の腔背は耐久力に難点がある。余程優秀な技術が要る。角背の、特に硬直背は釘どじ式のものに適応するわけである。(釘どじは、針金などの金属が腐るのを避けて麻糸等によるものがある。之は針金どじという

よりも、やはり総称である打抜き綴じという風がいいわけ）角背を俗に南京（ナンキン）と呼ぶ。角背は保全上と開きの点に難があるが、視形としてはキツカリとした角形を成すので、そういった好みには適合する。

連結の法に、も一つの方法がある。突着け綴附というので、表紙の平（ヒラ）と背との間の仕切り押のないもの、背からすぐ平へ移行する方式、表紙をミミの根までつき込んで連絡するのである。之は仕切り押を忌む様な平から背まで続いた装飾などある場合には此の法によるより外ないが、一寸締りのない様な感じである。場合によつてはこの装飾の関係がなくとも用いて良果がある。又之と同様の外容となるものだが、一枚の芯紙をのべて貼附けたものなどもある。小形の聖書などにみるあれである。

以上で大体装綴様式を略述したことになるが、各々その工程形態によって、性質があるから、装案者はそれを味識して配慮することが必要である。書の品格、仮りに書格といおうなら、その書格を構成する分子としてその綴装様式は重大な役割りをもつものである。例えば背皮を採り乍ら、打抜き綴じなどにするが如きは、やむを得ない場合は致し方なしとして、全く以てちやちである。又丸背の強いものに対して余り直線的な感じの文様を附するが如きである。

さてそこで現在の日本の出版物をみてみる。色とりどり姿さまざまである。全く雑然たる風俗図である。これ即ち現代日本を反映するものと云えばそれまでであるが、少し何とかおちついた流れを成さないものか、誠に書店店頭に立ってみるならば、この感はそぞろに深いものがある。

使用書体

欣喜堂 きざはし金陵 M

組版 小澤いずみ

公開 二〇一三年十二月一日

書籍の風俗

底本 「日本の名随筆 別巻87 装丁」 作品社

一九九八(平成一〇)年五月二五日第一刷発行

底本の親本 「恩地孝四郎装幀美術論集 装本の使命」

阿部出版

一九九二(平成四)年二月発行

入力 門田裕志

校正 仙酔ゑびす

二〇〇七年一月一八日作成

青空文庫作成ファイル

このファイルは、インターネットの図書館、

青空文庫 (<http://www.aozoragr.jp/>) で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

京都の朝市

柳宗悦

私は大正の終りから昭和の八年まで足掛九年も京都に住んだが、今から思うと、もつとよくこの旧都やその周辺の文化の跡を見ておくべきであった。由緒のある社寺はもとよりだが、近辺の聚落やその生活などにも更に親しむべきであった。それに見落したのはこの古い都に今も数々伝わる手工芸の工房である。それを遍ねく訪ねて、技術の工程や出来上る品物を、よく見届けておくべきであった。工芸の種目は驚くほどの数に上ろう。この点では京都にまさる場所は他にあるまい。古く遠い伝統が今もつづくからである。その

幾許かはもとより見て廻つたが、もつと充分に私の見聞を広めておくべきであつた。今から思い返して惜しい気がしてならぬ。

併し徒らに怠つていたわけではない。京都に在住の間、私の心をいたくそそつたものの一つは朝市あさいちであつて、私は中々勉強した。これには河井寛次郎が先達であつた。

朝市というのは月のうちの日と所とをきめて、少くとも朝の六時頃から立つ市なのである。上、古着から、下、櫛の欠けたのまで、何でもかでも並べる市である。それが一ヶ所ではない。弘法の市、天神の市、壇王の市、淡島の市、北浜の市という風に、日と所とを異にして立つのである。何でも、それ等の朝市に凡て出掛けるとすると、大小合せ、驚く勿れ、一ヶ月のうち二十日余りもあるそうである。中で最も大きいのは月の二十一日にかかる弘法の市、つまり東寺の市で、広い寺の境内が、所せまきまでに物で埋まる。これと

双壁をなすのが毎月二十五日の天神の朝市で、つまり北野天神の境内境外にぎっしり立つ大きな市である。

何もかも、けじめなく売る是等の朝市は、私共には大いに魅力があった。尤も私が始めてその市のことを知ったのは、漸く大正の終り頃であるから、もうよい時期は去つて了つた後だとも云える。大正の始めであつたら、更に又明治に遡つたら、品物はどんなに素晴らしかったかと思える。時代が降るにつれて、物の質は落ちてゆく、「この頃は全く何も出んようになりました」と私共はよく商人から聞かされたものである。実際そうであるに違いない。

併しそれでも出掛ければ、何か一物は手に入った。もともとこの朝市には五時から六時頃の間、手車で品物が運ばれてくるのだが、車が止まるのを待ち受けているのは小道具屋連中で、めばしいものが先ずぬかれて了う。それに六時頃出かけるのは、そう楽なこ

どではなく、私共が行くのは、早くて七八時頃になつて了う。この市を目がけて集る都民の数も大したもので、天気でもよいと、時には身動きも出来ぬ盛況である。それ故、私共はどうしても二番手、三番手の買手になつて了う。

併し有難いことに、道具屋と私共の眼のつけ所に、中々喰い違ひがあるのである。だから後から出掛ける私達にも、目こぼしの品が相当に恵まれるわけである。人々が注意を払わず、市価がてんでない品の中に、色々よいものが現れてくる。昔ほどの朝市では決してない筈なのだが、それでも見過ごして了うには、勿体ない獵場であつた。それで雨が降らなければ、大きな市には、まめに足を運んだ。

売手の大部分は婆さんであつた。好個の内職になるに違いない。大体昼頃で市は終つて了うから、買手も早くから集つてくる。度々

吾々も出かけるので、しまいには婆さん達と顔なじみになって、吾々のために物をとっておいてくれたりするようになった。

ここで一寸述べておきたいが、「下手」^{げて}とか「下手物」^{げてもの}とかいう俗語は、實に是等の婆さん達の口から始めて聞いた言葉なのである。つまり私達の買う品物の大部分は、婆さん達に云わせると、「下手物」であつた。始めて耳にしたその言葉が面白く、又「上手」^{じょうて}のもの^{もの}に対して用いると、何かはつきりした性質の区別も示されるので、之が縁となり、私達もこの言葉を用いることに便利を感じた。「下手」とは、ごく当り前の安ものの性質を示し、従つて民器とか雑器とかいう言葉に当る。恐らく文字でこの俗語を書き、その性質を述べたのは私達が最初ではなかつたらうか。大正十五年九月発行の「越後タイムス」に私は「下手ものの美」と題して始めて筆をとつた。

併しこの俗語は、語調に強いところがあるせいか、また猟奇的な調子を感じずのか、伝播はとても早く、年を追って広まり、今では用いぬ人がないまでに至り、辞書すら之を載せざるを得ないまでになった。恐らく最初之を掲げたのは、新村出博士編纂の「辞苑」であつたかと思う。

併し段々この言葉が社会に広まるにつれ、いつもの例に洩れず、間違つた使い方をしたり、とんでもない意味に流用したり、又興味本位でこの俗語を色々に転用したりして、私共が元来意味したものとは、凡そかけ離れたものになつて了つた。そのため私共の立場が、色々誤解されたり曲解されたりして、とんだ迷惑を受けるに至つた。それで今度は逆に、なるべくこの俗語を避けるようにして、その代りの言葉を造り出す必要を感じ、遂に「民芸」という二字に落ちついたのである。併し「下手」というような表現は、大い

に面白味もあり、自由な素朴なところもあつて、正当にさえ用いれば、中々よい俗語のように感じる。

余談になつたが、この朝市で私共が見出して驚いたのは、俗に「丹波布」と呼ぶもので、婆さん達は短く、「丹波」と云っていた。後でよく分つたが、之は丹波国佐治地方で出来る木綿もので、土地では「縞貫」と呼ばれ、緯糸に染めない白の玉糸を、所々に入れるのが特色である。私共が驚いたのは、その色の洪さ、織の温かさ、縞の美しさであつて、もとより糸は手紡、色は草木染である。尤もそれ以外になかつた時期である。余り味が豊かで、まるで茶人達が特別に注文して作らせたと思われるほどであつた。始めて見たこの布に、大いに心を惹かれ、見かける毎にのがさず買い漁つた。この丹波布が京都の朝市に出廻るのは、京阪地方の人々が之を好んで布よ団表どんおもてに用いたからである。時には丹前たんぜんもあつたが、多くは掛布団

や敷布団であつた。それが今は流行おくれとなり、使いふるした古着となつて、市に出て来るのである。幕末から明治の始め頃が最も盛に織られたと云われる。糸味染味が無類によく、若しこの布が早く知れ渡っていたら、茶人などは好んで袋ものや仕服しふくにでも用いたであろう。中で特に蚊張のために織つたものは、残り糸などを用いてあつて、やたら縞の味が極めて美しいのである。私は之で幾本かの大津絵を表具したことがある。大変によく似合つた。この布の評判は吾々の間では忽ち伝播して、売手の婆さん連も、吾々の為に特に集めるようになった。今民芸館に所蔵され、いつも陳列されているのは、凡てその頃の朝市の獲物なのである。将来日本の綿布史を編む人は、この布の存在とその価値とを忘れてはなるまい。新名物裂と讃えられる日も来るのではあるまいか。

因に云う。半世紀以上も廢れていたこの布は、近時丹波国氷上郡

佐治近くの大燈寺を中心に、復興が企てられ、再び糸を紡ぐ者、染める者、織る者が力を協せるに至った。

もとよりこの朝市で獲たものは丹波布ばかりではない。私自身が着たい着物も色々よい品が手に入った。新品よりも更に丈夫で、遙かにもものよい品が、いくらもあった。三十年後の今日でもまだ使っているのがある。全く質のよさの恵みである。或は織手の心根の恵みという方が、更に至当なのかも知れぬ。

併し、こんな着物ばかりではない。私は沢山の裂織（一名「ぼろ織」とも云われるもの）や、屑系織（一名「やたら織」と呼ばれるもの）などを買集めた。それが汚れたままで売られているので、家に持って帰ると、きたないと云って家内に大いに嫌われた。どんな病人の使ったものだか知れないという。一理あって、中々臭いにおいて悩まされることもあった。医者の吉田璋也君が心配して、全部消毒の強制執

行に及んで、家庭の紛擾も、めでたくけりがついたことがある。是等の布類も、今は全部民芸館に納めてある。

朝市のこととて、何でもかでも売るのであるから、もとより布類ばかりではなく、焼物も塗物も、金物も、木や竹の細工も、心を惹くものが色々現れた。安ものばかりであるのは言うを俣^またない。私はこの朝市のお蔭で、一層丹波の焼物にも親しむことが出来た。昔に比べ、此頃は面白いものが、ずっと減つたと誰も話すが、それでも朝市行は吾々の心を誘つた。予期もしないものが現れて吾々を待つてゐるからである。

大体こういう朝市には、何も名のある立派なものを出てこない。だから評判などに便^{たよ}つてもものを見る要もない。こういう所こそ、誰にも自由な選択を求めているのである。ここが大いに魅力のある所であろう。こんな場所では知識などは余り役に立たぬ。それだけに

直観が遠慮なく活躍せねばならぬ。之が働くと、物の方でも悦んで近寄ってくるのである。

よく民芸館に飾られる全緑釉、指搔紋の大捏鉢おこなねばちがあるが、之も朝市での収獲であった。その日私は時間がおくれて九時頃に出かけた。あの弘法の市日で、広い境内に所せまきまでに、品物が拵げてあった。時間は既におそく、帰りがけの人も多い頃であったが、ふと見ると筵むしろの上にこの大捏鉢が燦然と輝いているではないか。驚いたのはこの私である。早速に値を聞くと、たった二円であった。昭和四年頃のことである。私は有無なく買取って、荒縄で縛つてもらった。

おかしなことに、この日何千という人々が朝早くからつめかけ、とくに小道具屋の連中は、鶉の目鷹の目で、品物を漁っているのである。それなのに、こんな大きな鉢、こんなにも見事な、そうして

珍らしい品物を、振り向きもしないとは、どういうわけか。それも言い値が二円なのである。気の毒と云っていいのか。品物は地面の上に広げられた筵の上に、粗末に置いてあるままである。私は勿体ない想いで、飛びつくように買った。

併し径二尺にもおよぶ大捏鉢であるし、持ちにくい形でもあり、重さもかなりあって、持ち帰るのは一苦勞であつた。おまけに東寺から、私の住んでいた吉田山までは、京都の端から端と云つてもよく、電車に持ちこめば嵩が大きく、さりとてその頃はタクシーは稀で、それに家までの賃金は、この鉢の代より高いのである。随分くたびれて家に戻つたことを今も想い起す。だが牀にそれを置いて眺め入つた時、その立派さは私の疲れを忘れさせるのに充分であつた。誰もろくに見てやらないこの種の捏鉢は、現存するものいたく少く、二十数年後の今日と雖も、私は僅か四、五枚の例より知らな

い。そのうちの一枚を私は鹿児島で獲たから、民芸館には今二枚所有していることになる。倉敷民芸館にも一枚絶品がある。

いろいろ調べた結果、この捏鉢は肥前の国庭木の産で、親しくその古窯跡を訪ねてその出所を知ることが出来た。作られたのは徳川中期と考えられる。

ついでであるから述べておきたいが、同じく大捏鉢で、白絵掛の上に、松の大木を雄渾な筆致で描いたのがある。又明らかに同じ系統の窯で水甕や徳利に松絵を描いたものが沢山現れた。この松絵の大捏鉢を私が最初見初めたのは、所もあろうに信州小諸の道具屋であった。程なく水甕も求めたが、最初はどここの窯のものか見当もつかなかった。昭和の初め頃は陶磁史の専門家の知識も甚だ限られたもので、誰に聞いても知っている人がなかった。恐らく越中瀬戸だと説明されたくらいだ。

私が始めてこの大捏鉢を「大調和」誌上に紹介したのは昭和三年正月号であるが、その頃もまだ窯が見出されず、只九州の産という見当がほぼついたくらいである。民窯のこと故、誰にもよく知られていないのである。

昭和三年の中頃であったか、始めて筑後二川ふたがわでこの種の鉢や甕が作られたことが分つて来た。私はその報告を「工芸の道」の口絵解説に記した。之が縁となって、この種の焼物を皆世間では「二川」と呼ぶに至った。併し段々九州に於ける古窯跡の発掘が進むにつれ、二川より更に前に弓野あたりでも焼かれ、伝統を遡れば更に古く、何も二川のみでないことが分明になった。只二川がこの種の焼物を作った最後の窯場なのである。当時この捏鉢は、各家庭の必需品として、肥前一带に随分方々で焼かれたものと思える。前述の庭木や、又小田志なども、広い意味で同じ流れの窯場と云えよう。

大体捏鉢には松絵が多いが、品物が集るにつれ、梅とか竹とか蘭とか岩山とか、色々の紋様が試みられたことが分つた。今でこそ多少の経験や知識が得られて、ほぼその全貌をうかがえるが、ここまでするのには遅々とした歩みであつた。併し日本の民窯は極めて数も多く、分布の区域も広く、その興廢が常ならぬのであるから、實際今後何が現れるか、予想もつかぬ。それで或意味では、こういう窯場のこと詳しくなればなるほど、何もはつきりと断定が出来ぬのが実状である。日本の民窯は宛ら迷園の如くだとも云えよう。歴史家は途方に暮れざるを得ぬ。

話は別だがこんな朝市は東京には見かけぬ。少くとも京都のような著しいのはない。世田ヶ谷のぼろ市が有名だが、毎月は立たぬし、品物の変化は少い。銀座の夜店が客を引いたが、之も跡を断つに至つた。京都の朝市に匹敵するのは、北京の泥棒市、巴里の蚤の

市、倫敦のカルドニアン・マーケット等、何れも興味津々たるものである。こういう市は、とりすました骨董商の店などは凡そ違つて、訪ねる方も気楽だし、又選択も自在だし、値らしい値もないこととて、掘出しの興味が甚だ多い。ここが一つの魅力で、實際何が現れるか見当もつかぬ。だからここでは誰もの眼が主人で、何ものにも掣肘を受けぬ。未踏の獵場の如きもので、相場以前の世界なのである。こういう世界こそ私のような者には、何にも増して有難いのである。有名でないもので、いとも素晴らしいものが、勿体もつげず平気で現れてくるからである。

使用書体 欣喜堂 KOまどか強雪M

公開 二〇一三年二月一日

組版 @yndom

底本 「日本の名随筆5 陶」作品社

一九八二（昭和五七）年一〇月二五日第一刷発行

一九九九（平成一一）年四月三〇日第二五刷発行

底本の親本 「蒐集物語」中央公論社

一九五六（昭和三一）年二月発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5000）を、大振りにつくっています。

入力 門田裕志

校正 noriko saio

二〇一二年二月二八日作成

青空文庫作成ファイル

このファイルは、インターネットの図書館、

青空文庫 (<http://www.iizora.net/>) で作られました。

入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さんです。

『鉢の子』から『其中庵』まで

種田山頭火

この一篇は、たいへんおそくなりましたけれど、結庵報告書ともいうべきものであります。井師をはじめ、北朗兄、緑平兄、酒壺洞兄、元寛兄、白船兄、樹明兄、そのほか同人諸兄姉の温情によって、句集が出版され、草庵が造作されました。おかげで私は山村庵居の宿題を果すことが出来て、朝々、山のしずけさ人のあたたかさを感じております。ここに改めてお礼とお詫とを申し上げる次第であります。

一昨年——昭和五年の秋もおわりに近い或る日であった。私は
当もないそして果てもない旅のつかれを抱いて、緑平居への坂をの
ぼっていった。そこにはいつものように桜の老樹がしんかんと並び
立っていた。

枝をさしのべてゐる冬木

さしのべている緑平老の手であった。私はその手を握って、道友
のあたたかさをしみじみと心の底まで味わった。

私は労れていた。死なないから、というよりも死ねないから生きているだけの活力しか持っていなかった。あれほど歩くことそのことを楽しんでいた私だったが、

『歩くのが嫌になった』

と呟かすにはいられない私となっていた。それほど私の身は労れていたのである。

『あなたがほんとに落ちつくつもりなら』 緑平老の言葉はあたたかすぎるほどあたたかだった。

こうして其中庵の第一石は置かれたけれど、じっとしていられる身ではない。私はひとまず熊本へ帰ることにした（実をいえば、私には行く方向はあっても帰る場所はないのである）。

冬の降る夕であった。私はさんざん濡れて歩いてきた。川が一すじ私といっしょに流れていた。ぼとり、そしてまたぼとり、私は

冷たい頬を撫でた。笠が漏りだしたのだ。

笠も漏りだしたか

この網代笠は旅に出してから三度目のそれである。雨も風も雪も、そして或る夜は霜もふせいでくれた。世の人のあざけりからも隠してくれた。自棄の危険をも守ってくれた。——その笠が漏りだしたのである。——私はしばらく土手の枯草にたたずんで、涸れてゆく水に見入った。

あなたこなたと歩きつづけて、熊本に着いたのはもう年の暮だった。街は師走の賑やかさであったが、私の寢床はどこにも見出せなかった。

霜夜の寢床が見つからない

これは事実そのままを叙したのであるけれど、気持を述べるならば、

霜夜の寢床がどこかにあらう

となる。じっさい、そういう気持でなければこういう生活が出来るものでない。しかしこれらの事実や気持の奥に、叙するよりも、述べるよりも、詠うべき或物が存在すると思う。

ようやくにして、場末の二階を間借りすることが出来た。そしてさっそく『三八九』を出すことになった、当面の問題は日々の米塩だったから（ここでもまた、井師、緑平老、元寛、馬酔木、寧平の諸兄に対して感謝の念を新らしくする）。

明けて六年、一月二月三月と調子よく万事運ぶようであったが、結局はよくなかった。内外から破綻した。ただに私自身が傷ついたばかりでなく、私の周囲の人々をも傷つけるような破目になった。

事の具体的記述は避けよう、過去の不愉快を繰り返して味わいたくないから。

私はまた旅に出るより外はなかった。

何処へ行く、東の方へ行こう。何処まで行く、其中庵のあるところまで。

六年が暮れて七年の正月には、私は緑平居でお屠蘇を頂戴していた。そしてボタ山を眺めながら話し合っていた。

ここで、其中庵の第二石が置かれた。今暫らく行乞の旅を続けているうちに、造庵の方法を講じてあげるとのことであった。

私は身も心も軽く草鞋を穿いた。あの桜の老樹の青葉若葉を心に描きながら坂を下りて行った。

福岡へ、唐津へ、長崎へ、それから島原へ、佐賀へ、神湊へ、八幡へ、戸幡へ、小倉へ、門司へ、そしておもいでふかい海峡を渡った。

徳山、小郡、——この小郡に庵居するようになるとは、私も樹明兄も共に予期していなかった。因縁所生、物は在るところのものに成る。

句集の原稿は、緑平居で層雲から写してまとめたが、句数は僅々百数十句に過ぎなかった。これが、これだけが行乞流転七年の結晶であった。

私はその句稿を頭陀袋におさめて歩きつづけた。石を磨いて玉にしようとは思わないが、石には石だけの光があるう、磨いて、磨いて、磨きあげて、せめて石は石だけの光を出そうと努めるのが、私のような下根のなぐさめであり力である。

しかし、私にはまだ自選の自信がなかったので、すまないとは思
いながら、井師に厳選をお願いした、師が快く多忙な貴重な時間
を割いて、何から何まで行き届いたお心づかいに対しては、まことに
何ともお礼の申しあげようがない。

句集出版については北朗兄を煩わした。まだ一面の識もない私に
示された好意と斡旋とは永久に忘れることがないであろう。

そしてさらに、後援会の事務一切を一身に引き受けて、面倒至極
な事務をあんなに手際よく取り捌いて下さった酒壺洞兄に心からの
謝意を表することを忘れてはならない。

緑平老、白船老の厚情については説くまでもあるまいが、元寛兄、
俊兄、星城子兄、入雲洞兄、樹明兄、敬治兄等の並々ならぬ友誼に
ついては、ここで感謝の一念を書き添えずにはいられない。

こうして、身にあまる恩恵につつまれつつ、私は東漂西泊した。鉢の子という題名は私の句集にふさわしいものであった。一鉢千家飯、自然が人が友が私に米塩と寝床とをめぐんだ。

庵居の場所を探ねるにあたって、私は二つの我儘な望みを持っていた。それが山村であること、そして水のよいところか、または温泉地であることであった。

最初、嬉野温泉でだいぶ心が動いた、そこは、水もよく湯もよかった。視野が潤けすぎて、周囲がうるさくないこともなかったけれど、行乞の便利は悪くなかった。しかし何分にも手がかりがない。見知らぬ食坊主を歓迎するほどの物好きな人を見つけることが出来なかった。

ついで足をとめたのが川棚温泉である。関門の都市に遠くない割合に現代化していない。山もうつくしいし湯もあつい。ことにうれしいのは友の多い都市に近いことであった。私はひとりでここが死場所であるときめてしまった。

花いばらここの土とならうよ

こんな句が口をついて出るほどひきつけられたので、さっそく土地借入に没頭した。人の知らない苦心をして、やっと山裾の畑地一畝を借入れる約束はしたが、それからが難関であった。当村居住の確実な保証人を二人立ててくれというのである。幸にして幸雄兄の知辺があるので、紹介して貰って奔走したけれど、田舎の人は消極的で猜疑心が強くて、出来そうでも出来ない。一人出来たと喜べば、二人目が破れて悲しませる。二人目が承諾すると、一人目が拒絶す

る。——私はこの時ほど旅人のはかなさを感じたことはない。

ひとりきいてゐてきつつき

思案にあまって、山路をさまようて、聞くともなく、そして見るともなく、啄木鳥に出逢ったのであった。

私は殆んど捨鉢な気分さえ墮在していた。憂鬱な暑苦しい日夜であった。私はどうにかせずにはいられないところまでいっていたのである。

だが、私はこんなに未練ぶかい男ではなかった筈だ。むろん人間としての執着は捨て得ないけれど、これほど執着するだけの理由がどこにあるか。何事も因縁時節である、因縁が熟さなければ、時節が到来しなければ何事も実現するものではない。なるようになれではないが、なるようにしかならない世の中である。行雲流水の

身の上だ、私は雲のように物事にこだわらないで、流れに随って行動しなければならぬ。

去ろう、去ろう、川棚を去ろう。さらば川棚よ、たいへんお世話になった。私は一生涯川棚を忘れないであろう。川棚よ、さらば。

けふはおわかれの糸瓜がぶらり

私の心は明るいとはいえないまでも重くはなかった。私の行手には小郡があった、そこには樹明兄がいる。そのさきには敬治兄がいる。その近くのA村は水が清くて山がしずかだった。それを私ははっきりと記憶している。

『もし川棚の方がいけないようでしたら、ここにも庵居するに似合

な家がないでもありませんよ。』此夏二度目に樹明兄を訪ねてきた時、兄が洩らした会話の一節だった。私はその時はまだ川棚に執着していたので、その深切だけを頂戴した。それが今はその深切の実を頂戴すべく、ひょうぜんとしてやってきたのである。

或る家の裏座敷に取り敢えず落ちついた。鍋、釜、俎板、庖丁、米、炭、等々と自炊の道具が備えられた。

二人でその家を見分に出かけた。山手の里を辿って、その奥の森の傍、夏草が茂りたいだけ茂った中に、草葺の小家があった。久しく風雨に任せてあったので、屋根は漏り壁は落ちていても、そこには私をひきつける何物かがあった。

私はすっかり気に入った。一日も早く移って来たい希望を述べた。樹明兄は喜んで万事の交渉に当たってくれた。

屋根が葺きかえられる。便所が改築される（というのは、独身者は老衰の場合

を予想しておかなければならないから)。畳を敷いて障子を張る。——樹明兄、冬村兄の活動振は眼ざましいというよりも涙ぐましいものであった。

昭和七年九月二十日、私は其中庵の主となった。

私が探し求めていた其中庵は熊本にはなかった、嬉野にも川棚にもなかった。ふる郷のほとりの山裾にあった。茶の木をめぐらし、柿の木にかこまれ、木の葉が散りかけ、虫があつまり、百舌鳥が啼きかける廃屋にあった。

廃人、廃屋に入る。

それは最も自然で、最も相應しているではないか。水の流れるよ
うな推移ではないか。自然が、御仏が友人を通して指示する生活と
はいえなかるうか。

今にして思えば、私は長く川棚には落ちつけなかつたろう（幸雄兄の

温情にここで改めてお礼を申しあげる。川棚には温泉はあるけれど、二このよう
な閑寂がない。しめやかさが無い。

私は山を愛する。高山名山には親しめないが、名もない山、見す
ぼらしい山を楽しむ。

ここは水に乏しいけれど、すこしのぼれば、雑草の中からしみじ
みと湧き出る泉がある。

私は雑木が好きだ。この頃の櫛はの葉せのうつくしさはどうだ。夜ふ
けて、そこはかたなく散る木の葉の音、おりおり思いだしたように
落ちる木の葉の音、それに聴き入るとき、私は御仏のを感じる。

雨のふる日はよい。しぐれする夜のなごやかさは物臭な私に粥を
煮させる。

風もわるくない。もう凧らしい風が吹いている。寢覚の一人をめぐって、風はどこから来てどこへ行くのか。さみしいといえば人間そのものがさみしいのだ。さみしがらせよとうたった詩人もあるではないか。私はさみしさがなくなることを求めない。むしろ、さみしいからこそ生きている、生きていられるのである。

ふるさとはからたちの実となつてゐる

そのからたちの実に、私は私を観る。そして私の生活を考える。雨ふるふるさとはなつかしい。はだしであるいと、蹠あしづらの感觸が少年の夢をよびかえす。そこに白髪あはれの感傷家がさまようといるとは。――

あめふるふるさとははだしであるく

最後に私は、川棚で出来た句『花いばら、ここの土とならうよ』の花いばらを茶の花におきかえなければならなくなったことを書き添えよう。そして、もう一句、最も新らしい一句を書き添えなければなるまい。

住みなれて茶の花のひらいては散る

(「三八九」復活第四集)

使用書体 欣喜堂くらもち銘石B

公開 二〇一四年二月二〇日

組版 @ymdkom

底本

「山頭火随筆集」講談社文芸文庫、講談社

二〇〇二（平成一四）年七月一〇日第一刷発行

二〇〇七（平成一九）年二月五日第九刷発行

初出

「三八九」復活第四集」

一九三二（昭和七）年二月二五日発行

入力

門田裕志

校正

仙酔ゑびす

二〇〇八年五月一九日作成

青空文庫作成ファイル

このファイルは、インターネットの図書館、

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。

入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さんです。

悟淨歎異

— 沙門悟淨の手記 —

中島
敦

昼餉ひるげののち、師父しふが道みちばたの松まつの樹きの下したでしばらく憩いこうておられる間ま、悟空ごくうは八戒はっかいを近くちかくの原はらっぱに連つ出して、変身へんしんの術じゆつの練習れんしゆをさせていた。

「やってみろ！」と悟空ごくうが言う。「竜りゆうになりたいとほんとうに思うんだ。いいか。ほんとうにだぜ。この上うへなしの、突つきつめた気き持もて、そう思うんだ。ほかの雑念ざつねんはみんな棄すててだよ。いいか。本気まことにだぜ。この上うへなしの・と、こ・とんの・本気まことにだぜ。」

「よし！」と八戒はっかいは眼まなこを閉しじ、印いんを結むすんだ。八戒はっかいの姿すがたが消きえ、五尺ごせきばかりの青大將あおだいしやうが現あらわれた。そばで見みていた俺おれは思おもわず吹ふ出してしまった。

「ほか！ 青大將あおだいしやうにしかなれないのか！」と悟空ごくうが叱しつた。青大將あおだいしやうが消きえて八戒はっかいが現あらわれた。「だめだよ、俺おれは。ままつたくどうしてか

な？」と八戒は面目なげに鼻を鳴らした。

「だめだめ。てんで氣持が凝こらないんじゃないか、お前は。もう一度やってみろ。いいか。真劍に、かけ値なしの真劍になつて、竜になりたいた竜になりたいたと思うんだ。竜になりたいたという氣持だけになつて、お前というものが消えてしまえばいいんだ。」

よし、もう一度と八戒は印を結ぶ。今度は前と違つて奇怪なものが現われた。錦蛇にしきへびには違ちがいないが、小さな前肢まえあしが生えていて、大蜥蜴おおとびけのようでもある。しかし、腹部は八戒自身に似てブヨブヨ膨ふくれており、短い前肢で二、三步匍はうと、なんとも言えない無恰好ぶかつこうさであつた。俺はまたゲラゲラ笑えてきた。

「もういい。もういい。止めろ！」と悟空が怒鳴る。頭を搔かき搔かき八戒が現われる。

悟空。お前の竜になりたいという気持が、まだまだ突きつめていな
いからだ。だからだめなんだ。

八戒。そんなことはない。これほど一生懸命に、竜になりたい竜に
なりたいと思いつめているんだぜ。こんなに強く、こんなに
ひたむきに。

悟空。お前にそれができないということが、つまり、お前の気持の
統一がまだ成っていないということになるんだ。

八戒。そりゃひどいよ。それは結果論じゃないか。

悟空。なるほどね。結果からだけ見て原因を批判することは、けっ
して最上のやり方じゃないさ。しかし、この世では、どうや
らそれがいちばん実際的に確かな方法のようだぜ。今のお前
の場合なんか、明らかにそうだからな。

悟空によれば、変化へんげの法とは次のごときものである。すなわち、あるものになりたいという氣持が、この上なく純粹に、この上なく強烈であれば、ついにはそのものになれる。なれないのは、まだその氣持がそこまで至っていないからだ。法術の修行とは、かくのごとく己かのれの氣持を純一無垢むく、かつ強烈なものに統一する法を学ぶまに在る。この修行は、かなりむずかしいものには違いないが、いったんその境に達したのちは、もはや以前のような大努力を必要とせず、ただ心をその形に置くことによつて容易に目的を達しうる。これは、他の諸芸におけると同様である。変化へんげの術が人間にできずして狐狸こりにできるのは、つまり、人間には関心すべき種々の事柄があまりに多いがゆえに精神統一が至難であるに反し、野獸は心を勞すべき多くの瑣事さじを有もたず、したがつてこの統一が容易だからである、云々うんげん。

悟空ごくうは確かに天才だ。これは疑うたがいがない。それははじめてこの猿さるを見た瞬間しゅんかんにすぐ感じ取とられたことである。初はつめ、赭あまら顔がほ・鬚ひげ面づらのその容貌ようぼうを醜みにくいと感かんじた俺おれも、次の瞬間しゅんかんには、彼の内うちから溢あふれ出るものに圧倒あつたうされて、容貌ようぼうのことなど、すっかり忘れてしまった。今いまでは、
ときにこの猿さるの容貌ようぼうを美うつくしい（とは言えぬまでも少なくとももりっぱだ）とさえ感かんじるくらいだ。その面魂つらたましいにもその言葉ことばつきにも、悟空ごくうが自己おのれに対して抱いだいている信しん頼らいが、生き生きと溢あふれている。この男おとこは嘘うそのつけない男おとこだ。誰たれに対してよりも、まず自分おのれに対して。この男おとこの中には常に火かが燃もえている。豊ゆたかかな、激げきしい火かが。その火かはすぐにかたわらにいる者ものに移うつる。彼の言葉ことばを聞きいているうちに、自然しぜんにこちらも彼の信しんずるとおりに信しんじないではいられなくなってくる。彼

のかたわらに在るだけで、こちらまでが何か豊かな自信に充ちてくる。彼は火種^{ひだね}。世界は彼のために用意された薪^{たきぎ}。世界は彼によつて燃されるために在る。

我々にはなんの奇異もなく見える事柄も、悟空の眼から見ると、ことごとくすばらしい冒険の端緒だつたり、彼の壮烈な活動を促す^{うなが}機縁だつたりする。もともと意味を有つた^も外の世界が彼の注意を惹^ひくというよりは、むしろ、彼のほうで外の世界に一つ一つ意味を与えていくように思われる。彼の内なる火が、外の世界に空しく冷えたまま眠っている火薬に、いちいち点火していくのである。探偵の眼をもつてそれらを探し出すのではなく、詩人の心をもつて（恐ろしく荒っぽい詩人だが）彼に触れるすべてを温め^{あた}、（ときに焦がす^こ惧れ^{おそ}もないではない。）そこから種々な思いがけない芽を出させ、実を結

ばせるのだ。だから、渠かれ・悟空ごくうの眼にとつて平凡ちんぷ陳腐ぶなものは何一つない。毎日早朝に起きると決まつて彼は日の出を拜み、そして、はじめてそれを見る者のような驚嘆をもつてその美に感じ入つてゐる。心の底から、溜息ためいきをついて、讚嘆さんたんするのである。これがほとんど毎朝のことだ。松の種子から松の芽の出かかっているのを見て、なんたる不思議さよと眼を瞠みはるのも、この男である。

この無邪氣な悟空の姿と比べて、一方、強敵と闘つてゐるとききの彼を見よ！　なんと、みごとな、完全な姿であらう！　全身些いさかの隙すきもない逞たくましい緊張。律動的で、しかも一分ぶのむだもない棒の使い方。疲れを知らぬ肉体が歡よろこび・たけり・汗ばみ・跳はねている・その圧倒的な力量感。いかなる困難をも欣よろこんで迎える強靱きやうじんな精神力の横溢いっ。それは、輝く太陽よりも、咲誇ひまわりる向日葵よりも、鳴盛なきせきる蟬せみより

も、もつと打込んだ。裸身の・壮んな・没我的な・灼熱した美しさだ。あのみつともない猿の聞っている姿は。

一月ほど前、彼が翠雲山中で大いに牛魔王と戦ったときの姿は、いまだにはつきり眼底に残っている。感嘆のあまり、俺はそのときの戦闘経過を詳しく記録に取っておいたくらいだ。

……牛魔王一匹の香しゅうと変じ悠然として草を喰いたり。悟空これを悟り虎に変じ駈け来たりて香しゅうを喰わんとす。牛魔王急に大豹と化して虎を撃たんと飛びかかる。悟空これを見てから豹となり大豹目がけて襲いかかれば、牛魔王、さらばと黄獅に変じ霹靂のごとくに哮ってから豹を引裂かんとす。悟空このとき地上に転倒すと見えしが、ついに一匹の大象となる。鼻は長蛇の

ごどく牙きはは筍たかんに似たり。牛魔王堪えかねて本相あらを顕あらわし、たちま
ち一匹はくぎゆうの大白牛はくぎゆうたり。頭こころは高峯こうほうのごどく眼まなこは電光でんこうのごどく双角しゅうかくは
両座りょうざの鉄塔てつたに似たり。頭あたまより尾おしに至いたる長さながさ千余文せんよぶん、蹄ひづめより背上せうじやうに
至いたる高さたかさ八百丈はちひゃうぢやう。大音だいおんに呼よびわつて曰いわく、なんじ悪あく猴こう今我いまわれをい
かんとするや。悟空ごくうまた同どうじく本相ほんさうを顕あらわし、大喝たいかく一声いつせいするよと見
るまに、身みの高たかさ一丈いちじやう、頭あたまは泰山たいざんに似にて眼まなこは日月にちげつのごどく、口
はあたかも血池けつちにひとし。奮然ふんぜん鉄棒てつぼうを揮ふるつて牛魔王ぎゅうまおうを打うつ。牛魔
王角つうかくをもつてこれを受止うけどめめ、兩人半山にんげんはんざんの中なかにあつてさんざんに戦
いければ、まことに山やまも崩くずれれ海うみも湧返わきまえり、天地てんちもこれがためために反はん
覆ぶくするかと、すさまじかり。……

なんという壯觀さうくわんだつたらう！ 俺かれはホツと溜息ためいきを吐ついた。そばか

ら助太刀に出ようという気も起こらない。孫行者の負ける心配がな
いからというのではなく、一幅の完全な名画の上にさらに拙い筆を
加えるのを愧じる気持からである。

災厄は、悟空の火にとつて、油である。困難に出会うとき、彼の

全身は（精神も肉体も）焰々と燃上る。逆に、平穩無事するとき、彼

はおかしいほど、しよげている。独楽のように、彼は、いつも全速

力で廻つていなければ、倒れてしまうのだ。困難な現実も、悟空に

とつては、一つの地図——目的地への最短の路がハッキリと太く線

を引かれた一つの地図として映るらしい。現実の事態の認識と同時

に、その中であつて自己の目的に到達すべき道が、実に明瞭に、彼

には見えるのだ。あるいは、その途以外は一切が見えない、といつ

たほうがほんとうかもしれぬ。闇夜の發光文字のごとくに、必要な途みちだけがハッキリ浮うかび上がり、他は一切見えないので。我々鈍根どんこんのものがいまだ茫然ぼうぜんとして考えも纏まとまらないうちに、悟空はもう行動を始める。目的への最短の道に向かつて歩き出しているのだ。人は、彼の武勇や腕力を云々うんぬんする。しかし、その驚くべき天才的な智慧ちについては案外知らないようである。彼の場合には、その思慮や判断があまりにも渾然こんぜんと、腕力行為の中に溶け込んでいるのだ。

俺おれは、悟空の文盲もんもうなことを知っている。かつて天上てんじやうで彌馬温ひつばおんなる馬方うまかたの役に任せられながら、彌馬温の字も知らなければ、役目の内容も知らないでいたほど、無学なことをよく知っている。しかし、俺は、悟空の（力と調和された）智慧ちと判断の高さを何ものにも優まして高く買う。悟空は教養が高いとさえ思うこともある。少なくとも

も、動物・植物・天文に関するかぎり、彼の知識は相当なものだ。彼は、たいていの動物なら一見してその性質、強さの程度、その主要な武器の特徴などを見抜いてしまふ。雑草についても、どれが薬草で、どれが毒草かを、実によく心得ている。そのくせ、その動物や植物の名称（世間一般に通用している名前）は、まるで知らないのだ。彼はまた、星によつて方角や時刻や季節を知るのを得意としているが、角宿かくしゆくという名も心宿しんしゆくという名も知りはしない。二十八宿しゆくの名をことごとくそらんじていながら実物ほんものを見分けることのできぬ俺と比べて、なんとという相異だらう！ 目に一丁字いっていじのないこの猴さるの前さきにいるときほど、文字による教養の衰れさを感じさせられることはない。

悟空ごくうの身体こたゐの部分部分ぶぶんぶぶんは——目も耳も口も脚も手も——みんな

つも嬉うれしくて堪たまらないらしい。生き生きとし、ピチピチしている。

ことに戦う段になると、それらの各部分ごぶぶんは歓喜かんぎのあまり、花にむらがる夏の蜂はちのよう*にい*いつせいにワァーッと歓声かんせいを挙げるのだ。悟空の戦いぶりいくゐぶりが、その真剣まけんな気魄きぱくにもかかわらず、どこか遊戯ゆうぎの趣を備えているのは、このためであるか。人はよく「死ぬ覚悟で」な

どというが、悟空という男はけつして死いぬ覚悟かくごなんかしない。どんな危険けんけんに陥おちつた場合ばいばいでも、彼はただ、今自分のしている仕事しごと（妖怪ようかいを退治たいちするなり、三蔵法師さんざうほうしを救すくい出すなり）の成否せいひを憂うれえるだけで、自分の生命せいめいのことなどは、てんで考えの中に浮うかんでこないの**である**。

太上老君たいじやうろうくんの八卦炉はっけろ中に焼殺やうかくされかかったときも、銀角大王ぎんかくだいおうの泰山頂たいざんていの法ほうに遭あうて、泰山たいざん・須弥山しゆみせん・峨眉山あびざんの三山さんざんの下したに圧おさし潰つぶされそ

うになつたときも、彼はけっして自己の生命のために悲鳴を上げはしなかつた。最も苦しんだのは、小雷音寺しょうらいおんじの黄眉老仏こうびのために不思議な金鏡きんきようの下に閉じ込められたときである。推せども突けども金鏡は破れず、身を大きく変化させて突破ろうとしても、悟空の身が大きくなれば金鏡も伸びて大きくなり、身を縮めれば金鏡もまた縮まる始末で、どうにもしようがない。身の毛を抜いて錐きりと変じ、これで穴を穿うがとうとしても、金鏡には傷一つつかない。そのうちに、ものを蕩たかして水と化するこの器の力で、悟空の臀部てんぶのほうをそろそろ柔らかくなりはじめたが、それでも彼はただ妖怪に捕えられた師父ふの身の上ばかりを氣遣きづつていたらしい。悟空には自分の運命に対する無限の自信があるのだ（自分ではその自信を意識していないらしいが。）やがて、天界から加勢に来た亢金竜かうきんりゆうがその鉄のごとき角をもつ

て満身の力をこめ、外から金鏡きんにようを突通した。角はみごとくに内まで突
通ったが、この金鏡はあたかも人の肉のごとくに角に纏まといついて、
少しの隙すきもない。風の洩もるほどの隙間すきまでもあれば、悟空は身をけし、
粒つぶと化して脱のれ出るのだが、それもできな。半ば臀部は溶けか
りながら、苦心くんたん惨憺さんたんの末、ついに耳の中から金箍棒きんそぼうを取出して鋼鐵こうてつ
に変え、金竜の角の上に孔あなを穿うち、身を芥子粒けしつぶに変じてその孔あなに潜ひそ
み、金竜に角を引抜かせたのである。ようやく助かったのちは、柔
らかくなった己かのれの尻しりのことを忘れ、すぐさま師父しふの救い出しにかか
るのだ。あとになつても、あるときは危なかつたなどとけつして言
ったことがない。「危ない」とか「もうためだ」とか、感じたことが
ないのだらう。この男は、自分の寿命とか生命とかについて考えた
こともないに違いない。彼の死ぬときは、ポクンと、自分でも知ら

ずに死んでいるだろう。その一瞬前までは澀刺と暴れ廻っているに
違いない。まったく、この男の事業は、壮大という感じはしても、
けっして悲壯な感じはしないのである。

猿は人真似をするというのに、これはまた、なんと人真似をしな
い猿だろう！ 真似どころか、他人から押付けられた考えは、たと
いそれが何千年の昔から万人に認められている考え方であつても、
絶対に受付けないのだ。自分で充分に納得できなにかぎりは。

因襲も世間的名声もこの男の前にはなんの権威もない。

悟空の今一つの特色は、けっして過去を語らぬことである。とい
うより、彼は、過去つたことは一切忘れてしまおうらしい。少なくとも

も個々の出来事は忘れてしまふのだ。その代わり、一つ一つの経験の与えた教訓はその都度、彼の血液の中に吸収され、ただちに彼の精神および肉体の一部と化してしまふ。いまさら、個々の出来事を一つ一つ記憶している必要はなくなるのである。彼が戦略上の同じ誤りをけつして二度と繰返さないのを見ても、これは判る。しかも彼はその教訓を、いつ、どんな苦い経験によつて得たのかは、すっかり忘れ果てている。無意識のうちには体験を完全に吸収する不思議な力をこの猴は有つているのだ。

ただし、彼にもけつして忘れることのできぬ怖ろしい体験がたつた一つあった。あるとき彼はそのときの恐ろしさを俺に向かつてしみじみと語つたことがある。それは、彼が始めて釈迦如来に知遇し

奉つたときのことだ。

そのころ、悟空は自分の力の限界を知らなかつた。彼が藕糸歩雲くつはの履くつを穿はき鎖子黄金さしの甲よろいを着きけ、東海竜王とうかいりゆうおうから奪うばつた一万三千五百斤きんの如意金箍棒にょいきんそうぼうを揮ふるつて闘たたかうところ、天上にも天下にもこれに敵かたする者がないのである。列仙れつせんの集あまる蟠桃会はんとうえを擾ざわがし、その罰さとして閉しじ込こめられた八卦炉はつぱいろをも打破た破はつて飛と出ですや、天上界も狭せましとばかり荒あれ狂くるうた。群ぐんがる天兵てんべいを打倒たし薙たぎ倒たし、三十六員の雷将らいじやうを率ひきいた討手うちての大將祐聖真君ゆうせいしんくんを相手あいてに、靈霄殿りやうしやうてんの前に戦いくさうこと半日はんじつ余あり。そのときちようど、迦葉かしよう・阿難あなんの二尊者そんじやを連つれた釈迦牟尼しやかむに如来にょらいがそこを通とりかかり、悟空の前に立たち塞ふさがつて闘たたかいを停とめたもうた。悟空が佛然ぶつぜんとして喰くつてかかる。如来が笑わらいながら言いう。「たいそう威張いばつているようだが、いったい、お前はいかなる道みちを修しゆしえたと

いふのか？」悟空いわ曰く「東勝神州とうとうらいこく傲来国おんらいこく華果山かこざんに石卵いしだまより生まれたるこの俺かれの力を知らぬとは、さてさて愚おろかなやつ。俺はすでに不老ふろう長生ちやうせいの法ぽうを修しゆし畢おわり、雲うんに乗り風かぜに御ごし一瞬いつしゆんに十万八千里じゅうばんせんりを行く者だ。」如来らいわ曰く、「大きなことを言うものではない。十万八千里はおろかなが掌てのひらに上つて、さて、その外へ飛出すことすらできまいに。」

「何を！」と腹はらを立てた悟空ごくうは、いきなり如来らいわの掌てのひらの上に跳はり上あがった。「俺かれは通力つうりきによつて八十万里はちじゅうばんりを飛行ひぎやうするのに、なんじの掌てのひらの外そとに飛出とせまいとは何事なにごとだ！」言いひも終はわらずきん斗雲とううんに打乗うちまつてたちまち二、三十万里じゅうさんばんりも来たかと思おもわれるころ、赤く大いなる五本の柱はしらを見た。渠かれはこの柱はしらのもとに立寄たり、真中まんなかの一本いっぴんに、齊天大聖さいてんたいせい到此こゝ一遊いちゆうと墨すみくろくろと書きしるした。さてふたたび雲うんに乗のつて如来らいわの掌てのひらに飛歸とり、得々とくとくとして言いつた。「掌てのひらどころか、すでに三十万里じゅうさんばんりの遠とほ

くに飛行して、柱にしるしを留めてきたぞ！」「愚かな山猿よ！」と
如来は笑った。「汝の通力がそもそも何事を成しうるといふのか？
汝は先刻からわが掌の内を往返したにすぎぬではないか。嘘と思わ
ば、この指を見るがよい。」悟空が異しんで、よくよく見れば、如来
の右手の中指に、まだ墨痕も新しく、齐天大聖到此一遊と己の筆跡
で書き付けてある。「これは？」と驚いて振仰ぐ如来の顔から、今ま
での微笑が消えた。急に嚴肅に変わった如来の目が悟空をキツと見
据えたまま、たちまち天をも隠すかと思われるほどの大きさに拡が
って、悟空の上へのしかかってくる。悟空は総身の血が凍るような
怖ろしさを覚え、慌てて掌の外へ跳び出そうとしたとたん、如来
が手を翻して彼を取抑え、そのまま五指を化して五行山とし、悟空
をその山の下に押込め、おん囁に吠めい叫の六字を金書して山頂に

貼はりたもうた。世界が根柢こんていから覆くつり、今までの自分が自分でなくなつたような昏迷こんめいに、悟空はなおしばらく顛ふるえていた。事実、世界は彼にとつてそのとき以来一変したのである。爾後じご、餓ううるときは鉄丸を喰くらい、渴かわするときは銅汁を飲んで、岩窟がんくつの中に封じられたまま、贖罪しよくざいの期の充みちるのを待たねばならなかつた。悟空は、今までの極度の増上ぞうじょう慢まんから、一転して極度の自信のなさに墮おちた。彼は気が弱くなり、ときには苦しさのあまり、恥も外聞も構わずワアワアと大声なで哭ないた。五百年経たつて、天竺てんじくへの旅の途中にたまたま通りかかつた三蔵法師さんぞうほうしが五行山頂の呪符じゆふを剥はがして悟空を解き放つてくれたとき、彼はまたワアワアと哭ないた。今度のは嬉うれし涙であつた。悟空が三蔵さんぞうに随したがつてはるばる天竺までついて行こうというのも、ただこの嬉うれしさありがたさからである。実に純粹で、かつ、最も強烈な感

謝であつた。

さて、今にして思えば、釈迦牟尼しやかにによつて取抑えられたときの恐怖が、それまでの悟空の・途方もなく大きな（善悪以前の）存在に、一つの地上的制限を与えたものふうである。しかもなお、この猿の形をした大きな存在が地上の生活に役立つものとなるためには、五行山の重みの下に五百年間押し付けられ、小さく凝集ぎようしゆうする必要があつたのである。だが、凝固ぎようこして小さくなつた現在の悟空が、俺おれたちから見ると、なんと、段違いにすばらしく大きくみごとであることか！

三蔵法師は不思議な方である。実に弱い。驚くほど弱い。変化へんげの術ももとより知らぬ。途みちで妖怪ようかいに襲われれば、すぐに掴つかまつてしま

う。弱いというよりも、まるで自己防衛の本能がないのだ。この意
氣地のない三蔵法師に、我々三人が齊しく惹かれているといふのは、
いったいどういふわけだろう？（こんなことを考えるのは俺だけだ。

悟空も八戒もただなんとなく師父を敬愛しているだけなのだから。）私は
思うに、我々は師父のあの弱さの中に見られるある悲劇的なものに
惹かれるのではないか。これこそ、我々・妖怪からの成上がり者には
絶対にないところのものなのだから。三蔵法師は、大きなもの
中における自分の（あるいは人間の、あるいは生き物の）位置を——そ
の衰れさと貴さとをハッキリ悟っておられる。しかし、その悲劇性
に堪えてなお、正しく美しいものを勇敢に求めていられる。確かに
これだ、我々になくて師に在るものは。なるほど、我々は師よりも
腕力がある。多少の変化の術も心得ている。しかし、いったん己の

位置の悲劇性を悟つたが最後、金輪際、正しく美しい生活を真面目に続けていくことができないに違いない。あの弱い師父の中に、この貴い強さには、まったく驚嘆のほかはない。内なる貴さが外の弱さに包まれているところに、師父の魅力があるのだと、俺は考へる。もつとも、あの不埒な八戒の解釈によれば、俺たちの——少なくとも悟空の師父に対する敬愛の中には、多分に男色的要素が含まれているというのだが。

まったく、悟空のあの実行的な天才に比べて、三蔵法師は、なんと実務的には鈍物であることか！ だが、これは二人の生きることの目的が違ふのだから問題にはならぬ。外面的な困難にぶつかったとき、師父は、それを切抜ける途を外に求めずして、内に求める。

つまり自分の心をそれに耐えうるように構えるのである。いや、そ

のとき慌あわてて構かまえずとも、外的な事故によつて内なるものが動揺を
受けないように、平生へいぜいから構かまえができてしまつてゐる。いつどこで
窮きゆう死ししてもなお幸福きふでありうる心を、師はずでに作り上げておられ
る。だから、外に途を求めする必要がないのだ。我々から見ると危あぶな
くてしかたのない肉体上の無防禦むぼうぎよも、つまりは、師の精神にとつて
別にたいした影響はないのである。悟空のほうは、見た眼にはすこ
ぶる鮮やかだが、しかし彼の天才をもつてしてもなお打開くわいできな
ような事態が世には存在するかも知れぬ。しかし、師の場合にはそ
の心配はない。師にとつては、何も打開する必要がないのだから。
悟空には、嚇怒かくどはあつても苦惱くなんはない。歡喜くわんぎはあつても憂愁ゆうしゅうはな
い。彼が單純たんじゆんにこの生を肯定こうていできるのになんの不思議もない。三蔵
法師の場合はどうか？ ああ、あの病身ふせと、禦まぐことを知らない弱さと、

常に妖怪ようかいどもの迫害を受けている日々をもつてして、なお師父しよは
悦たのしげに生うべなを肯うべなられる。これはたいしたことではないか！

おかしいことに、悟空は、師の自分より優まつているこの点を理解
してはいない。ただなんとなく師父から離れられないのだと思つてい
る。機嫌きげんの悪いときには、自分が三蔵法師さんざうに随したがっているのは、ただ
緊箍咒きんそくじゆ（悟空の頭に箍はめられている金の輪わで、悟空が三蔵法師の命に従
わぬときにはこの輪が肉に喰くい入つて彼の頭を緊しめ付け、堪たえがたい痛み
を起おこすのだ。）のためだ、などと考えたりしている。そして「世話
の焼ける先生だ。」などとブツブツ言いながら、妖怪に捕とえられた師
父を救い出しに行くのだ。「あぶなくて見ぢやいられない。どうして
先生はあんなだるうなああ！」と言うとき、悟空はそれを弱よきもの
への憐愍れんぴんだと自惚うぬげれているらしいが、実は、悟空の師に対する気持

の中に、生き物のすべてがもつ・優者に対する本能的な畏敬^{いけい}、美と貴さへの憧憬^{どうけい}がたぶんに加わっていることを、彼はみずから知らぬのである。

もつとおかしいのは、師父自身が、自分の悟空に対する優越をぞ存じないことだ。妖怪の手から救い出されるたびごとに、師は涙を流して悟空に感謝される。「お前が助けてくれなかつたら、わしの生命はなかつたらうに！」と。だが、実際は、どんな妖怪に喰^くわれようど、師の生命は死にはせぬのだ。

二人とも自分たちの真の関係を知らずに、互いに敬愛し合って（もちろん、ときにはちよつとしたいさかいはあるにしても）いるのは、おもしろい眺めである。およそ対蹠^{たいせき}的なこの二人の間に、しかし、たった一つ共通点があることに、俺^{おれ}は気がついた。それは、二人がそ

の生き方において、ともに、しよよ所与を必然と考え、必然を完全と感じていることだ。さらには、その必然を自由と看做みなしていることだ。金剛石と炭とは同じ物質からでき上がっているのだそうだが、その金剛石と炭よりもつと違い方のはなはだしいこの二人の生き方が、ともにこうした現実の受取り方の上に立っているのはおもしろい。そして、この「必然と自由の等置とうち」こそ、彼らが天才であることの徴しるしでなくてなんであるか？

悟空ごくう、八戒はっかい、俺おれと我々三人は、まったくおもしろいそれぞれに違っている。日が暮れて宿がなく、路傍の廃寺に泊まることに相談が一決するときでも、三人はそれぞれ違った考えのもとに一致しているのである。悟空はかかる廃寺こそ究竟くつきやうの妖怪退治ようかいの場所だと

して、進んで選ぶのだ。八戒は、いまさらよそを尋ねるのも徳劫ちやくきやくだし、早く家にはいつて食事もしたいし、眠くもあるし、というのだし、俺の場合は、「どうせこのへんは邪悪な妖精ようせいに満ちているのだらう。どこへ行つたつて災難に遭あうのだとすれば、ここを災難の場所として選んでもいいではないか」と考えるのだ。生きものが三人寄れば、皆このように違うものであるか？　生きものの生き方ほどおもしろいものはない。

孫行者そんぎやうじやの華はなやかさに圧倒されて、すつかり影の薄らいだ感じだが、猪悟能ちよごのうはつぱい八戒もまた特色のある男には違いない。とにかく、この豚は恐ろしくこの生を、この世を愛してゐる。嗅覚きゆうかく・味覚・触覚のすべてを挙げて、この世に執しゆうしてゐる。あるとき八戒はつぱいが俺われに言った

ことがある。「我々が天竺へ行くのはなんのためだ？ 善業を修して
来世に極楽に生まれんがためだろうか？ ところで、その極楽とは
どんなところだろう。蓮の葉の上に乗つかつてたゆらゆら揺れて
いるだけではしようがないじゃないか。極楽にも、あの湯気の立つ
羹をフウフウ吹きながら吸う楽しみや、こりこり皮の焦げた香ばし
い焼肉を頬張る楽しみがあるのだろうか？ そうでなくて、話に聞
く仙人のようになだ霞を吸って生きていくだけだったら、ああ、厭
だ、厭だ。そんな極楽なんか、まっぴらだ！ たとえ、辛いことが
あつても、またそれを忘れさせてくれる・堪えられぬ怡しさのある
この世がいちばんいいよ。少なくとも俺にはね。」そう言つてから八
戒は、自分がこの世で楽しいと思ふ事柄を一つ一つ数え立てた。夏
の木蔭の午睡。溪流の水浴。月夜の吹笛。春暁の朝寐。冬夜の炉辺

歡談。……なんと愉たのしげに、また、なんと数多くの項目を彼は数え立てたことだろう！ ことに、若い女人の肉体の美しさと、四季それぞれの食物の味に言い及んだとき、彼の言葉はいつまで経たつても尽きぬもののように思われた。俺はたまげてしまった。この世にかくも多くの恰たのしきことがあり、それをまた、かくも余すところなく味わっているやつがいようなどとは、考えもしなかつたからである。なるほど、楽たのしむにも才能の要いるものだと俺は気がつき、爾じ来らい、この豚を輕蔑けいべつすることを止やめた。だが、八戒はっかいと語ることが繁しげくなるにつれ、最近妙なことに気がついてきた。それは、八戒の享樂主義の底に、ときどき、妙に不気味なものの影がちらりと覗のぞくことだ。「師父しふに対する尊敬と、孫行者そんぎやうじやへの畏怖いふとがなかつたら、俺はとつづくにこんな辛つらい旅つらなんが止やめてしまつていたらう。」などと口では言

つてゐる癖に、実際はその享樂家的な外貌の下に戰々競々として薄氷を履むような思ひの潜んでゐることを、俺は確かに見抜いたのだ。

いわば、天竺へのこの旅が、あの豚にとつても（俺にとつても同様）、

幻滅と絶望との果てに、最後に縋り付いたただ一筋の糸に違ひないと思われる節が確かにあるのだ。だが、今は八戒の享樂主義の秘密

への考察に耽つてゐるわけにはいかぬ。とにかく、今のところ、俺

は孫行者からあらゆるものを学び取らねばならぬのだ。他のことを

顧みている暇はない。三蔵法師の智慧や八戒の生き方は、孫行者を

卒業してからのことだ。まだまだ、俺は悟空からほとんど何ものを

も学び取つておりはせぬ。流沙河の水を出てから、いったいどれほ

ど進歩したか？ 依然たる呉下の旧阿蒙ではないのか。この旅行に

おける俺の役割にしたらつて、そうだ。平穩無事のとくに悟空の行き

すぎを引き留め、毎日の八戒の怠惰を戒めること。それだけではないか。何も積極的な役割がないのだ。俺みたいな者は、いつでもこの世に生まれても、結局は、調節者、忠告者、観測者にとどまるのだらうか。けっして行動者にはなれないのだらうか？

孫行者の行動を見るにつけ、俺は考えずにはいられない。「燃え盛る火は、みずからの燃えていることを知るまい。自分は燃えているな、などと考えているうちは、まだほんとうに燃えていないのだ。」と。悟空の闊達無碍の働きを見ながら俺はいつも思う。「自由な行為とは、どうしてもそれをせぜにはいられないものが内に熟してきて、おのずと外に現われる行為の謂だ。」と。ところで、俺はそれを思うだけなのだ。まだ一歩でも悟空についていけないのだ。学ぼう、学ぼうと思いながらも、悟空の雰囲気を持つ術達いの大きさに、また、

悟空的なるものの肌合はたあいの粗あらさに、恐れをなして近づけないのだ。
実際、正直なところを言えば、悟空は、どう考えてもあまり有難ありがたい
朋輩ほうばいとは言えない。人の気持に思い遣やりがなく、ただもう頭からガ
ミガミ怒鳴り付ける。自己の能力を標準にして他人ひとにもそれを要求
し、それができないからとて怒かりつけるのだから堪たらない。彼は自
分の才能の非凡さについての自覚がないのだとも言える。彼が意地
悪わるくないことだけは、確かに俺たちにもよく解わかる。ただ彼には弱者
の能力の程度がうままく吞のみ込めず、したがって、弱者の狐疑こぎ・躊躇ちゆうちよ・
不安などにいつこう同情がないので、つい、あまりのじれれつたさに
疔癢かんしやくを起こすのだ。俺たちの無能力が彼を怒らせさせしなれば、
彼は実に人の善い無邪気な子供のよ様な男だ。八戒はいつも寐ねすご
したり怠なまけたり化け損そこなつたりして、怒られどおしてある。俺が比較

的彼を怒らせないのは、今まで彼と一定の距離を保っていて彼の前にあまりボ口を出さないようにしていたからだ。こんなことではいつまで経つても学べるわけがない。もつと悟空に近づき、いかに彼の荒さが神経にこたえようと、どんどん叱られ殴られ罵られ、こちらからも罵り返して、身をもつてあの猿からすべてを学び取らねばならぬ。遠方から眺めて感嘆しているだけではなんにもならない。

夜。俺は独り目覚めている。

今夜は宿が見つみならず、山蔭の溪谷の大樹の下に草を藉いて、四人がごろ寝をしている。一人おいて向こうに寝ているはずの悟空の軒が山谷に倒すばかりで、そのたびに頭上の木の葉の露がパラパラと落ちてくる。夏とはいえ山の夜気はさすがにうすら寒い。もう

真夜中は過ぎたに違いない。俺は先刻から仰向けに寐ころんだまま、木の葉の隙あいたから覗のぞく星どもを見上げている。寂しい。何かひどく寂しい。自分があの淋さびしい星の上にたった独りて立つて、まつ暗な・冷たい・なんにもない世界の夜を眺めているような気がする。星というやつは、以前から、永遠だの無限だのといふことを考えさせるので、どうも苦手にがてだ。それでも、仰向あかむいているものだから、いやでも星を見ないわけにいかない。青白い大きな星のそばに、紅あかい小さな星がある。そのずつと下の方に、やや黄色味を帯びた暖かそうな星があるのだが、それは風が吹いて葉が揺れるたびに、見えたり隠れたりする。流れ星が尾を曳ひいて、消える。なぜか知らないが、そのときふと俺は、三蔵法師さんそうほうしの澄んだ寂しげな眼を思い出した。常に遠くを見つめているような・何物かに対する憫あはれみをいつも湛たえて

いるような眼である。それが何に対する憫れみなのか、平生へいぜいはいつ
こう見当が付かないでいたが、今、ひよいと、判わかつたような気がし
た。師父しふはいつも永遠を見ている。それから、その永遠と対比
された地上のなべてのもの、の運命さだめをもはつきりと見ておられる。い
つかは来る滅亡ほろびの前に、それでも可憐かれんに花開こうとする歡智あちえや愛情なさけ
や、そうした数々の善きものの上に、師父は絶えず凝手じつと慙あはれみの
眼差まなざしを注いでおられるのではなからうか。星を見ていると、なんだ
かそんな気がしてきた。俺は起上あがって、隣に寐ねておられる師父の
顔を覗のぞき込む。しばらくその安らかな寝顔を見、静かな寝息を聞い
ているうちに、俺は、心の奥に何かポツと点火されたようなほの
温かさを感じてきた。

使用書体 欣喜堂 K〇ひさなが志安

組版 島崎肇則

公開 二〇一九年七月三一日

底本 「李陵・山月記・弟子・名人伝」角川文庫、角川書店

一九六八（昭和四三）年九月一〇日改版初版発行

一九八三（昭和五八）年九月三〇日改版二四版発行

入力 佐野良二

校正 かとうかおり

一九九九年二月九日公開

二〇一一年二月二七日修正

青空文庫作成ファイル

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.wakozon.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

浮

舟

泉

鏡
花

「浪花江の片葉の蘆の結ばれかかり——よいやさ。」

ど蹠踉として、

「これわいな。……いや、どっこいしよ。」

脱いで提げたる道中笠、一寸左手に持換えて、紺の風呂敷、桐油包、振分けの荷を両方、蝙蝠の憑物めかいて、振落しそうに掛けた肩を、自棄に前に突いて最一つ蹠踉ける。

「……解けてほぐれて逢う事もか。何を言やがる。……此方あ可い加減に溶けそうだ。……まつにかいあるヤンレ夏の雨、かい……とおいでなすつたかい。」

さつと沈めた浪の音。磯馴松は一樹、一本、薄い枝に、濃い梢に、

一ツずつ、翠、淡紅色、絵のような、旅館、別荘の窓灯を掛連ね、

松露が恋に身を焦す、紅提灯ちらほらと、家と家との間を透く、白

砂に影を落して、日暮の打水のまだ乾かぬ茶屋の葭簀も青薄、婦の

姿もほのめいて、穂に出て招く風情あり。此処は二見の浦づたい。

真夏の夜の暗闇である。この四五日、引続く暑さと云うは、日中

は硝子を焼くが如く、嚇と晴れて照着ける、が、夕風とどもに曇よ

りと、水も空も疲れたように、ぐったりと雲がだらけて、煤色の飴

の如く粘々と搔曇って、日が暮れると墨を流し、海の波は漆を畝ら

す。これでいて今夜も降るまい。癖に成って、一雫の風を誘う潮の

香もないのであった。

男は草鞋穿、脚絆の両脚、しゃんとして、恰も一本の杭の如く、

松を仰いで、立停って、……眺を返して波を視た。

「ああ、唄じゃねえが、一雨欲しいぜ……」

俄然がぜんとして額を叩いて、

「慌てまい。六ちゃん、いや、ちゃんと云う柄じゃねえ。六公、六でなし、六印、月六齋つきろくさいでいやあがら。ははははは。」

肩を刻んで苦笑いして、またふらふらと砂を踏み、

「野宿に雨は禁物でえ。」

その時躓つまずく。……

「これわいな！ 慌てまいとはこの事だ。はあ、松の根ツ子か。この、何でもせい。」

岸辺の茶屋の、それならぬ、渚の松の舫船ふね。——六蔵は投遣なげやりに

振った笠を手許てもとに引いて、屈腰かがみじしに前を透かすと、つい目の前に船首みよしが見える。

船は、櫂もなく艫もなくなしに、浜松の幹に繋いで、一棟、三階立は淡路屋と云う宏壮な大旅館、一軒は当国松坂の富豪、池川の別荘、清洒なる二階造、二見の浦の海に面した裏木戸の両の間、表通りへ抜路の浜口に、波打際に引上げてあつた。

夫女巖へ行くものの、通りがかりの街道から、この模様を視めたら、それも名所の数には洩れまい。舩に鱈は飛ばないでも、舩に蒼い潮の鱗。船は波に、海に浮べたかと思われる。……が藍を流した池のような浦の波は、風の時も、渚に近いこの船底を洗いはせぬ。戯れにもとづなたわむれの舩ふねを解いて、木馬のかわりにぐらぐらと動かしても、縦横に揺れこそすれ、洲走りに砂をすべ渡つて、水に攫さらわれるような憂うれいはない。

気の軽い、のん気な船は、件の別荘の、世に隔てを置かぬ、ただ

夕顔の杖ばかり、四ツ目に結った竹垣の一重を隔てた。濡縁越ぬれえんごしの座敷から聞え来る三味線の節の小唄の、二葉ふたは三葉みは、松の葉に軽く支えられて、流れもあえず、絹のような砂の上に漂っているのである。

二

「この何でもせい。……住吉の岸辺の茶屋に、よいやさ。」

ど風体ふうたい、恰好やぐざ、役雑やくざなものに名まで似た、因果小僧とも言いそうな這奴しやつ六蔵むくざうは、その舩ふなばたに腰を掛けた、が、舌打して、

「ちよッ面倒だ。宿銭どまりは鏝びたでお定さだまり、それ、」

ど笠を、すぼりと落し、次手ついでに振分の荷を取って、笠の中へ投げ込んで、

「いや、お泊りならばア泊らんせ、お風呂もどんどん湧いている、障子もこの頃はりかえて、畳もこの頃かえてある。——嘘を吐きやあがれ。」

空手を組んで、四辺を見たが、がツくりと首を振って、

「待てよ……青天井が黒光りだ。電は些ど気が無えがね、二見ヶ浦は千畳敷、浜の砂は金銀……だろう、そうだろそうだろ然うである。成程どんどん湧いていら、伊良子ヶ崎までたつぷりだ。ああ、しかし暑いぜ。」

腕まくりを肩までして、

「よく皆、瓦の下の、壁の裡へ入ってやがる。」

瓦の下、壁の裡、別荘でも旅館でも、階下も二階もこの温気に、夕風の潮を避け、南うけに座を移して、伊勢三郎が物見松に、月も

あらば盗むべく、かみじやま 神路山、あさまがたけ 朝熊嶽、五十鈴川、宮川の風にこがれて
いるらしい。もののけはい 氣勢も人声も、街道向はむき 賑かに、裏手には湯殿
の電燈のおくら 小暗きさえ、あかり 燈は海に遠かつた。

六蔵ニヤニヤと独笑して、

「お寝間のお伽てんごもまけにしてと——姉さん、真個ほんごかい、洒落しやれだぜ洒
落だぜ洒落じやねえ。入いらつしやい、お一方ひとかた、お泊とどでございますよ。

へい、お早いお着つぎさま様で、難有ありがとう存じます。これ、御濯おすすす足の水を早く
よ。あいあい、とおいでなさる。白地てぬぐいの手拭、紅たすきい襷たすきよ……柔やわらかな指
で水と来りや、俺たらいあ盥たらいで金魚こいに化けるぜ。金魚うや、金魚う。」

と可いい気な売声。

「はてな、紺なまずがすりに、紺の脚絆なまず、おかしな色の金魚だぜ。畜生め、
鯰なまずじやねえか。匆はねる処はは鮎やつだ奴やつさ。鮎やつだ、鮎やつだ、鮎やつ侍ふなざむれえだ。」

ど胸を揺つて、ぐつと反つたが、忽ち肩ぐるみ頭をすくめて、
「何を言やあがる。」

で、揚あしを左の股、遣違いにまた右て。燈は遠し、手探りを、何の気もなく草鞋を解いて、びたりと揃えて、トンと船底へ突込むと、殊勝な事には、手拭の畳んで持ったをスイと解き、足の埃をはたはたと払つて、臀で楫を取つて、ぐるりと船の胴の間にのめり込む。

「御案内引あいあい……」

ど自分で喚き、

「奥の離座敷だよ、……船の間——とおいでなすつた。ああ、佳い見晴、と言いてえが、暗くツて薩張分らねえ。」

勝手な事を吐くうちに、船の中で胡坐に成つた。が兎が權を押さな
いばかり、狸が乗つた形である。

「何、お風呂だえ、風呂は留めだ。こう見えても余り水心のある方じゃねえ。はははは、湯に水心も可笑いが、どんどん湧いてるは海だろう。——すぐに御膳だ。膳の上で一銚子よ。分ったか。脱落もあるめえが、何ぞ一品、別の肴を見繕つてよ、と仰せられる。」

と仰せられ、

「ああ、いい酒だぜ、忠兵衛のおふくろかい、古い所で……妙爛妙爛。」

と二つばかり額を叩く。……暢気さも傍若無人で、いずれ野宿の、ここに寝てしまうつもりでいよう。舩船を旅籠とより、名所を座敷にしたようなことを吐す。が。僅か一時ばかり前、この町通り、両側の旅籠の前を、うろついて歩行いた折は、早や日も落ちて、脚にも背にも、放浪の陰の漾った、見るからみじめな様子であった。

たそがれ
 黄昏に、御泊を待つ宿引女の、廂はずれの床几に掛けて、島田、
 まるまげ いちようがえし なで
 円鬘、銀杏返、撫つけ髪の夕化粧、姿を斜に腰を掛けて、浅葱に、
 白に、紅に、ちらちら手絡の色に通う、団扇の絵を動かす状、もの
 言う声も媚かしく傾城町の風情がある。

浦づたいなる掃いたような白い道は、両側に軒を並べた、家居の
 中を、あの注連を張った岩に続く……、松の蒔絵の貝の一筋道。

こおりみせ やすみぢやや
 氷店、休茶屋、赤福売る店、一膳めし、就中、鶉の鳴くように、
 けたたましく往來を呼ぶ、貝細工、寄木細工の小女どもも、昼から
 夜へ日脚の淀みに商売の逢魔ヶ時、一時鳴を鎮めると、出女の髪が
 黒く、白粉が白く成る。

優しい声で、

「もし、お泊りかな。」

「お泊りやすえ。」

彼方あつちでも、お泊りやす、此方こつちでも、お泊りやす、と愛嬌声の口許

は、松葉牡丹の紅である。

「泊るよ。」

其処そこへ、突掛つツけに 紺がすりの汗ばんだ道中どうちゆうを持って行くど、

「はい、お旅籠は上中下と三段にございますがな、最下等にいたし

ましても……」

何うどして、こんな旅籠へ一宿出来よう、服装みなりを見ての口上に違

ないから。

「何だ。無価た泊めたようと云うのじゃねえのか。」

「外ほかを聞いておくんなはれ。」

「指揮さしずは受けねえ。」と肩を揺つて、のっさり通る。

「お泊りやす。」

「俺か。」とまたずつと寄る。

「否うへ、違ちがいまんの。」

「状ざうあ見ろ、へへん。」

ど、半分白い目で天を仰いで、拗ねたようにそのまま素通すとおと。

この辺あたとて、道者宿、木賃泊りが無いではない。要するに、容子ようすの好よい婦人たはが居ぼて、夕ゆうをほの白く道中を招く旅籠では、風体の恁かくの如ごとき、君を客にはしないのである。

荷にも石瓦いしがわら、古新聞、乃至なにし、懐中ふでこは空からつぽでも、一度目指した軒を潜ひつて、座敷に足さえ踏掛ふんがくれば、鉾ひら子を倒し、椀わんを替え、比目魚ひらめ

だ、鯛だ、ど贅を言つて、按摩まで取つて、ぐっすり寝て、いざ出
発の勘定に、五錢の白銅一個持たないでも、彼はびくとも為るので
はなかつた。

針が一本——魔法でない。

この六でなしの六蔵は、元來腕利きの仕立屋で、女房と世帯を持
ち、弟子小僧も使つた奴。酒で崩して、賭博を積み、いかさまの目
ばかり装つた、己の名の旅双六、花の東都を夜遁げして、神奈川宿
のはずれから、早や旅銭なしの食いつめもの、旅から旅をうろつく
こと既にして三年越。

右様の勘定書に対すれば、洗つた面で、けろりとして、

「おう、仕立ものの用はねえか。羽織でも、袴でも。何にもなきや
経帷子を縫つて遣ら。勘定は差引だ。」

女郎屋の朝の居残りに遊女おんなども顔あを刺あたつて、虎口ここうを遁のがれた床屋がある。——それから見れば、旅籠屋や、温泉宿で、上手な仕立は重宝ちようほうで、六の名は七同然しち、融通ゆうずうは利き過ぎる。

尤もつとも仕事を稼かせぎためて、小遣こづかいのたしにするほどなら、女房を棄すてて流浪りうらいなんかしない筈。

からつけつの尻端折しりっぱしより、笠一蓋かさいちがいの着きたツ切雀きりすずめと云うも恥はかしい阿房鳥あほうどりの黒くろ装くろで、二見ふたみヶ浦うらに埒わを捜たづねして、

「お泊とまりりだ、お一人ひとりさん——旅籠りゆうろうは鏝びたでお定きまり、そりや。」と指さ二本ふた、出女でんなの目め前まへへぬいと出す。

誰たれが対手あいてに成なるものか、黙もくつて動うかす団扇うちやうせんの手は、浦風うらかぜを軒のきに誘さそつて、背後うしろから……塩花しおばな塩花しおばな。

四

六は門並六七軒。

風体と面構で、その指二本突出して、二両を二百に値切つても、怒つて喧嘩はしないけれど、誰も取合うものはなし。

いざ、と成れば、法もかく、手心は心得たが、さて指當つて、腹は空く、汗は流れる、咽喉は乾く、氷屋へ入る仕覚も無かつた。

すねた顔色、ふてた図体、そして、身軽な旅人の笠捌きで、出女の中を伸歩行く、白徒の不敵らしさ。梁山泊の割符でも襟に縫込んでいそうだった、晩の旅籠にさしかかった飢と疲労は、……六よ、怒るなよ……實際余所目には、ひよろついて、途方に暮れたらしく可哀に見えた。

この後を、道の小半町こはんちよう、嬉しそうに、おかしそうに、視ながめ視ながめ、片頬笑みをしながら跟ついて歩ある行あるいたのは、糊ゆのきいた白地の浴衣ゆかたに、絞へりの兵児帯無雑作へこにぐるりと捲まいた、耳許みみもとの青澄あざんで見えるまで、頭髪かみのけの艶つやのいい、鼻筋はなすねの通とつた、色の浅黒あさくろい、三十四五さんじゅうごの、すつきりとした男おとこで。何処どこにも白粉おしろいの影かげは見えず、下宿屋げしゆくの二階にがいから放ほう出した書生しよせいらしいが、京阪地きやうはんちにも東京とうきやうにも人ひとの知しつた、異辰吉いぢんきちと云いう名題なだいの俳優やくしや。

で、六むが砂まぶれの脚絆かきんをすじりもじつて、別荘べつしやうの門かどを通とつたのと、一足違いちあしちがいに、彼は庭下駄にわげたで、小石こいしを綺麗きれいに敷詰敷めた、間々あひあひに、濃のいと薄うすいと、すぐつて緋色ひいろなのが、やや曇曇つて咲さく、松葉牡丹まつばぼたんの花はなを拾ひろつて、その別荘べつしやうの表うらの木戸きどを街道かいだうへぶらりと出でた。

異いは時ときに、酔よざましの薬くすりを買かひに出でたのであつた。

客筋と云うのではない、松坂の富豪池川とは、近い血筋ほどに別懇こんな親類交際づきあい。東に西に興行の都度つど、日取の都合が付きさえすれば、伊勢路に廻って遊ぶのが習いで、別わかけて夏は、三日なり二日なり此処に來ない事はないのであつた。

今度も、別荘の主人が一所いっしょで、新道の芸妓お美津みつ、踊りの上手なかるたなど、取巻大勢とりまきと、他に土地の友だちが二三人で、昨日から夜昼なし。

向う側の官営煙草、兼ねたり葉屋へ、ずっと入つて巽が、

「御免よ。」

「はい、お出でなさいまし。」

唯と、側対かわむかいの淡路屋の軒前のきさきに、客待きやくまちうけの円鬻つつかかに突掛つて、六でなしの六蔵が、（おい、泊るぜえ）を遣らかす処。——考えても——

上り端あがには萌黄と赤と上草履をずらりと揃えて、廊下の奥の大広間には洋琴ピアノを備えつけた館と思え——彼奴きやつが風体。

傍見わきみをしながら、

「宝丹ほうたんはありますかい。」

「一寸ちやと、ござりまへんで。」

「無い。」

「左様さいで、ござりません。仁丹が可ようござりますやろ。」と夕間暮ゆらまぐれの薬くすり箆すりに手を掛ける、とカチカチと鳴る環かんとともに、額の抜上った首を振りつつ大おおな眼鏡越おきにじろりと見やる。

「宝丹が欲しいんだがね。」

「強えらい、お生憎あいにくさま様で。」

「お邪魔を。」

「何うだ、姉え、これだけじゃ。」

六は再指二本。

この、笠ぐるみ振分けを捲り手の一方へ、禪も見える高端折、脚絆ばかりの切草鞋で、片腕を揮ったり、挙げたり、鼻の下を擦ったり、べかこと赤い目を剥いたり、勝手に軒をひやかして、ふらふらと街道を伸して行くのが、如何にも舞台馴れた演種に見えて、異はうかうか独笑してその後続いたのである。

五

やがて一町出はずれて、小松原に、紫陽花の海の見える処であつた。

「君、君。」

何と思つたか、巽がその六でなしを呼んだのである。

「ええ、手前で、へい。」と云うと、ぎっくり腰を折って、膝の処へいちもんじ一文字に、つん、と伏せた笠の上、額を着けそうにして一ツおじぎをした工合が、丁寧と言えば丁寧だが、何と老人を食つた形に見える。

辰吉は片頬笑して、

「突然で失礼ですがね、何処どこ此処こゝと云つてるよりか、私の許どこへ泊とどつちや何うです。」

「へい、貴方あなたへ。」と、俯うつむ向けていた地薄な角刈かくがりの頭を擡おたげて、はぐらかす気か、汗ばんだか、手の甲で目を擦ぬって、ぎろりと巽の顔を見た。

「何うです、泊りませんか……ッたつてね、私も実は、余所の別荘に食客いせうろうと云うわけだが、大腹たいふくな主人でね、戸締りうぢりもしない内うちなんだから、一晚、君一人ぐらい、私が引受けて何うにもしますよ。」

「へええ、御串戯ごじょうだんを。」と道の前後をみまわして、苦笑いをしつつ、一寸頭ちよつづを搔いたは、扱さては、我が拳動ふるまいを、と思つたろう。

「串戯なもんですか。」

其処が水菓子屋の店前で——異は、別に他に見当らなかつたので、——居合す小僧に振向いて、最もう一軒菓子屋はないか、と聞いて、心得て出て、更めて言つた。

「真個ほんどうだよ、君。」

と笑いながら、……もう向うむいて行きかける六蔵むつぞうを再呼またんで、
「……今君が通つて来た、あの、旭館あさきと淡路屋たんろと云う大な旅館の間

にある、別荘に居るんだからね。」

「何とも難有ありがてえ思召おぼしめしで、へい。」

ど、も一度笠を出して面つらを伏せて、

「いづれまた……」

「ではさようなら。」

「御機嫌よろしゆう。」

二見ヶ浦を西、東。

思いも掛けない親船に、六はゆすぶった身体を鎮めて、足腰をし、
や、んと行く。

「兄さん、兄さん。」

「親方。」

ど若い女が諸声で、やや色染めた紅提灯、松原の茶店から、夕顔

別当、白い顔、絞の浴衣が、翻然と出て、六でなしを左右から。

「親方。」

「兄さん。」

「ええ、俺が事か。兄さん、どけつかったな。聞馴れねえ口を利きやあがる。幾千で泊める。こう、旅籠は幾千だ。」

「否、宿屋じゃありません。まあ、お掛けなさいな。」

「よう一寸。」

「何にも持たねえ、茶代が無えぜ。」

「何んですよ、そんな事は。」

「はてな、聞馴れねえ口を利きやあがる。」

「その代りね、今、親方、其処で口を利いたでしょう。」

「一寸、あの方は何と云って。矢張り普通の人間とおんなじ口の利

き方をなさる事？ 一寸さあ……」

と衣紋えもんを抜く。

六蔵解よめぬ面の眉しかを擡あめ、

「何だ、人間の口の利方きまかただ？……ほい、じゃ、ありや此処等ここらの稻荷様か。」

「まあ！」

「何だい？」

「あら、名題の方じゃありませんか、異さんと云う俳優やくしやだわよ。」

「畜生め、此奴等こいつら、道理で騒ぐぜ。むむ、素顔にやはじめてだ。」

と、遠くを行く辰吉のすらりとした、後姿に伸上る。

「可いわねえ。」と、可厭いやな目色めつき。

「黙ってる。俺もこう見えて江戸見だ。異の仮声こわいろがうめえんだ。」

……」

「あら、嬉しい。ひい！」と泣声を放ったり。

「馳走をしねえ、聞かして遣ら。二見中の鮑と鯛を背負って来や。

熱爛熱爛。」と大手をふった。

これじゃ頓て、鼻唄も出そうである。

六

「もしもし、貴方。」

と媚かしい声。

溝端の片陰に、封袋を切つて晃乎とする、薬の錫を捻くつて、伏目に辰吉のイんだ容子は、片頬に微笑さえ見える。四辺に人の居な

い時、こうした形は、子供が鉄砲玉でも買つて来たように、邪氣無あどけないものである。

水菓子屋で聞いた菓屋へ行くには、彼は、引返して別荘の前をまた通らねば成ならなかつた。それから路みちを折曲まつて、草生くさはえの空地を抜けて、まばら垣かきについて廻まわつて、停車場方角ステーションの、新開と云つた場末らしい、青田も見えて菓屋わらやのある。その中に、廂ひさしに唐辛子、軒だいたいに橙だいだいの皮を干した、……百姓家の片商売。白髪なの婆が目を光らして、見るなよ、見るなよ、と言いいそうな古納戸なめいた裡なかに、字も絵も解とらぬ大衝立おおついたてを置いた。

宝丹は其処にあつたが、不思議に故郷に遠い、旅にある心地がして、異はふと薄つかい疲労つかれさえ覺えた。道もやがて別荘の門から十町ばかり離れたろう。

右から左に弁ずる筈を、こうして手に入れた宝丹は、心嬉しく、珍らしい。

「あの、お菓をめしあがりますなら、お湯か何ぞ差上げますわ。」

唯、片側の一軒立、平屋の白い格子の裡に、薄彩色の裙をほかした、艶なのが、絵のように覗いて立つ。

黒髪は水が垂りそう、櫛巻の房りとした、瓜核顔の鼻筋が通って、

眉の恍惚した、優しいのが、中形の浴衣に黒繻子の帯をして、片手、

その格子に掛けた、二の腕透いて雪を欺く、下緊の浅葱に挟んで、

——玉の葱の茶室を起った。——緋の袱紗、と見えたのは鹿子紋の

撥袋。

片手に象牙の撥を持ったままで、異に声を掛けたのである。

菓の錫を持ったなり、浴衣の胸に掌を当てて、その姿を見たが、

通りがかりの旅人に、一夜を貸そうと云った矢先、巽は怪む気も
ないで、

「恐入りますな。」

「さあ何うぞ。」

と云つて莞爾にっこりした。が、撥ほつそを挙げて齧えくぼを隠すと、向うむきに格子
を離れ、細りした襟ほつその白さ、撫肩なでがたの媚なまめかしさ。浴衣の千鳥が宙に浮
いて、ふつと消える、どカチリと鳴る……何処かに撥を置いた音。

すぐに、上框あがりがまちへすつと出て、柱がくれの半身で、爪尖つまさきがほんのり
と、常夏とこなつ淡く人を誘う。

巽は猶なお関かまわず格子を開けた。

「じゃあ御免なさいよ。」

と、土間に釣った未だ灯を入れない御神燈に蔦の紋、鶴沢宮歳つるさわみやととしと

あるのを読んで、ああ、お師匠さん、と思う時、名の主は……早や次の室まの葭戸越よしどごし、背姿うしろすがたに、薄りうつつと鉄瓶の湯気をかけて、一処ひとどころ浦の波が月に霞んだようであった。

「恐入ります。」

おんな 婦は声を受けて、何となく、なよやかな袖を揺がしながら、黙つて白湯を注いでいる。

「拝借します。」

と巽は其処の上框へ。

二つ三つ、すらすらと畳触り。で、遠慮したか、葭戸の開いた敷居越しなに、撓しなうような膝を支ついて、框の隅の柱を楯たもとに、少し前屈みに身を寄せる、と繻子しゅすの帯がキクと鳴る、心の通う音である。

「温湯ぬるまゆにいたしましたよ、水が悪うございますから。」

「……御深切に。」

取った湯呑は定紋着、蔦を染めたが、黄昏に、薄りと蒼ずむと、
宮歳の白魚の指に、撥袋の緋が残る。

「ああ、私。」と、ばらりと落すと、下褌の端にちらめいて、
瞼に颯と色を染めた、二十三四が艶なる哉。

七

「私、何うしたら可いでしょう。極りが悪うござんすわ。」

と婦は軽く呼吸を継いで、三味線の糸を弾くが如く、指を柱に刻
みながら、

「私、お知己でもないお方をお呼び申して、極りが悪いものですか

ら、何ですか、ひとりで慌てしまって、御茶台にも気が付きません。

……そんな自分の湯呑でなんか。……失礼な、……まあ、何うしたら可うございましょうね。」

と襟を圧えて俯向いて、撥袋を取って背後に投げたが、留南奇の薫が颯として、夕暮の奇しき花、散らすに惜しき風情あり。辰吉は湯呑を片手に、

「何うしまして、結構です。難有う。そしてお師匠さん。貴女の芸にあやかりましょう。」

「存じません。」

と、また一刷毛験を染めつつ、

「人様御迷惑。蚊柱のように唸るんでございますもの、そんな湯呑には子子が居ると不可ません。お打棄りなさいましよ。唯今、別の

を汲替どりかえて差上げますから。」と片手をついて立構たちかます。

辰吉は圧おさえるように、

「ああ、しばらく。貴女あなたがそんな事をお言いなすつちや私は薬が服めなく成ります。この図体ずたいで、第一、宝丹を舐めようと云う柄じやないんですもの。鯨しやちや鯨と掴合つかあって、一角丸ウニコオルを棒で嚙かろうと云うまどろすじやありませんか。」

婦おんなが清すずしい目で、口許くちに嬉うれしそうな笑を浮うべ、流眇ながしめに一ちよつと寸見すんけんて、

「まあ、そうしてお商売は、貴方。」

「船頭ふねづかでさあね。」

「一寸！ 池川さんのお遊び道具の、あの釣船ばかりお漕ぎ遊ばす

……」

お師匠さんは御存じだ。

「雑ざつど、人違まなじりいですよ。」と眦まなじりを伏せてぐつと呑んで、
「申兼あうしかねましたが、もう一杯ちよう。丁ちようど咽喉のどが渴かわいて困こまっていた、と云いう処ところです。」

艶えんなお師匠しせうさんは、いそいそして、

「お出いばなにいたしまししょうね。」

「菓かを服のみました後のちですから、お湯ゆの方が結構けいこうです——何なにですか、お稽古けいこは日が暮くれてからですか。ああ、いや、それで結構けいこう。」

辰吉たけきちは錆さびのある粋いきな笑わらいで、

「ははは、些ちど厚あかましいようですな。」

「沢山たんどおっしゃいます。——否ちがえ、最もう片手間かたての、あの、些少ほんの真似まね事ことでございます。」

「お呼び申せば座敷ざしきへも……？」

「可厭いやでございますねえ、貴方。」

と片手おがみの指が撓しなって、

「そんな御義理を遊ばしちや、それじゃ私申訳がありません。それで無くってさえ、お通りがかりをお呼び申して、真個ほんどうに不躰ぶしつげだ、と極りが悪うございましてね、赫々かつかつ逆上のぼせますほどなんですもの。」

身を恥じるように言訳がましく、

「実は、あの、小婢こひめを買ものに出しまして、自分でお温習せからじでもしましようか、と存じました処が、窓の貴方しのぶ、葱しの露のの、大きな雫が落ちますように、螢が一つ、飛ぶのが見えたんでございますよ……」

「螢。」

と巽は、声に応じて言返した。

「はあ、時節は過ぎましたのを、つい、珍しい。それとも一ツ星の

光るお姿か知ら、とそう思つて立つたんですが、うっかり私、撥な
んか持つて、螢だったら、それで叩きますつもりだったんでしよ
うかねえ。そんな了簡で、螢なんて、蜻蛉とんぼか蝙蝠こうもりで沢山でございます。」

蜻蛉は寝たから御存じあるまい、軒前を飛ぶ蝙蝠が、べかこ、と
赤い舌を出して、

「これは御挨拶だ。」

ひらり
と翻然やと行る。

八

「それですから、ふつと、その格子を覗きました時は、貴方の御手おて
の御葉の錫をば、あの、螢をおつかまえなすつた、と見ましたんで

すよ。」

器は巽の手に光る。

彼は掌たなそこに据えて熟じつと視みた。

「まあ、お塩梅が沢山たんと悪いんじやありませんか、何しろお上りなすつて、お休みなさいましたら何うでしょう。貴方、御気分は如何です。」と、摺寄つて案じ顔。

巽は眉の凍とした顔を上げて、

「否ちとえ、気分は初めから然さしたる事も無いのです。宝丹は道楽に買った、と云つて可いくらいなんですが。」

爾時そのとき、袂つづへ突込んで、

「今の、螢には、何だか少し今度は係合かかりあがありそうですよ——然うですか、螢を慕つてお師匠さん、貴女格子際へ出なすつたんだ。」

「貴方のお口から、そんな事、お人の悪い、慕って、と云う柄じゃありません。」

「まあまあ……ですがね、私が宝丹を買いに出たはじまりが、矢張り螢ゆえに、と云ったような訳なんですよ。ふつと、今思出したんです……」

「へええ。」と沈んだような声で言う、宮歳は襟を合せた。

「今度、当地こちらへ来ます時に、然うです。興津おきつ……東海道の興津に、夏場遊んでる友だちが居て、其処へ一日寄ったもんです。夜汽車が涼しいから、十一時過ぎでした、あの駅から上りに乗ったんですよ、右の船頭が。」

「……はあ、可ようございます。ほほほ。」と笑わらいが散ちらぬまで、そよそよ、と浅葱の団扇の風を送る。指環の真珠まゆが且かつ涼しい。

「頂戴しますよ。」

と出してあつた薄お納戸の麻の座蒲団をここで敷いて、

「小さな革靴一つぶら下げて、プラットホームから汽車の階段を踏んで、客室の扉を開けようとするど、ほたりど。」

異は口許の片頬をおさ圧えて言つたのである。

「虫が来て此処へ留つたんです、すつと消え際しなの弱い稲妻か、と思
いました。目前に光つたんですから吃驚びっくりして、邪険に引払うど、最
う汽車が動出す。」

妙にあどが冷つくのです、濡れてるようにね、擦つて見ても何と
もないので。

忘れていると、時々冷い。何か、かぶれでもしやしないかしら、
螢だと思つたものの、それとも出合頭であいがしらに、別の他の毒虫でもあり

はしないかと、一度洗面台へ行つて洗いましたよ。彼処あそこで顔を映して見ても別に何事もないのです、そのうちに紛れてしまう。それでモ汽車で、うとうとと寝た時には、清水だの、川だの、大な湖だの、何でも水の夢ばかり切々に見まきれきれしてね、繋ぎに目が覚める、と丁ど天龍川の上だったり、何処かの野原で、水が流れるように虫の鳴いてた事もありましたがね。最う別に思出しもしないで、つい先刻さっきまでそれ切りで済んでいました。

今しがたです……

池川さんの、二階で、」

と顔を見合せた時、両方で思わず頷く様な瞳を通わす、ト仄えた手を膝にして巽はまた笑を含んで、

「……釣舟ちやぶだいにしておきましょう、その舟のね、表二階の方へ餉台を

繋いで、大勢で飲酒ながら遊んでいたんですが、景色は何とも言えないけれど、暑いでしょう。この暑さと云ったら暑さが重石に成つて、人間を、ずんと上から圧付けるようです。窓から見る松原の蔭簀茶屋と酸漿提灯と、その影がちらちら砂に溢れるような緋色の松葉牡丹ばかりが、却つて目に涼しい。海が焼原に成つて、仕方がない、それじゃ生命も続くまいから、陸の方の青い草木を水にしておけ、と天道の御情けで、融通をつけて下さる、と云つた陽気ですからね。」

「まあ、随分、ほほほ、もう自棄でございますわね、こんなに暑くつちや。」

その癖、見る目も涼しい黒髪。

九

「些^{ちっ}ども涼しい心持に成りたくッて、其処等の木の葉の青いのを熟^{じっ}と視ていて、その目で海を見ると、漸^{やっ}と何うやら水らしい色に成ります。

でないど真赤ですぜ。日盛^{ひざかり}なんざ火が波を打っているようでしょう。——さあ、然うなると不思議なもので今も言つた通りです。潮煮^{うしお}の鯛の目、鮑の蒸したのが涼しそうで、熱爛の酒がヒヤリと舌に冷いくらい——貴女が云つた自棄^{やけ}ですか——

夕方、今しがた一時^{ひとしきり}は、風の絶頂で口も利けない。餉台を囲んだ人の話を、じりじりと響くように思つて、傍目も触らないで松原の松を見ていて、その目をやがて海の上にかう返すと、

異は目を離して指ゆびさしたが、宮歳みやとしの顔を見て、さびた声して低く笑った。

「はははは、ベツかつこをするんじやありませんよ——。然うするど、海の色が朝からはじめて、颯さつと一面に青く澄んで、それが裏座敷まわりえんの廻縁まわりえんの総欄干すだれへ、ひたひたと簾すだれを流すように見えましてね、縁側へ雪のような波の裾すそが、すつと柔かに、月もないのに光を誘って、遙かの沖から、一よせ、寄せるような景色でした。

悚ぞつと涼しく成ると、例の頬辺ほつぺたが冷りひやとしました、螢の留とどった処ところです。——裏を透して、口の裡うちへ、真珠で毛含けいんだかと思う、光るよ
うに胸へ映うつりました。」

敷居もたに凭もたれかかり、団扇あふぎを落して聞いていた婦おんなは、膝の手を胸へ引いて、肩を細く袖を合せた。

「可厭いやな心持じゃなかつたんです——それが、しかし確たしかに、氷を一片きれ、何処かへ抱いたように急に身を冷して、つるつると融とるらしく、脊筋から冷い汗が流れました。香においがします、水のような、あの、螢の」。

月の柳の雫でも夜露となれば身に染みる。

「私は何かに打たれたように、フイと席を立てて戸外そとへ出ました。まだ明い。内の二階で、波ばかり、青く欄干にかかったようには、暮れてはいません。

名所図絵にありそうな人通りを見ていると、最もう何かも忘れました。が、宝丹は用心のために、柄にもない船頭が買ったんですが。

今の螢のお話で、無遠慮に御厄介くわっに成りました。申訳にもと、思いますから、——私も、無理に附くっ着けたらしいかも知れませんが、

螢の留ったお話をしたんです。」

ど半ば湯呑のあとを飲むと、俯ふしめ目に紋を見て下に置いた。彼は帰りかけの片膝を浮かしたのである。

唯ただ、呼吸いきを詰めて、

「貴方。」

「え。」

余り更まつた婦おんなの氣に引入れられて驚いた体ていに沈んで云った。

婦おんなは肩を絞るように、身をしめた手を胸に、片手を肱に掛けながら、

「螢じゃありませんわ。螢じゃありませんわ。」

「何がですか。」

「そりゃ、あの……何ですよ、屹きつと……そして、その別荘のお二階

へ、沖の方から来ましたって、……蒼い、蒼い、蒼い波は。」

柱の姿も蒼白く、顔の色もおもかげだ倂立って、

「お話を伺いますうちに、私は目に見えますようで。そして、跡を、貴方の跡を追って浪打際が、其処へ門まで参っているようですよ。」

ど、黒繻子の帯の色艶やかに、夜を招いてのびあが伸上る。

白い犬が門を駈けた。

辰吉は腰を掛けつつ、思わず足を爪立てた。

十

「貴方、その欄干にかかりました真蒼な波の中に、あの撫子の花が

一束流れますような、薄い紅色の影の映ったのを、もしか、御覽な
さはりはしませんか。」

……と云う、瞳の色の美しさ、露を誘って明いまで。その色に誘
われて、婦が棄てた撥袋の鏡台の端に掛ったのを見た。

我にもあらず茫と成って、

「彼処に見える……あれですか。」

「否、あんなものじゃありません。」とやや氣組んで言う。

「それでは?……」

「否、緋の色なんです。——あの時あの妓——は緋の長襦袢を着て
いました。月夜のような群青に、秋草を銀で刺繡して、ちらちらと
黄金の露を置いた、薄いお太鼓をがつくりとゆるくして、羅の裾を
敷いて、乱次なさったら無い風で、美しい足袋跣足で、そのままス

ツど、あの別荘の縁を下りて、真直まっすぐに小石の裏庭を突切つツキると、葉のまばらな、花の大きなのが薄化粧して咲きました、」と言いう……

大輪の雪は、その襟を載せる翼であつた。

「あの、夕顔の竹の木戸に、長い袂も触れないで、細ほっそりと出たでしょう。……松の樹の下を通る時は、遠い路を行くようでした。舟の縁へりを伝つわると、あれ、船首みよしに紅い扱帯しじきが懸る、ふらふらと蹠よろけ踏ふたんです……酷く酔つていましたわね。

立直つた時、すつきりした横顔に、纏もつれながら、島田鬻しまだも姿すがたも据すわりました。

私はその時、隣家の淡路館の裏にあります、ぶらんこを掛けました、柱の処ところで見みていたんですよ、一昨年ですわね、——巽すすきさん。」

ど、然しかも震ふるえを帯おびた声こゑで、更さらめて名なを呼よんで、

「貴方に焦れて亡く成りました、あの、——小雪さん——の事ですよ。」

実に、それは、小雪は伊勢の名妓であつた。

辰吉は、ハツと氣を打つて胸を退いた。片膝揚げつつかまぢ櫃を背後へ、それが一浪乗つて揺れた風情である。

褌に曳いたも水浅葱、団扇の名の深草ならず、宮歳みやとしの姿も波に乗つてぞ語りける。

「不思議ですわね、あの時、海が迎いに來て、渚が、小雪さんに近く成ると、もう白足袋が隠れました。蹴出しけだの褌に、藍がかかつて、見渡す限り渚が白く、海も空も、薄い萌黄でござんした。

其処すらりに唯一人、あの妓ひどが立たつたんです。筭こしがいがキラキラすると、脊すぢの嫋娜すらりとした、裾の色の紅くれなゐを、潮が見る見る消して青くします。浪

におされて、羅は、その、あの蹴出しにしつとり離れて、取乱したようですが、ああした品の可い人ですから、須磨の浦、明石の浜に、緋の袴で居るようでした。」

——驚破泳ぐ、どその時、池川の縁側では大勢が喝采した。——

「あれあれ渚を離れる、と浪の力に裾を取られて、羅のそのまんま、一度肩まで浸りましたね。衝と立つ時、遠浅の青畳、真中とも思うのに、錦の帯の結目が颯と落ちて、夢のような秋草に、濡れた銀の、蒼い露が、雫のように散ったんです。

まあ、顔が真蒼、と思うと、小雪さんは熟と沖を凝視めました、——其処に——貴方のお頭と、真白な肩のあたりが視えましたよ。

近所を漕いだ屋根舟の揺れた事！

貴方は泳いで在らしたんです。

真裸の男まじりに、三四人、私の知った芸者たちも五六人、ばらばらと浜へ駆けて出る。中には舫かやった船に乗って、両手を挙げて、呼んだ方もござんした、が、最もうその時は波の下で、小雪さんの髪が乱れる、と思う。海の空に、珠かんざしの簪の影かしら、晃きら々一ツ星が見えました。

十一

「その裸はだか体なのは別荘の爺やさんでございましたってね。」

「さよう治平と云う風呂番です。」と言いながら、異おちての面めんは面めんの如く瞳が据たつた。

灯ともしなき御神燈は、暮迫る土間の上に、無紋しらはりの白張ほろに髻ほら髻ふつする。

「爺さんが海へ飛込んで、鉛の水を搔くように、足搔いて、波を分けて追掛けましたわね。」

丁ど沖から一波立てて、貴方が泳返しておいでなさいます——

あとで、貴方がお話しなすったって……あの、承りましたには、仰向けに成って、浪の下の小雪さんが、……嘸ぞ苦しかったでしょう、乳を透して緋の紅い、其処の水が桃色に薄りと搦んでいる、胸を細く、両手で軽く襟を取って、披けそうにしていたのが、貴方がその傍にお寄りなさいました煽りに、すつと立って、鬚に水をかぶって、貴方の胸へ前髪をぐちちより、着けました時、あの、うつくしい白足袋が、——丁ど咽喉の処へ潮を受けてお起ちなすった、——貴方の爪先へ、ぴたりと揃った、と申すじゃありませんか。」

異は框をすつくと立った！

「……吃驚なすって、貴方は、小雪さんの胸を敷いて、前へお流れなさいましたってね。」

「そして驚いて水を飲んだ、今も一斉に飲むような気がします。」と云う顔も白澄むのである。

「其処を爺さんが抜切って、小雪さんを抱きました。ですけれども、最うその時、あの妓の呼吸は絶えていたのです——あの日は、小雪さんは、大変にお酒を飲んでいたんですってね、茶碗で飲んで、杯洗まであげたんだそうですね。深酒の上に、急に海へ入ったもんですから、血が留ってしまっただけでしょう。」

そして、死体に成ってから、貴方のお胸に縫着いたんじゃないやありませんか、海の中で、」

と膝を寄せる、襟が流れて、婦は巽の手を取った。

指が触ると、掌に、婦の姿は頸の白い、翼の青い、怪しく美しい鳥が留つたような気がして、巽の腕は萎えたる如く、往来に端近な処に居ながら、振払うことが出来なかつた。……四辺を見るとき、次の間の長火鉢の傍なる腰窓の竹を透いて、其処が空地らしく幻の草が見えた。

「巽さん。」

「……………」

「あの、風呂番の爺さんは、そのまま小雪さんを負い返して、何しろ、水浸しなんですから、すぐにお座敷へは、とそう思ったんでしよう。一度、あの松に舫つた、別荘の船の中へ抱下しましたわね。乗に浜も美しい……小雪さんの裾を長く曳いた姿が、頭髪から濡れてしおしおと舷に腰を掛けました。あの、白いと朧、蒼いと朧玉の

ように澄んだ顔。紅も散らない唇から、すぐに、吻と息が出ようと、誰も皆思ったのが、一呼吸の間もなしにバツタリと胴の間へ、島田を崩して倒れたんです。

お浴衣じゃありましたけれど、其処にお帯と一所に。」

と婦は情に堪えないらしく、いま、巽の帯に、片頬を熟ど。……一息して、

「貴方のお召ものが脱いで置いてありました。婦の一念……最うそれですもの。……螢はお迎いに行つたんですよ。欄干にかかりました二見ヶ浦の青い波は、沖から、逢いに來たんです。

不便とお思いなさいまし。小雪さんは一言も何にも口へは出さないで、こがれ死をしたんです。

素振、気振が精一杯、心は通わしたでしょうのに、普通の人より、

色も、恋も、百層倍、御存じの貴方でいて、些ちつとも汲んでお遣んなさらない！——否いらいえ、小雪さんの心は、よく私が存じております。——

俺は知らない、迷惑だ、と屹きつと貴方は、然そうおつしやいまいしょうけれど、芸妓つとめしたつて、女ひとですもの、分けて、あんな、おどなしい、内気な小雪さんなんですもの、打ちつけに言出せますか。

察しておいで遊ばしながら、——いつも御贔屓おきにいりを受けていましたものですから、池川さんの、内証おきにいりの御寵妓おきにいりでもあるようにお思いなすつて、その義理で、……あれだけに焦れたものを、かなえてお遣んなさらない。……

堅気はそうじゃあござんすまい、こうした稼業はかの果敢かい事は、金子かねの力のある人には、屹きつと身を任せている、と思われます。

御酒の上のまま事には、団扇と枕を寝かしておいて、釣手を一ツ

貴方にまかして、二人で蚊帳も釣りましたものを。」……と言う。

その蚊帳のような、海のような、青いものが、さらさらと肩にかかる、と思うと、いつか我身はまた框に掛けつつ、女の顔が弗ふっと浮いて、空から熟じっと覗いたのである。

十二

「これが俳優やくしやなの。」

「まあ。」

しよろしよろ、浪が颯なぶるような、ひそひそと耳に囁く声。

松原の茶店の婦おんなの、振舞酒に酔い痴れて、別荘裏なる舫船ふかふねに鼻唄で踏反ふんぞって一寝入りぐツと遣った。が、こんな者に松の露は掛るまい、夜気にこそぐられたように、むずむずと目覚めた六蔵。胴の間
に仰向けで、身うちが冷える。唯と、野宿には心得あり。道中笠を取

つて下腹へ当あてがって、案山子あかしが打倒ぶたれた形でいたのが。——はじめは別荘の客、異辰吉が、一夜の宿をしようと言った、情ある言ことばを忘れず、心に留めて、六が此処に寝たのを知って、（船に苦くるを聳ふいてくれるのじゃないか。）と思つた。

舷ふなばたへ、かたかたと何やら嵌はめ込む……

その嵌めるものは、漆塗の艶やかな欄干のようである、……はてな、ひそめく声は女である。——

うまれながらにして大好物。寝た振でいて目を働かすと、舷に立かかつて綺麗な貝の形が見える、大きな蛤。

それが、その貝の口を細く開いた奥に、白銀しろがねの朧なる、たとえば真珠の光があつて、その影が、幽かすかに暗夜やみよに、ものの形を映出うつしたす。

「芸妓が化けたんだ、そんな姿で踊おどっても踊おどっていたらう。」

時に、そんなのが一個ひとつではない。左舷の処にも立っている。これも同じように、舷へ一方から欄干らしいものを嵌めた、かたり、ど響く。

外にもまだ居る……三四人、皆おなじ蛤の姿である。

「祭礼まつりの揃そろかな、蛤提灯——こんなのに河豚さざえも栄螺さざえもある、畑はたけの毛けのじゃ瓜うりもあら。……茄子なすびもあら。」

但しその提灯ていとうを持つているものの形は分らぬ。が、蛤の姿である……と云うのが、衣服きもの、その袖、その帯おビと思ふ処ところがいずれも同じ蛤で、顔と見るのが蛤で、目鼻と思ひ、口と思ふのが蛤で、そして灯ともしびが蛤である。

襟えりか袖かであるらしく、且つ暗やみの綾あやの、薄紫うすむらさきの影かげが籠かごむ。

時にかたかたと響いて、二三人で捧たもげ持もつた氣勢けいせいがして、婦おんなの袖

の香立たち蔽おほい、船に柱の用意があつて、空を包んで、トンと据えたは、
屋根船の屋根めいて、それも漆の塗つやの艶、星の如き唐草の蒔絵が散
つた。左舷右舷も青貝摺あおがしずり。

六蔵は雛壇で見えて覚えのある車のようだ、と偶ふと思ふ。

時に、蛤が口を開いた。否いや、提灯が、真珠の灯を向けたのである、
六の顔へ——そして女の声で言った。

「これが俳優やくしやなの？」

「まあ。」

「醜きたない俳優やくしやだわね。」

——ままにしろ、此奴等こいつら——と心の裡で、六蔵は苦り切る。

「まだ、来ていやしまいと思つたのに、」

「そして、寝ているんだもの、情じやうのない。」

「心中の対手あいての方が、さきへ来て寝ているなんて。」

「ねえ、」

と忖じて、呆れたように云った、と思うと、ざっと浪が鳴って、潮が退いたらしく寂寥ひっそりする。

欄干も、屋根も、はっと消えて、時絵も星も真の暗闇やみ。

直ぐに、ひたひた、と跽音あしおとして、誰か舷へ来たらしい。

透通うらみるような声が、露に濡れて、もの優しい湿うるみを帯びつつ、

「……巽さん。」

途端に、はっと衣の香かと、冷い黒髪かおりの薫かがした。

「ああれ、違って……違っていろいろ。」

十三

蛤の灯がほんのりと、再来またて……

「お退どきよ、退いておくれよ。」

「よう、お前。」

と言う。……人をつけ、蛤なんぞに、お前呼あにばわりをされる兄にい哥いでないぞよ。

「此処は、今夜用がある。」

「大事の処なんだから。」

「よう。」

「仕ようがない。ね、酔っばらつて。」

「臭い事。」

「憎らしい、松葉で突ついで遣りましょう。」

敏捷い、お転婆なのが、すつと幹をかけて枝に登った。呀、松の中に蛤が、明く真珠を振向ける、と一時、一時、雨の如く松葉が灌ぐ。

「お、痛。」

「何うしたの。」と下から云う。

松の上なが、興がった声をして、

「松葉が私を擽るわよ、おほほ、おほほ。」

「わはは。」と浜の松が、枝を揺つて哄と笑う。

「きヤッ。」と我ながら猿のような声して笑つて、六蔵はむつくと起きて、

「姉等、仕立ものの用はねえか。」と、きよとんとして四辺を視た。

浅葱を飜す白浪や。

燃ゆるが如き緋の裳、浪にすつくと小雪の姿。あの、顔の色、瞳の艶、——恋に死ぬ身は美しや、島田のままの星である。

蛤が六つ七つ、むらむらと渚を泳いで、左右を照らす、真珠の光。

凄じいほど気高い顔が、一目、怨めしそうに六蔵の面を視て、さ

しうつむいて、頸えり白く、羅の両袖を胸に犇ひしと搔かきあわ合す、と見ると浪が

打ち、打ち重つて、裳を包み、帯を消し、胸をかくし、島田鬻の浮

んだ上に、白い潮がさらり、と立つ。と磯際の高波は、何とてその

まま沖に退くべき。

颯と寄る浪がしら、雪なす獅子の毛の如く、別荘の二階を包んで、

真蒼まつきおに光る、と見る、とこの小舟は揺上つて、松の梢に、ゆらりと

乗るや、尾張を越して富士山が向うに見えて、六蔵素天辺すてつべんに仰天し

た。

這奴横紙を破つても、縦に舟を漕ぐ事能わず、剩え櫂あまつぎ櫂ろかいもない。

「わああ、助けてくれ、助船たすけぶね。」

「何うしました、何うした。」

人目を忍んで、暗夜やみよを宮歳みやとしと二人で来た、巽は船のへりに立つと、

突然いきなり跳起きて大手を拵たてげて、且つ船から転がり出した六蔵のために

驚かされた。

菩提所の——巽は既に詣ではしたが——其処ではない。別荘の釣

舟は、海に溺れた小雪が魂をのせた墓である。

「小雪さんを私と思つて。」……

あの、船で手を取つて、あわれ、生命掛けた恋人の、口ずから、切めて、最愛いとしいい、と云つて欲ほしい、可哀相とだけも聞かし給え。

御神燈は未だ白かったのに、夜の暗さ、別荘の門、街道も寝静まる、夢地を辿る心地して、宮歳のかよわい手に、辰吉は袖を引かれて来たのであった。

「へい、仕立ものの御用はねえかね。」

きよろん、とした六蔵より、巽が却って茫然とした。

宮歳の姿は、潮の香のただよ漾う如く消えたのである。

別荘の主人池川の云うのには、その宮歳は、小雪と姉妹のように仲のよかった芸妓である。

内証ながら、山田の御師おし、何某なにがしにひかされて、成程、現に師匠をして、が、それは、山田の廓、新道の、俗に螢小路と云う処に媚なまめかしく、意気である。

言語道断、昨夜ゆうべ急に二見ヶ浦へ引越して来る筈はない！

扱て翌朝の事であつた。

電話で、新道の一茶屋へ、宮歳の消息を聞合せると、ぶらぶら病で寝ていたが、昨日急に、変が變つて世を去つた。

——写真を抱いていましたよ、死際に薄化粧して……異さんによろしく……——

その時、別荘の座敷の色は、二見ヶ浦の、海の蒼いよりも藍であつた。

簾に寄る白浪は、雪の降るより尚お冷い。

その朝、六歳も別荘の客の一人であつた。が、お先ばしりで、衆ひとど一所ところに、草の径みちを、幻の跡を尋ねた——確に此処ぞ、と云う処に、常夏がはらはら咲いて、草の根の露に濡れつつ、白檀の蒔絵の、あわれに潮にすさんだ折櫛が——その絵の螢が幽こもりに照つた。

松に舫おみなえしつた釣舟は、主人あるじの情なさけで、別荘の庭に草を植え、薄、刈萱かるかや、女郎花おみなえし、桔梗ききょうの露に燈籠を点して、一つ、二見の名所である。

（『新小説』一九一六「大正五」年四月号）

使用書体 欣喜堂 KOにしき陳起

組版 島崎肇則

公開 二〇一九年七月三一日

底本 「文豪怪談傑作選・特別篇 鏡花百物語集」

ちくま文庫、筑摩書房

二〇〇九(平成二一)年七月一〇日第一刷発行

初出 「新小説」

一九一六(大正五)年四月号

※「一寸」に対するルビの「ちやと」と「ちよつと」の混在は、底本通りです。

入力 門田裕志

校正 砂場清隆

二〇一八年九月二八日作成

青空文庫作成ファイル

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.wozok.or.jp/>) (<http://di.gutenberg.org/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

たけくらべ

樋口一葉

廻れば大門の見返り柳いと長けれど、お齒ぐる溝に燈火うつる三階の騒ぎも手に取る如く、明けくれなしの車の行來にはかり知られぬ全盛をうらなひて、大音寺前と名は佛くさけれど、さりとは陽氣の町と住みたる人の申き、三嶋神社の角をまがりてよりは是れぞと見ゆる大厦もなく、かたぶく軒端の十軒長屋二十軒長や、商ひはかつふつ利かぬ處とて半さしたる雨戸の外に、あやしき形に紙を切りなして、胡粉ぬりくり彩色のある田樂みるやう、裏にはりたる串のさまをかし、一軒ならず二軒ならず、朝日に干して夕日に仕舞ふ手當ことぐしく、一家内これにかゝりて夫れは何ぞと問ふに、知らずや霜月西の日例の神社に欲深様のかつぎ給ふ是れぞ熊手の下ごし

らへといふ、正月門松とりすつるよりかゝりて、一年うち通しの夫
れは誠の商賣人、片手わざにも夏より手足を色どりて、新年着はるぎの支
度もこれをば當てぞかし、南無や大鳥大明神、買ふ人にさへ大福を
あたへ給へば製造もとの我等萬倍の利益をと人ごとと言ふめれど、
さりとは思ひのほかなるもの、此あたりに大長者のうわさも聞かざ
りき、住む人の多くは廓者くるわものにて良人は小格子の何とやら、下足札そ
ろへてがらんがらんの音もいそがしや夕暮より羽織引かけて立出れ
ば、うしろに切火打かくる女房の顔もこれが見納めか十人ぎりの側
杖無理情死しんぢゆうのしそこね、恨みはかゝる身のはて危ふく、すはと言
はゞ命がけの勤めに遊山ゆさんらしく見ゆるもをかし、娘は大籬おほまがきの下新造したしんぞう
とやら、七軒の何屋が客廻しとやら、提燈かんばんさげてちよこちよこ走り
の修業、卒業して何にかなる、とかくは檜舞臺と見たつるもをかし

からずや、垢ぬけのせし三十あまりの年増、小ぎつぱりとせし唐棧
ぞろひに紺足袋はきて、雪駄ちやらく、忙がしげに横抱きの小包は
とはでもしるし、茶屋が棧橋とんと沙汰して、廻り遠や此處からあ
げまする、詭へ物の仕事やさんと此あたりには言ふぞかし、一體の
風俗よそと變りて、女子おなごの後帶きちんとせし人少なく、がらを好み
て巾廣の卷帶、年増はまだよし、十五六の小癩ほいづきなるが酸漿ほいづきふくんで
此姿なりはと目をふさぐ人もあるべし、所がら是非もなや、昨日河岸店
に何紫の源氏名耳に残れど、けふは地廻りの吉と手馴れぬ焼鳥の夜
店を出して、身代たゝき骨になれば再び古巢かみさまへの内儀姿、どこやら
素人よりは見よげに覺えて、これに染まらぬ子供もなし、秋は九月
仁和賀にわかの頃の大路を見給へ、さりとは宜くも學まなびし露八ろはちが物眞似、
榮喜えいきが處作しよ、孟子の母やおどろかん上達の速やかさ、うまいと褒め

られて今宵も一廻りと生意氣は七つ八つよりつのもりて、やがては肩に置手ぬぐひ、鼻歌のそり節、十五の少年がませかた恐ろし、學校の唱歌にもぎつちよんちよんと拍子を取りて、運動會に木やり音頭もなしかねまじき風情、さらでも教育はむづかしきに教師の苦心さこそと思はるゝ入谷いりやぢかくに育英舎とて、私立なれども生徒の數は千人近く、狭き校舎に目白押の窮屈さも教師が人望いよくあらはれて、唯學校と一ト口にて此あたりには呑込みのつくほど成るがあり、通ふ子供の數々に或は火消鳶人足、おとつさんははねばし刎橋の番屋に居るよと習はずして知る其道のかしこさ、梯子のりのまねびにアレ忍びがへしを折りましたと訴へのつべこべ、三百といふ代言の子もあるべし、お前の父さんは馬だねへと言はれて、名のりや愁らき子心にも顔あからめるしほらしさ、出入りの貸座敷いの祕藏息子

寮住居に華族さまを氣取りて、ふさ付き帽子面もちゆたかに洋服
かるく々と花々敷を、坊ちやん坊ちやんとて此子の追従するもを
かし、多くの中に龍華寺りうげ（入力者註「龍華寺」は底本では「龍華寺」）の信如と
て、千筋ちすぢとなづる黒髪も今いく歳とせのさかりにか、やがては墨染に
かへぬべき袖の色、發心ほつしんは腹からか、坊は親ゆづりの勉強ものあり、
性來をとなしきを友達いぶせく思ひて、さまざまの惡戯をしかけ、
猫の死骸を繩にくくりてお役目なれば引導いんだうをたのみますと投げつ
けし事も有りしが、それは昔、今は校内一の人とて假にも侮りて
の處業はなかりき、歳は十五、並背なみぜいにていが栗の頭髮つむじりも思ひなし
か俗とは變りて、藤本信如ふぢもとのぶゆきと訓なみにてすませど、何處しやくやら釋しやくといひ
たげの素振なり。

八月廿日は千束神社のまつりとして、山車屋臺に町々の見得をはりて土手をのぼりて廓内までも入込まんづ勢ひ、若者が氣組み思ひやるべし、聞かぢりに子供として由斷のなりがたき此あたりのなれば、そろひの裕衣は言はでものこと、銘々に申合せて生意氣のありたけ、聞かば膽もつぶれぬべし、横町組と自らゆるしたる亂暴の子供大將に頭の長として歳も十六、仁和賀の金棒に親父の代理をつとめしより氣位ゑらく成りて、帯は腰の先に、返事は鼻の先にていふ物と定め、にくらしき風俗、あれが頭の子でなくばと鳶人足が女房の蔭口に聞えぬ、心一ぱいに我がまゝを徹して身に合はぬ巾をも廣げしが、表町に田中屋の正太郎として歳は我れに三つ劣れど、家に金あり身に愛

嬌あれば人も憎くまぬ當の敵あり、我れは私立の學校へ通ひしを、先方は公立なりとて同じ唱歌も本家のやうな顔をしおる、去年も一昨年も先方には大人の末社がつきて、まつりの趣向も我れよりは花を咲かせ、喧嘩に手出しのなりがたき仕組みも有りき、今年又もや負けにならば、誰れだと思ふ横町の長吉だぞと平常の力だては空いばりとけなされて、弁天ぼりに水およぎの折も我が組に成る人は多かるまじ、力を言はず我が方がつよけれど、田中屋が柔和ぶりにごまかされて、一つは學問が出来おるを恐れ、我が横町組の太郎吉、三五郎など、内々は彼方がたに成たるも口惜し、まつりは明後日、いよく我が方が負け色と見えたらば、破れかぶれに暴れて暴れて、正太郎が面に疵一つ、我れも片眼片足なきものと思へば爲やすし、加擔人は車屋の丑に元結よりの文、手遊屋の彌助などあらば引けは

取るまじ、おゝ夫よりは彼の人の事彼の人の事、藤本のならば宜き
智恵も貸してくれんと、十八日の暮れちかく、物いへば眼口にうる
さき蚊を拂ひて竹村しげき龍華寺の庭先から信如が部屋へのそりの
そりと、信さん居るかと顔を出しぬ。

己れの爲る事は亂暴だと人がいふ、亂暴かも知れないが口惜しい
事は口惜しいや、なあ聞いとくれ信さん、去年も己れが處の末弟すえの
奴と正太郎組の短小野郎ちびやらうと萬燈まんどうのたゝき合ひから始まつて、夫れと
いふと奴の中間がばらばらと飛出しやあがつて、どうだらう小さな
者の萬燈ぶちを打こわしちまつて、胴揚にしやがつて、見やがれ横町の
ざまをと一人がいふと、間拔に背のたかい大人のやうな面をして居
る團子屋の頓馬かまが、頭かしらもあるものか尻尾だ尻尾だ、豚の尻尾だなん
て悪口を言つたとさ、己らあ其時千束様へねり込んで居たもんだか

ら、あとで聞いた時に直様仕かへしに行かうと言つたら、親父とさんに頭から小言を喰つて其時も泣寐入、一昨年はそらね、お前も知つてる通り筆屋の店へ表町の若衆わかいしゅが寄合て茶番か何かやつたらう、あの時己れが見に行つたら、横町は横町の趣向がありませうなんて、おつな事を言ひやがつて、正太ばかり客にしたのも胸にあるわな、いくら金が有るとつて質屋のくづれの高利貸が何たら様だ、彼んな奴を生して置くより擲たきころす方が世間のためだ、己おらあ今度のまつりには如何しても亂暴に仕掛て取かへしを付けようと思ふよ、だから信さん友達がひに、夫れはお前が嫌やだといふのも知れてるけれども何卒我おれの肩を持つて、横町組の恥をすゝぐのだから、ね、おい、本家本元の唱歌だなんて威張りおる正太郎を打ちめて呉れないか、我れが私立の寐ぼけ生徒といはれゝばお前の事も同然だか

ら、後生だ、どうぞ、助けると思つて大萬燈を振廻しておくれ、己
れは心しんから底から口惜しくつて、今度負けたら長吉の立端たちばは無ないと
無茶にくやしがつて大幅の肩をゆすりぬ。だつて僕は弱いもの。弱
くても宜いよ。萬燈は振廻せないよ。振廻さなくても宜いよ。僕が
這入ると負けるが宜いかへ。負けても宜いのさ、夫れは仕方が無い
と諦めるから、お前は何も爲ないで宜いから唯横町の組だといふ名
で、威張つてさへ呉れると豪氣じんきに人氣じんきがつくからね、己れは此様な
無學わからずや漢まだのにお前は學ものが出来るからね、向ふの奴が漢語か何かで
冷語ひやかしでも言つたら、此方も漢語で仕かへしておくれ、あゝ好い心持
ださつぱりしたお前が承知をしてくれゝば最う千人力だ、信さん有
がたうと常に無い優しき言葉も出るものなり。

一人は三尺帯に突かけ草履の仕事師の息子、一人はかわ色金巾かなきんの

羽織に紫の兵子帯といふ坊様仕立、思ふ事はうらはらに、話しは常に喰ひ違ひがちなれど、長吉は我が門前に産聲を揚げしものと大和尚夫婦が鼻眞もあり、同じ學校へかよへば私立私立とけなされるも心わるきに、元來愛敬のなき長吉なれば心から味方につく者もなき憐れさ、先方は町内の若衆どもまで尻押をして、ひがみでは無し長吉が負けを取る事罪は田中屋がたに少なからず、見かけて頼まれし義理としても嫌やとは言ひかねて信如、夫れではお前の組に成るさ、成るといつたら嘘は無いが、成るべく喧嘩は爲ぬ方が勝だよ、いよ／＼先方が賣りに出たら仕方が無い、何いざと言へば田中の正太郎位小指の先さと、我が力の無いは忘れて、信如は机の引出しから京都みやげに貰ひたる、小鍛冶の小刀を取出して見すれば、よく利れそうだねへと覗き込む長吉が顔、あぶなし此物を振廻してなる事か。

解かば足にもとゞくべき毛髪を、根あがり堅くつめて前髪大きく鬚おもたげの、赭熊しやぐまといふ名は恐ろしけれど、此鬚これを此頃の流行はやりとして良家の令嬢よきしゆむすめごも遊ばさるゝぞかし、色白に鼻筋とほりて、口もとは小さからねど締りたれば醜くからず、一つ一つに取たてゝは美人の鑑かゞみに遠けれど、物いふ聲の細く清すゞしき、人を見る目の愛敬あふれて、身のこなしの活々したるは快き物なり、柿色に蝶鳥を染めたる大形の裕衣きて、黒襦子と染分絞りの晝夜帯胸だかに、足にはぬり木履ぼくりこゝらあたりにも多くは見かけぬ高きをはきて、朝湯の歸りに首筋白々と手拭さげたる立姿を、今三年の後に見たしと廓がへりの若者は申き、大黒屋だいこくやの美登利みでりとして生國しやうこくは紀州、言葉のいさゝか

訛なまれるも可愛く、第一は切れ離れよき氣象を喜ばぬ人なし、子供に似合ぬ銀貨入れの重きも道理、姉なる人が全盛の餘波なごり、延いては遣手新造やりてしんぞが姉への世辭にも、美みいちゃん人形をお買ひなされ、これはほんの手鞠代と、呉れるに恩を着せねば貰ふ身の有がたくも覺えず、まくはまくは、同級の女生徒二十人に揃ひのごむ鞠を與へしはおろかの事、馴染の筆やに店ざらしの手遊を買しめて、喜ばせし事もあり、さりとは日々夜々の散財此歳この身分にて叶ふべきにあらず、末は何となる身ぞ、兩親ありながら大目に見てあらしき詞をかけたる事も無く、樓の主が大切がる様子さまも怪しきに、聞けば養女にもあらず親戚にてはもとより無く、姉なる人が身賣りの當時、鑑定めきに來たりし樓の主が誘ひにまかせ、此地に活計たつきもとむとて親子三人みたりが旅衣、たち出しは此譯、それより奥は何なれや、今は寮のあづかり

をして母は遊女の仕立物、父は小格子こがうしの書記に成りぬ、此身は遊藝
手藝學校にも通はせられて、其ほうは心のまゝ、半日は姉の部屋、
半日は町に遊んで見聞くは三味に太鼓にあげ紫のなり形、はじめ藤
色絞りの半襟を袷にかけて着て歩るきしに、田舎者いなか者と町内
の娘どもに笑はれしを口惜しがりて、三日三夜泣きつゞけし事も有
しが、今は我れより人々を嘲りて、野暮な姿と打つけの悪まれ口を、
言ひ返すものも無く成りぬ。二十日はお祭りなれば心一ぱい面白い
事をしてと友達のせがむに、趣向は何なりと各自めいこくに工夫して大勢の
好い事が好いでは無いか、幾金いくちんでもいゝ私が出すからとて例の通り
勘定なしの引受けに、子供中間こどもちゆうかんの女王様又とあるまじき恵みは大人
よりも利きが早く、茶番にしよう、何處のか店を借りて往來から見
えるやうにしてと一人が言へば、馬鹿を言へ、夫れよりはお神輿みこしを

こしらへてお呉れな、蒲田屋の奥に飾つてあるやうな本當のを、重くても構はしない、やつちよいやつちよい譯なしだと振ぢ鉢巻をする男子のそばから、夫れでは私たちが詰らない、皆が騒ぐを見るばかりでは美登利さんだとして面白くはあるまい、何でもお前の好い物におしよと、女の一むれは祭りを抜きに常盤座をと、言いたげの口振をかし、田中の正太は可愛らしい眼をぐるぐると動かして、幻燈にしないか、幻燈に、己れの處にも少しは有るし、足りないのを美登利さんに買つて貰つて、筆やの店で行らうでは無いか、己れが映し人で横町の三五郎に口上を言はせよう、美登利さん夫れにしないかと言へば、あゝ夫れは面白からう、三ちやんの口上ならば誰れも笑はずには居られまい、序にあの顔がうつると猶おもしろいと相談はとゝのひて、不足の品を正太が買物役、汗に成りて飛び廻るもを

かしく、いよく、明日と成りては横町までも其沙汰聞えぬ。

四

打つや鼓のしらべ、三味の音色に事かゝぬ場處も、祭りは別物、
西との市を除けては一年一度の賑ひぞかし、三嶋さま小野照さま、
お隣社となづから負けまじの競ひ心をかしく、横町も表も揃ひは同じ
眞岡木綿まに町名かくづしを、去歳こよりは好からぬ形かたとつぶやくも有り
し、口なし染の麻だすき成るほど太きを好みて、十四五より以下な
るは、達磨だるま、木兎きう、犬はり子、さまざまの手遊かを數多きほど見得に
して、七つ九つ十一つくるもあり、大鈴小鈴背中せにがらつかせて、
驅け出す足袋はだしの勇ましく可笑し、群れを離れて田中の正太が

赤筋入りの印半天、色白の首筋に紺の腹がけ、さりとは見なれぬ扮粧いでだちとおもふに、しごいて締めし帯の水淺黄も、見よや縮緬の上染、襟の印のあがりも際立て、うしろ鉢巻きに山車だしの花一枝、革緒の雪駄おとのみはすれど、馬鹿ばやしの中間には入らざりき、夜宮は事なく過ぎて今日一日の日も夕ぐれ、筆やが店に寄合しは十二人、一人かけたる美登利が夕化粧の長さに、未だか未だかと正太は門へ出つ入りつして、呼んで來い三五郎、お前はまだ大黒屋の寮へ行つた事があるまい、庭先から美登利さんと言へば聞える筈、早く、早くと言ふに、夫れならば己れが呼んで來る、萬燈は此處へあづけて行けば誰れも蠟燭ぬすむまい、正太さん番をたのむとあるに、吝嗇けちな奴め、其手間で早く行けと我が年したに叱なかられて、おつと來たさの次郎左衛門、今の間とかけ出して韋駄天いだてんとはこれをや、あれ彼の

飛びやうが可笑しいとて見送りし女子どもの笑ふも無理ならず、横ぶとりして背ひくく、頭の形は才槌とて首みぢかく、振むけての面を見れば出額の獅子鼻、反齒の三五郎といふ仇名おもふべし、色は論なく黒きに感心なは目つき何處までもおどけて兩の頬に笑くぼの愛敬、目かくしの福笑ひに見るやうな眉のつき方も、さりとはをかしく罪の無き子なり、貧なれや阿波ちゞみの筒袖、己れは揃ひが間に合はなんだと知らぬ友には言ふぞかし、我れを頭に六人の子供を、養ふ親も轆棒にすぎる身なり、五十軒によき得意場は持たりとも、内證の車は商賣ものゝ外なれば詮なく、十三になれば片腕と一昨年より並木の活判處へも通ひしが、怠惰ものなれば十日の辛棒つゞかず、一ト月と同じ職も無くて霜月より春へかけては突羽根の内職、夏は検査場の氷屋が手傳ひして、呼聲をかしく客を引くに上手なれ

ば、人には調法がられぬ、去年は仁和賀の臺引きに出しより、友達
いやしがりて萬年町の呼名今に残れども、三五郎といへば滑稽者おどけものと
承知して憎くむ者の無きも一徳なりし、田中屋は我が命の綱、親子
が蒙むる御恩すくなからず、日歩とかや言ひて利金安からぬ借りな
れど、これなくてはの金主様あだには思ふべしや、三公己れが町へ
遊びに來いと呼ばれて嫌やとは言はれぬ義理あり、されども我れは
横町に生れて横町に育ちたる身、住む地處は龍華寺のもの、家主は
長吉が（入力者註「長吉が」は底本では「長吉か」親なれば、表むき彼方に背
く事かなはず、内々に此方の用をたして、にらまるゝ時の役廻りつ
らし。正太は筆やの店へ腰をかけて、待つ間のつれづれに忍ぶ戀路
を小聲にうたへば、あれ由斷がならぬと内儀かみさまに笑はれて、何が
なしに耳の根あかく、まぢくないの高聲に皆も來いと呼つれて表へ

驅け出す出合頭、正太は夕飯なぜ喰べぬ、遊びに毫ほんけて先刻にから呼ぶをも知らぬか、誰どなた様も又のちほど遊ばせて下され、これは御世話と筆やの妻にも挨拶して、祖母ばばが自からの迎ひに正太いやが言はず、其まゝ連れて歸らるゝあとは俄かに淋しく、人数は左のみ變らねど彼の子が見えねば大人までも寂しい、馬鹿さわぎもせねば串談も三ちゃんの様では無けれど、人好きのするは金持の息子さんに珍らしい愛敬、何と御覽じたか田中屋の後家さまがいやらしさを、あれで年は六十四、白粉をつけぬがめつけ物なれど丸鬚の大きさ、猫なで聲して人の死ぬをも構はず、大方臨終おしまひは金と情死しんじゆうなさるやら、夫れでも此方こちどもの頭つむりの上らぬは彼の物の御威光、さりとは欲しや、廓内なつかの大きい樓うちにも大分の貸付があるらしう聞きましたと、大路に立ちて二三人の女房よその財産たからを數へぬ。

待つ身につらき夜半の置炬燵、それは戀ぞかし、吹風すゞしき夏の夕ぐれ、ひるの暑さを風呂に流して、身じまいの姿見、母親が手づからそゝけ髪つくろひて、我が子ながら美しくしきを立ちて見、居て見、首筋が薄かつたと猶ぞいひける、單衣は水色友仙の涼しげに、白茶金らんの丸帶少し幅の狭いを結ばせて、庭石に下駄直すまで時は移りぬ。まだかまだかと塀の廻りを七度び廻り、欠伸あくびの數も盡きて、拂ふとすれど名物の蚊に首筋額かぎわしたゝか螫され、三五郎弱りきる時、美登利立出でゝいぎと言ふに、此方は言葉もなく袖を捉へて駆け出せば、息がはづむ、胸が痛い、そんなに急ぐならば此方は知らぬ、お前一人でお出と怒られて、別れ別れの到着、筆やの店へ

來し時は正太が夕飯の最中とおぼえし。あゝ面白くない、おもしろくない、彼の人が來なければ幻燈をはじめめるのも嫌、伯母さん此處の家に智恵の板は賣りませぬか、十六武藏でも何でもよい、手が暇で困ると美登利の淋しがれば、夫れよと即坐に鉢を借りて女子づれは切抜きにかゝる、男は三五郎を中に仁和賀のさらひ、北廓全盛見わたせば、軒は提燈電氣燈、いつも賑ふ五丁町、と諸聲をかしくはやし立つるに、記憶のよければ去年一昨年とさかのぼりて、手振手拍子ひとつも變る事なし、うかれ立たる十人あまりの騒ぎなれば何事と門に立ちて人垣をつくりし中より。三五郎は居るか、一寸來くれ大急ぎだと、文次といふ元結よりの呼ぶに、何の用意もなくおいしよ、よし來たと身がるに敷居を飛こゆる時、此二夕股野郎覺悟をしろ、横町の面よごしめ唯は置かぬ、誰れだと思ふ長吉だ生ふざけ

た眞似をして後悔するなと頬骨一撃、あつと魂消て逃入る襟がみを、つかんで引出す横町の一むれ、それ三五郎をたゞき殺せ、正太を引出してやつて仕舞へ、弱虫にげるな、團子屋の頓馬も唯は置ぬと潮のやうに沸かへる騒ぎ、筆屋が軒の掛提燈は苦もなくなつたゞき落されて、釣りらんぷ危なし店先の喧嘩なりませぬと女房が喚きも聞かばこそ、人數は大凡十四五人、ねぢ鉢巻に大萬燈ふりたてゝ、當るがまゝの亂暴狼藉、土足に踏み込む傍若無人、目ざす敵の正太が見えねば、何處へ隠くした、何處へ逃げた、さあ言はぬか、言はぬか、言はさずに置く物かと三五郎を取こめて撃つやら蹴るやら、美登利くやく止める人を搔きのけて、これお前がたは三ちゃんに何の咎がある、正太さんと喧嘩がしたくば正太さんとしたが宜い、逃げもせねば隠くもしない、正太さんは居ぬでは無いか、此處は私が遊

び處、お前がたに指でもさゝしはせぬ、ゑゝ憎くらしい長吉め、三ちゃんを何故ぶつ、あれ又引たほした、意趣があらば私をお撃ち、相手には私になる、伯母さん止めずに下されと身もだへして罵れば、何を女郎め頼桁たゝく、姉の跡つぎの乞食め、手前の相手にはこれが相應だと多人數のうしろより長吉、泥草鞋（入力者註「草鞋」はママ）つかんで投つけければ、ねらひ違はず美登利が額際にむさき物したゝか、血相かへて立あがるを、怪我でもしてはと抱きとむる女房、ざまを見る、此方には龍華寺の藤本がついて居るぞ、仕かへしには何時でも來い、薄馬鹿野郎め、弱虫め、腰ぬけの活地いきちなしめ、歸りに待伏せする、横町の闇に氣をつけると三五郎を土間に投出せば、折から靴音たれやらが交番への注進今ぞしる、それと長吉聲をかくれば丑松文次その余の十餘人、方角をかへてばらくと逃足はやく、

抜け裏の露路にかゞむも有るべし、口惜しいくやしい口惜しい口惜しい、長吉め文次め丑松め、なぜ己れを殺さぬ、殺さぬか、己れも三五郎だ唯死ぬものか、幽異いうれいになつても取殺すぞ、覺えて居ろ長吉めと湯玉のやうな涙はらく、はては大聲にわつと泣き出す、身内や痛からん筒袖の處々引さかれて背中も腰も砂まぶれ、止めるにも止めかねて勢ひの凄まじさに唯おどくと氣を吞まれし、筆やの女房走り寄りて抱きおこし、背中をなで砂を拂ひ、堪忍をし、堪忍をし、何と思つても先方は大勢、此方は皆よわい者ばかり、大人でさへ手が出しかねたに叶はぬは知れて居る、夫れでも怪我のないは仕合、此上は途中の待ぶせが危ない、幸ひの巡査おまはりさまに家まで見て頂かば我々も安心、此通りの子細で御座ります故と筋をあらく折からの巡査に語れば、職掌がらいぎ送らんと手を取らるゝに、いろく

送つて下さらずとも歸ります、一人で歸りますと小さく成るに、こりや怕い事は無い、其方の家まで送る分の事、心配するなと微笑を含んで頭つむぎを撫でらるゝに彌々ちゞみて、喧嘩をしたと言ふと親父とつさんに叱かられます、頭かしらの家は大屋さんで御座りますからとて凋しれるをすかして、さらば門口まで送つて遣る、叱からるゝやうの事は爲ぬわとて連れらるゝに四隣あたりの人胸を撫でゝはるかに見送れば、何とかしけん横町の角にて巡查の手をば振はなして一目散に逃げぬ。

六

めづらしい事、此炎天に雪が降りはせぬか、美登利が學校を嫌やがるはよくくの不機嫌、朝飯がすゝまずば後刻のちかたに鮎あすけでも詔へよう

か、風邪にしては熱も無ければ大方きのふの疲れと見える、太郎様への朝参りは母さんが代理してやれば御免こふむれとありしに、いゝく姉さんの繁昌するやうにと私が願をかけたのなれば、参らねば氣が濟まぬ、お賽錢下され行つて來ますと家を驅け出して、中田圃の稻荷に鰐口わにぐちならして手を合せ、願ひは何ぞ行きも歸りも首うなだれて畔道づたひ歸り來る美登利が姿、それと見て遠くより聲をかけ、正太はかけ寄りて袂を押へ、美登利さん昨夕は御免よと突然だしぬけにあやまれば、何もお前に謝罪わびられる事は無い。夫れでも己れが憎くまれて、己れが喧嘩の相手だもの、お祖母さんが呼びにさへ來なれば歸りはしない、そんなに無暗に三五郎をも撃たしはしなかつた物を、今朝三五郎の處へ見に行つたら、彼奴も泣いて口惜しがつた、己れは聞いてさへ口惜しい、お前の顔へ長吉め草履を投げたと言ふ

では無いか、彼の野郎乱暴にもほどがある、だけれど美登利さん堪忍してお呉れよ、己れは知りながら逃げて居たのでは無い、飯を掻込んで表へ出やうとするとお祖母さんが湯に行くといふ、留守居をして居るうちの騒ぎだらう、本當に知らなかつたのだからねと、我が罪のやうに平あやまりに謝罪て、痛みはせぬかと額際を見あげれば、美登利につこり笑ひて何負傷けがをするほどでは無い、夫れだが正さん誰れが聞いても私が長吉に草履を投げられたと言つてはいけな
いよ、もし萬一ひよつとお母さんが聞きでもすると私が叱かれるから、親でさへ頭に手はあげぬものを、長吉づれが草履の泥を額にぬられては踏まれたも同じだからとて、背ける顔のいとをしく、本當に堪忍しておくれ、みんな己れが悪い、だから謝る、機嫌を直して呉れないか、お前に怒られると己れが困るものと話しつれて、いつし

か我家の裏近く來れば、寄らないか美登利さん、誰れも居はしない、祖母さんも日がけを集めに出たらうし、己ればかりで淋しくてならない、いつか話した錦繪を見せるからお寄りな、種々のがあるからと袖を捉らへて離れぬに、美登利は無言にうなづいて、佗びた折戸の庭口より入れば、廣からねども、鉢ものをかしく並びて、軒につき忍艸、これは正太が午の日の買物と見えぬ、理由しらぬ人は小首やかたぶけん町内一の財産家といふに、家内は祖母と此子二人、萬の鍵に下腹冷えて留守は見渡し、總長屋、流石に錠前くたくもあらざりき、正太は先へあがりて風入りのよき場處を見たて、此處へ來ぬかと團扇の氣あつかひ、十三の子供にはませ過ぎてをかし。古くより持ったへし錦繪かずく取出し、褒めらるゝを嬉しく美登利さん昔しの羽子板を見せよう、これは己れの母さんがお邸に奉公し

て居る頃いたゞいたのだとさ、をかしいでは無いか此大きい事、人の顔も今のとは違ふね、あゝ此母さんが生きて居ると宜いが、己れが三つの歳死んで、お父さんは在るけれど田舎の實家へ歸つて仕舞たから今は祖母さんばかりさ、お前は浦山しいねと無端そんざうに親の事を言ひ出せば、それ繪がぬれる、男が泣く物では無いと美登利に言はれて、己れは氣が弱いのかしら、時々種々の事を思ひ出すよ、まだ今時分は宜いけれど、冬の月夜なにかに田町あたりを集めに廻ると土手まで来て幾度も泣いた事がある、何さむい位で泣きはしない、何故だか自分も知らぬが種々の事を考へるよ、あゝ一昨年から己れも日がけの集めに廻るさ、祖母さんは年寄りだから其うちにも夜るは危ないし、目が悪るいから印形いんぎやうを押たり何かに不自由だからね、今までいくたり幾人も男を使つたけれど、老人に子供だから馬鹿にして思ふ

やうには動いて呉れぬと祖母さんが言つて居たつけ、己れが最う少し大人に成ると質屋を出さして、昔しの通りでなくとも田中屋の看板をかけると楽しみにして居るよ、他處の人は祖母さんを吝だと言ふけれど、己れの爲に儉約つましくして呉れるのだから氣の毒でならない、集金あつめに行くうちでも通新町や何かに随分可愛想なのが有るから、嘸お祖母さんを悪るくいふだらう、夫れを考へると己れは涙がこぼれる、矢張り氣が弱いのだね、今朝も三公の家へ取りに行つたら、奴め身體が痛い癖に親父に知らすまいとして働いて居た、夫れを見たら己れは口が利けなかつた、男が泣くてへのは可笑しいでは無いか、だから横町の野蕃漢じやがたらに馬鹿にされるのだと言ひかけて我が弱いを恥かしさうな顔色、何心なく美登利と見合す目つきの可愛さ。お前の祭の姿なりは大層よく似合つて浦山しかつた、私も男だと彼んな風がし

て見たい、誰れのよりも宜く見えたと賞められて、何だ己れなんぞ、お前こそ美しくしいや、廓内なの大巻おほまきさんよりも奇麗だと皆がいふよ、お前が姉であつたら己れは何様どんなに肩身が廣かろう、何處へゆくにも追従つて行つて大威張りに威張るがな、一人も兄弟が無いから仕方が無い、ねへ美登利さん今度一處に寫眞を取らないか、我れは祭りの時の姿なりで、お前は透綾すきやのあら縞で意氣なりな形をして、水道尻の加藤でうつさう、龍華寺の奴が浦山しがるやうに、本當だぜ彼奴は岐度怒るよ、眞青に成つて怒るよ、にゑ肝かんだからね、赤くはならない、夫れとも笑ふかしら、笑はれても構はない、大きく取つて看板に出たら宜いな、お前は嫌やかへ、嫌やのやうな顔だものと恨めるもをかしく、變な顔にうつるとお前に嫌きらはれるからとて美登利ふき出して、高笑ひの美音に御機嫌や直りし。

朝冷あせすはいつしか過ぎて日かげの暑くなるに、正太さん又晩によ、私の寮へも遊びにお出でな、燈籠ながして、お魚追ひましょ、池の橋が直つたれば怕い事は無いと言ひ捨てに立出る美登利の姿、正太うれしげに見送つて美しくしと思ひぬ。

七

龍華寺の信如、大黒屋の美登利、二人ながら學校は育英舎なり、去りし四月の末つかた、櫻は散りて青葉のかけに藤の花見といふ頃、春季の大運動會とて水の谷やの原にせし事ありしが、つな引、鞆なげ、繩とびの遊びに興をそへて長き日の暮るゝを忘れし、其折の事とや、信如いかにしたるか平常の沈着おちつきに似ず、池のほとりの松が

根につまづきて赤土道に手をつきたれば、羽織の袂も泥に成りて見にくかりしを、居あはせたる美登利みかねて我が紅の絹はんけちを取出し、これにてお拭きなされと介抱をなしけるに、友達の中なる嫉妬やまもや見つけて、藤本は坊主のくせに女と話をして、嬉しさうに禮を言つたは可笑しいでは無いか、大方美登利さんは藤本の女房かみさんになるのであらう、お寺の女房なら大黒さまと言ふのだなど、取沙汰しける、信如元來かゝる事を人の上に聞くも嫌ひにて、苦き顔して横を向く質なれば、我が事として我慢のなるべきや、夫れよりは美登利といふ名を聞くごとに恐ろしく、又あの事を言ひ出すかと胸の中もやくやして、何とも言はれぬ厭やな氣持なり、さりながら事ごとに怒りつける譯にもゆかねば、成るだけは知らぬ躰をして、平氣をつくりて、むづかしき顔をして遣り過ぎる心なれど、さし向ひて物

などを問はれたる時の當惑さ、大方は知りませぬの一ト言にて濟ませど、苦しき汗の身うちに流れて心ぼそき思ひなり、美登利はさる事も心にとまらねば、最初はじめは藤本さん藤本さんと親しく物いひかけ、學校退けての歸りがけに、我れは一足はやくて道端に珍らしき花などを見つければ、おくれし信如を待合して、これ此様ごんなうつくしい花が咲てあるに、枝が高くて私には折れぬ、信さんは背が高ければお手が届きましよ、後生折つて下されと一むれの中にはは年長としかさなるを見かけて頼めば、流石に信如袖ふり切りて行すぎる事もならず、さりとして人の思はくいよく愁うれらければ、手近の枝を引寄せて好悪よしあしかまはず申譯ばかりに折りて、投つけるやうにすたすたと行過とぎぐるを、さりとは愛敬の無き人と惘あきれし事も有しが、度かさなりての末には自ら故意わざとの意地悪のやうに思はれて、人には左もなきに我れにはか

り愁らき處爲しうもをみせ、物を問へば碌な返事した事なく、傍へゆけば逃げる、はなしを爲れば怒る、陰氣らしい氣のつまる、どうして好いやら機嫌の取りやうも無い、彼のやうな六づかしやは思ひのまゝに捻れて怒つて意地わるが爲たいならんに、友達と思はずば口を利くも入らぬ事と美登利少し疇にさはりて、用の無ければ摺れ違ふても物いふた事なく、途中に逢ひたりとて挨拶など思ひもかけず、唯いつとなく二人の中に大川一つ横たはりて、舟も筏も此處には御法度、岸に添ふておもひおもひの道があるきぬ。

祭りは昨日に過ぎて其あくる日より美登利の學校へ通ふ事ふつと跡たえしは、問ふまでも無く額の泥の洗ふても消えがたき恥辱を、身にしみて口惜しければぞかし、表町とて横町とて同じ教場におし並べば朋輩に變りは無き筈を、をかしき分け隔てに常日頃意地を持

ち、我れは女の、とても敵ひがたき弱味をば付目にして、まつりの夜の處爲しうちはいかなる卑怯ぞや、長吉のわからずやは誰れも知る亂暴の上なしなれど、信如の尻おし無くば彼れほどに思ひ切りて表町をば暴あし得じ、人前をば物識ものしりらしく温順すなほにつくりて、陰に廻りて機關からくりの糸を引しは藤本の仕業に極まりぬ、よし級は上にせよ、學ものは出来るにせよ、龍華寺さまの若旦那にせよ、大黒屋の美登利紙一枚のお世話にも預からぬ物を、あのやうに乞食呼はりして貰ふ恩は無し、龍華寺は何とほど立派な檀家ありと知らねど、我が姉さま三年の馴染に銀行の川様、兜町の米様もあり、議員の短ち小いさま根曳して奥さまにと仰せられしを、心意氣氣に入らねば姉さま嫌ひてお受けはせざりしが、彼の方とても世には名高きお人と遣手衆やうてしゆの言はれし、嘘ならば聞いて見よ、大黒やに大巻の居ずば彼の樓いは闇とかや、されば

お店の旦那とても父さん母さん我が身をも粗畧には遊ばさず、常々
大切がりて床の間にお据へなされし瀬戸物の大黒様をば、我れいつ
ぞや坐敷の中にて羽根つくとして騒ぎし時、同じく並びし花瓶はないけを仆
し、散々に破損けがをさせしに、旦那次の間に御酒めし上りながら、美
登利お轉婆が過ぎるのと言はれしばかり小言は無かりき、他の人な
らば一通りの怒りでは有るまじと、女子衆達にあとくまで羨まれ
しも必竟は姉さまの威光ぞかし、我れ寮住居に人の留守居はしたり
とも姉は大黒屋の大巻、長吉風情に負けひを取るべき身にもあらず、
龍華寺の坊さまにいぢめられんは心外と、これより學校へ通ふ事お
もしろからず、我まゝの本性あなどられしが口惜しさに、石筆を折
り墨をすて、書物ほんも十露盤そろばんも入らぬ物にして、中よき友と埒も無く
遊びぬ。

走れ飛ばせの夕べに引かへて、明けの別れに夢をのせ行く車の淋しさよ、帽子まぶかに人目を厭ふ方様もあり、手拭とつて頬かぶり、彼女が別れに名残の一撃、いたさ身にしみて思ひ出すほど嬉しく、うす氣味わるやにたにたの笑ひ顔、坂本へ出ては用心し給へ千住がへりの青物車にお足元あぶなし、三嶋様の角までは氣違ひ街道、御顔のしまり何れも緩るみて、はゞかりながら御鼻の下ながながと見えさせ給へば、そんじよ其處らに夫れ大した御男子様とて、分厘の價値も無しと、辻に立ちて御慮外を申もありけり。楊家の娘君寵をうけてと長恨歌を引出すまでもなく、娘の子は何處にも貴重がるゝ頃なれど、此あたりの裏屋より赫奕姫の生るゝ事その例多

し、築地の某屋それやに今は根を移して御前さま方の御相手、踊りに妙を得し雪といふ美形、唯今のお座敷にてお米のなります木はと至極あどけなき事は申とも、もとは此所の卷帶まきおびづれ黨にて花がるたの内職せしものなり、評判は其頃に高く去るもの日々に疎ければ、名物一つかけを消して二度目の花は紺屋の乙娘、今千束町に新つた屋の御神燈ほのめかして、小吉と呼ぶるゝ公園の尤物まれものも根生ひは同じ此處の土成し、あけくれの噂にも御出世といふは女に限りて、男は塵塚さかす黒斑くろぶちの尾の、ありて用なき物とも見ゆべし、此界限に若い衆と呼ぶるゝ町並の息子、生意氣ざかりの十七八より五人組、七人組、腰に尺八の伊達はなけれど、何とやら嚴めしき名の親分てが手下かにつき、揃ひの手ぬぐひ長提燈、賽ころ振る事おぼえぬひやかしうちは素見の格子先に思ひ切つての串戯も言ひがたしとや、眞面目につとむる我が

家業は晝のうちばかり、一風呂浴びて日の暮れゆけば突かけ下駄に七五三の着物、何屋の店の新妓しんこを見たか、金杉の糸屋が娘に似て最う一倍鼻がひくいと、頭腦あたまの中を此様な事にこしらへて、一軒ごとの格子に烟草の無理どり鼻紙の無心、打ちつ打たれつ是れを一世の譽と心得れば、堅氣の家の相續息子地廻りと改名して、大門際に喧嘩かひと出るもありけり、見よや女子おんなの勢力いきほひと言はぬばかり、春秋しらぬ五丁町の賑ひ、送りの提燈かんぼんいま流行らねど、茶屋が廻女まはしの雪駄のおとに響き通へる歌舞音曲、うかれうかれて入込む人の何を目當と言問はゞ、赤ゑり赭熊しやくまに裌うちかけの裾ながく、につと笑ふ口元目もと、何處どこが美しいとも申がたけれど華魁衆おいらんしゆとて此處にての敬ひ、立はなれては知るによしなし、かゝる中にて朝夕を過すごせば、衣きぬの白地の紅に染む事無理ならず、美登利の眼の中に男といふ者さつても怕

からず恐ろしからず、女郎といふ者さのみ賤しき勤めとも思はねば、過ぎし故郷を出立の當時ないて姉をば送りしこと夢のやうに思はれて、今日此頃の全盛に父母への孝養うらやましく、お職を徹す姉が身の、憂いの愁^うらいの数も知らねば、まぢ人戀ふる鼠なき格子の咒文、別れの背中に手加減の祕密^{おひやく}まで、唯おもしろく聞なされて、廓ことばを町にいふまで去りとは恥かしからず思へるも哀なり、年はやうく數への十四、人形抱いて頼ずりする心は御華族の御姫様とて變りなけれど、修身の講義、家政學のいくたても學びしは學校にてばかり、誠あけくれ耳に入りしは好いた好かぬの客の風説^{うはさ}、仕着せ積み夜具茶屋への行わたり、派手は美事に、かなはぬは見すばらしく、人事我事分別をいふはまだ早し、幼な心に目の前の花のみはしるく、持まへの負けじ氣性は勝手に馳せ廻りて雲のやうな形をこ

しらへぬ、氣違ひ街道、寐ぼれ道、朝がへりの殿がた一順すみて朝寐の町も門の箒目青海波を亘がき、打水よきほどに濟みし表町の通りを見渡せば、來るは來るは、萬年町山伏町、新谷町あたりを峙にして、一能一術これも藝人の名はのがれぬ、よかく、飴や輕業師、人形つかひ大神樂、住吉をどりに角兵衛獅子、おもひおもひの扮粧して、縮緬透綾の伊達もあれば、薩摩がすりの洗ひ着に黒襦子の幅狹帶、よき女もあり男もあり、五人七人十人一組の大たむろもあれば、一人淋しき瘦せ老翁の破れ三味線かゝへて行くもあり、六つ五つなる女の子に赤襷させて、あれは紀の國おどらするも見ゆ、お顧客は廓内に居つゞけ客のなぐさみ、女郎の憂さ晴らし、彼處に入る身の生涯やめられぬ得分ありと知られて、來るも來るも此處らの町に細かしき貰ひを心に止めず、裾に海草のいかゞはしき乞食さへ

門には立たず行過るぞかし、容顔きりやうよき女太夫の笠にかくれぬ床しの
頬を見せながら、喉自慢、腕自慢、あれ彼の聲を此町には聞かせぬ
が憎くしと筆やの女房舌うちして言へば、店先に腰をかけて往來を
眺めし湯がへりの美登利、はらりと下る前髪の毛を黄楊わづらの鬢櫛びんぐしにち
やつと搔きあげて、伯母さんあの太夫さん呼んで來ませうとて、は
たはた驅けよつて袂にすがり、投げ入れし一品を誰れにも笑つて告
げざりしが好みの明烏さらりと唄はせて、又御鼻負をの嬌音これた
やすくは買ひがたし、彼れが子供の処業かと寄集りし人舌を巻いて
太夫よりは美登利の顔を眺めぬ、伊達には通るほどの藝人を此處に
せき止めて、三味の音、笛の音、太鼓の音、うたはせて舞はせて人
の爲ぬ事して見たいと折ふし正太せいだに咄はないて聞かせれば、驚いて呆れ
て己らは嫌やだな。

如是我聞、佛説阿彌陀經、聲は松風に和して心のちりも吹拂はるべき御寺様の庫裏より生魚あぶる烟なびきて、卵塔場に嬰兒の襦袢ほしたるなど、お宗旨によりて構ひなき事なれども、法師を木のはしと心得たる目よりは、そゞろに腥く覺ゆるぞかし、龍華寺の大和尚身代と共に肥へ太りたる腹なり如何にも美事に、色つやの好きこと如何なる賞め言葉を參らせたらばよかるべき、櫻色にもあらず、緋桃の花でもなし、剃りたてたる頭より顔より首筋にいたるまで銅色の照りに一點のにごりも無く、白髪もまじる太き眉をあげて心まかせの大笑ひなさるゝ時は、本堂の如來さま驚きて臺座より轉び落給はんかと危ぶまるゝやうなり、御新造はいまだ四十の上を幾ら

も越さで、色白に髪の毛薄く、丸鬚も小さく結ひて見ぐるしからぬ
までの人がら、參詣人へも愛想よく門前の花屋が口悪るか嬬も兎角の
蔭口を言はぬを見れば、着ふるしの裕衣、總菜のお残りなどおのづ
からの御恩も蒙るなるべし、もとは檀家の一人成しが早くに良人を
失なひて寄る邊なき身の暫時こゝにお針やとひ同様、口さへ濡らさ
せて下さらばとて洗そひ濯ぎぎよりはじめてお菜そごしらへは素よりの
事、墓場の掃除に男衆の手を助くるまで働けば、和尚さま經濟より
割出しての御ふ憫かゝり、年は二十から違うて見ともなき事は女も
心得ながら、行き處なき身なれば結句よき死場處と人目を恥ぢぬや
うに成りけり、にがくしき事なれども女の心だて悪るからねば檀
家の者も左のみは咎めず、總領の花といふを懷胎まうけし頃、檀家の中に
も世話好きの名ある坂本の油屋が隠居さま仲人といふも異な物な

れど進めたて、表向きのものにしける、信如も此人の腹より生れて男女二人の同胞きやうだい、一人は如法の變屈たよほふものにて一日部屋の中にまぢくくと陰氣らしき生ひまれなれど、姉のお花は皮薄の二重腮あごかわゆらしく出来たる子なれば、美人といふにはあらねども年頃といひ人の評判もよく、素人にして捨て、置くは惜しい物の中に加へぬ、さりとてお寺の娘に左り棲、お釋迦が三味ひく世は知らず人の聞え少しは憚おこかられて、田町の通りに葉茶屋の店を奇麗にしつらへ、帳場格子のうちうちに此娘こを据へて愛敬を賣らすれば、科りの目は兎に角勘定しらずの若い者など、何がなしに寄つて大方毎夜十二時を聞くまで店に客のかけ絶えたる事なし、いそがしきは、大和尚、貸金の取たて、店への見廻り、法用のあれこれ、月の幾日いくかは説教日の定めもあり帳面くるやら經よむやら斯くては身躰のつゞき難しと夕暮れの縁先

に花むしろを敷かせ、片肌ぬぎに團扇づかひしながら大盃に泡盛を
なみなみと注がせて、さかなは好物の蒲焼を表町のむさし屋へあら
い處をとの詠へ、承りてゆく使ひ番は信如の役なるに、其嫌やなる
こと骨にしみて、路を歩くにも上を見し事なく、筋向ふの筆やに子
供づれの聲を聞けば我が事を誹らるゝかと情なく、そしらぬ顔に鰻
屋の門を過ぎては四邊あたりに人目の隙をうかゞひ、立戻つて駈け入る時
の心地、我身限つて腥きものは食べまじと思ひぬ。

父親和尚は何處までもさばけたる人にて、少しは欲深の名にたて
ども人の風説うはに耳をかたふけるやうな小膽にては無く、手の暇あら
ば熊手の内職うちもして見やうといふ氣風なれば、霜月の酉とには論なく
門前の明地に簪かんざしの店を開き、御新造に手拭ひかぶらせて縁喜えんぎの宜い
のをと呼ばせる趣向、はじめは恥かしき事に思ひけれど、軒ならび

素人の手業にて莫大の儲けと聞くに、此雑踏の中といひ誰れも思ひ
寄らぬ事なれば日暮れよりは目にも立つまじと思案して、晝間は花
屋の女房に手傳はせ、夜に入りては自身みづからをり立て呼たつるに、欲な
れやいつしか恥かしさも失せて、思はず聲だかに負ましよ負ましよ
と跡を追ふやうに成りぬ、人波にもまれて買手も眼の眩みし折なれ
ば、現在ごせ後世ごせねがひに一昨日來たりし門前も忘れて、簪かんざし三本七十五
錢かぎねと懸直かかけすれば、五本ついたを三錢ならばと直切ねぎつて行く、世はぬ
ば玉の闇の儲はこのほかにも有るべし、信如は斯かる事どもいかに
も心ぐるしく、よし檀家の耳には入らずとも近邊の人々が思わく、
子供中間の噂にも龍華寺では簪の店を出して、信さんが母さんの
狂氣きまがひづら面して賣つて居たなど、言はれもするやと恥かしく、其様な事
は止しにしたが宜う御座りませうと止めし事も有りしが、大和尚大

笑ひに笑ひすてゝ、黙つて居ろ、黙つて居ろ、貴様などが知らぬ事だわとて丸々相手にしては呉れず、朝念佛に夕勘定、そろばん手にしてにこ／＼と遊ばさるゝ顔つきは我親ながら淺ましくて、何故その頭は丸め給ひしぞと恨めしくも成りぬ。

元來一腹一對の中に育ちて他人交ぜずの穩かなる家の内なれば、さして此兒を陰氣ものに仕立あげる種は無けれども、性來をとなき上に我が言ふ事の用ひられねば兎角に物のおもしろからず、父が仕業も母の處作も姉の教育も、悉皆あやまりのやうに思はるれど言ふて聞かれぬ物ぞと諦めればうら悲しき様に情なく、友朋輩は變屈者の意地あると目ざせども自ら沈み居る心の底の弱き事、我が蔭口を露ばかりもいふ者ありと聞けば、立出で、喧嘩口論の勇氣もなく、部屋にとぞ籠つて人に面の合はされぬ臆病至極の身なりけるを、學

校にての出来ふりといひ身分がらの卑しからぬにつけても然る弱虫とは知る物なく、龍華寺の藤本は生煮えの餅のやうに眞があつて氣に成る奴と憎くがるものも有りけらし。

十

祭りの夜は田町の姉のもとへ使を命令いひつけられて、更るまで我家へ歸らざりければ、筆やの騒ぎは夢にも知らず、明日に成りて丑松文次その外の口よりこれくで有つたと傳へらるゝに、今更ながら長吉の亂暴に驚けども濟みたる事なれば咎めだてするも詮なく、我が名を借りられしばかりつくづく迷惑に思はれて、我が爲したる事ならねど人々への氣の毒を身一つに背負たる様の思ひありき、長吉も少

しは我が遣りそこねを恥かしう思ふかして信如に逢はゞ小言や聞かんと其の三四日は姿も見せず、やゝ餘炎ほとぼりのさめたる頃に信さんお前は腹を立つか知らないけれど時の拍子だから堪忍して置いて呉んな、誰れもお前正太が明巢あきすとは知るまいでは無いか、何も女郎めらうの一疋位相手にして三五郎を擲りたい事も無かつたけれど、萬燈を振込んで見りやあ唯も歸れない、ほんの附景氣に詰らない事をしてのけた、夫りやあ己れが何處までも悪るいさ、お前の命令いひつけを聞かなかつたは悪るからうけれど、今怒られては法かたなした、お前といふ後だてが有るので己らあ大舟に乗つたやうだに、見すてられちまつては困るだらうじや無いか、嫌やだとして此組の大將で居てくんねへ、左様どぢ斗ぼかりは（入力者註「どぢ斗は」は底本では「どち斗は」）組まなないからとて面目なさゝうに謝罪わびられて見れば夫れでも私は嫌やだとも言ひ

がたく、仕方が無い遣る處までやるさ、弱い者いぢめは此方の恥になるから三五郎や美登利を相手にしても仕方が無い、正太に末社がついたら其時のこと、決して此方から手出しをしてはならないと留めて、さのみは長吉をも叱り飛ばさねど再び喧嘩のなきやうにと祈られぬ。

罪のない子は横町の三五郎なり、思ふさまに擲かれて蹴られて其二三日は立居も苦しく、夕ぐれ毎に父親が空車を五十軒の茶屋が軒まで運ぶにさへ、三公は何うかしたか、ひどく弱つて居るやうだと見知りの臺屋に咎められしほど成しが、父親はお辭義の鐵として目上の人に頭をあげた事なく廓内なの旦那は言はずともかの事、大屋様地主様いづれの御無理も御尤と受ける質なれば、長吉と喧嘩してこれこれの亂暴に逢ひましたと訴へればとて、それは何うも仕方が無い

大屋さんの息子さんでは無いか、此方に理が有らうが先方が悪るからうが喧嘩の相手に成るといふ事は無い、謝罪て来い謝罪て来い途方も無い奴だと我子を叱りつけて、長吉がもとへあやまりに遣られる事必定なれば、三五郎は口惜しさを噛みつぶして七日十日と程をふれば、痛みの場處の愈ると共に其うらめしさも何時しか忘れて、頭かしらの家の赤ん坊が守りをして二錢が駄賃なほをうれしがり、ねんくよ、おころりよ、と背負ひあるくさま、年はと問へば生意氣ざかりの十六にも成りながら其大躰づうたいを恥かしげにもなく、表町へものこくと出かけるに、何時も美登利と正太なふが鬻りものに成つて、お前は性根を何處へ置いて来たとからかはれながらも遊びの中間は外れざりき。

春は櫻の賑ひよりかけて、なき玉菊が燈籠の頃、つゞいて秋の新

仁和賀には十分間に車の飛ぶ事此通りのみにて七十五輛と數へしも、二の替りさへいつしか過ぎて、赤蜻蛉田圃に乱るれば横堀に鶉うづらなく頃も近づきぬ、朝夕の秋風身にしみ渡りて上清じやうせいが店の蚊遣香懷爐灰に座をゆづり、石橋の田村やが粉挽く臼の音さびしく、角海老かどえびが時計の響きもそゞろ哀れの音を傳へるやうに成れば、四季絶間なき日暮里にっぽりの火の光りも彼れが人を焼く烟りかとうら悲しく、茶屋が裏ゆく土手下の細道に落かゝるやうな三味の音を仰いで聞けば、仲之町藝者が冴えたる腕に、君が情の假寐かりねの床にと何ならぬ一ふし哀れも深く、此時節より通とほひ初はじめるは浮かれ浮かるゝ遊客ならで、身にしみぐくと實のあるお方のよし、遊女つとめあがりの去る女ひとが申き、此ほどの事かゝんもくだくしや大音寺前にて珍らしき事は盲目按摩の二十ばかりなる娘、かなはぬ戀に不自由なる身を恨みて水の谷の池

に入水じゅすゐしたるを新らしい事とて傳へる位なもの、八百屋の吉五郎に大工の太吉がさつぱりと影を見せぬが何とかせしと問ふに此一件であげられましたと、顔の眞中へ指をさして、何の子細なく取立て、噂をする者もなし、大路を見渡せば罪なき子供の三五人手を引つれて開いらいた開いらいた何の花ひらいたと、無心の遊びも自然と靜かにて、廓に通ふ車の音のみ何時に變らず勇ましく聞えぬ。

秋雨しとくと降るかと思へばさつと音して運びくる様なる淋しき夜、通りすがりの客をば待たぬ店なれば、筆やの妻は宵のほどより表の戸をたて、中に集まりしは例の美登利に正太郎、その外には小さき子供の二三人寄りて細螺きしやごはじきの幼なげな事して遊ぶほどに、美登利ふと耳を立て、あれ誰れか買物に來たのでは無いか溝板を踏む足音がするといへば、おや左様か、己いらは少つとも聞な

かつたと正太もちうくたこかいの手を止めて、誰れか中間が来たのでは無いかと嬉しがるに、門なる人は此店の前まで来たりける足音の聞えしばかり夫れよりはふつと絶えて、音も沙汰もなし。

十一

正太は潜りを明けて、ばあと言ひながら顔を出すに、人は二三軒先の軒下をたどりて、ぼつくと行く後影、誰れ誰れだ、おいお這入よと聲をかけて、美登利が足駄を突かけばきに、降る雨を厭はず駆け出さんとせしが、あゝ彼奴だと一ト言、振かへつて、美登利さん呼んだつても來はしないよ、一件だもの、と自分の頭つむぎを丸めて見せぬ。

信さんかへ、と受けて、嫌やな坊主つたら無い、屹度筆か何か買ひに來ただけけれど、私たちが居るものだから立聞きをして歸つたのであらう、意地悪るの、根生まがりの、ひねっこびれの、吃りの、齒かけの、嫌やな奴め、這入つて來たら散々と窘めてやる物を、歸つたは惜しい事をした、どれ下駄をお貸し、一寸見てやる、とて正太に代つて顔を出せば軒の雨だれ前髪に落ちて、おゝ氣味が悪ると首を縮めながら、四五軒先の瓦斯燈の下を大黒傘肩にして少しうつむいて居るらしくとぼくと歩む信如の後かげ、何時までも、何時までも、何時までも見送るに、美登利さん何うしたの、と正太は怪しがりて背中をつゝきぬ。

何うもしない、と氣の無い返事をして、上へあがつて細螺を數へながら、本當に嫌やな小僧とつては無い、表向きに威張つた喧嘩は

出来もしないで、温順しさうな顔ばかりして、根生がくすくすして居るのだもの憎くらしからうでは無いか、家の母さんが言ふて居たつけ、瓦落くして居る者は心が好いのだと、夫れだからくすくすして居る信さん何かは心が悪るいに相違ない、ねへ正太さん左様であらう、と口を極めて信如の事を悪く言へば、夫れでも龍華寺はまだ物が解つて居るよ、長吉と來たら彼れははやと、生意氣に大人の口を眞似れば、お廢しよ正太さん、子供の癖にませた様でをかしい、お前は餘つぽど剽輕へうきんものだね、とて美登利は正太の頬をつゝいて、其眞面目がほはと笑ひこけるに、己らだつても最少し經てば大人になるのだ、蒲田屋の旦那のやうに角袖外套か何か着てね、祖母さんが仕舞つて置く金時計を貰つて、そして指輪もこしらへて、巻煙草を吸つて、履く物は何が宜からうな、己らは下駄より雪駄が好きだ

から、三枚裏にして繻珍の鼻緒といふのを履くよ、似合ふだらうかと言へば、美登利はくすく笑ひながら、背の低い人が角袖外套に雪駄ばき、まあ何んなにか可笑しからう、目薬の瓶が歩くやうであらうと誹すに、馬鹿を言つて居らあ、それまでには己らだつて大きく成るさ、此様な小つぽけでは居ないと威張るに、夫れではまだ何時の事だか知れはしない、天井の鼠があれ御覽、と指をさすに、筆やの女房つまを始めとして座にある者みな笑ひころげぬ。

正太は一人眞面目に成りて例の目の玉ぐるぐるとさせながら、美登利さんは冗談にして居るのだね、誰れだつて大人に成らぬ者は無いに、己らの言ふが何故をかしからう、奇麗な嫁さんを貰つて連れて歩くやうに成るのだがなあ、己らは何でも奇麗のが好きだから、煎餅やのお福のやうな痘痕みっもやづらや、薪やのお出額でこのやうなが萬も一し來

ようなら、直さま追出して家へは入れて遣らないや、己らは痘痕あばたと濕しつつかきは大嫌ひと力を入れるに、主人あるじの女は吹出して、それでも正さん宜く私が店へ来て下さるの、伯母さんの痘痕は見えぬかえと笑ふに、夫れでもお前は年寄りだもの、己らの言ふのは嫁さんの事さ、年寄りは何でも宜いとあるに、夫れは大失敗おほしくじりだねと筆やの女房おもしろづくに御機嫌を取りぬ。

町内で顔の好いのは花屋のお六さんに、水菓子やの喜いさん、夫れよりも、夫れよりもずんと好いはお前の隣に据つてお出なさるのなれど、正太さんはまあ誰れにしようかと極めてあるえ、お六さんの眼つきか、喜いさんの清元か、まあ何れをえ、と問はれて、正太顔を赤くして、何だお六づらや、喜い公、何處が好い者かと釣りらんぶの下を少し居退きて、壁際の方へと尻込みをすれば、それでは美

登利さんが好いのであらう、さう極めて御座んすの、と圖星をさゝ
れて、そんな事を知る物か、何だ其様な事、とくるり後を向いて壁
の腰ばりを指でたゞきながら、廻れくゝ水車を小音に唱ひ出す、美
登利は衆人おほくの細螺きしやこを集めて、さあ最う一度はじめからと、これは顔
をも赤らめざりき。

十二

信如が何時も田町へ通ふ時、通らでも事は濟めども言はゞ近道の
土手々前に、假初の格子門、のぞけば鞍馬の石燈籠に萩の袖垣しを
らしう見えて、椽先に巻きたる簾のさまもなつかしう、中がらすの
障子のうちには今様の按察あざちの後室が珠數をつまぐつて、冠かぶつ切りの

若紫も立出るやと思はるゝ、その一ツ構へが大黒屋の寮なり。

昨日も今日も時雨の空に、田町の姉より頼みの長胴着が出来たれば、すこし暫時も早う重ねさせたき親心、御苦勞でも學校まへの一寸の間に持つて行つて呉れまいか、定めて花も待つて居ようほどに、と母親よりの言ひつけを、何も嫌やとは言ひ切られぬ温順しさに、唯はいくくと小包みを抱へて、鼠小倉の緒のすがりし朴木ほ、のきば齒の下駄ひたひたと、信如は雨傘さしかざして出ぬ。

お齒ぐる溝の角より曲りて、いつも行くなる細道をたどれば、運わるう大黒やの前まで來し時、さつと吹く風大黒傘の上をつか掴みて、宙へ引あげるかと疑ふばかり烈しく吹けば、これは成らぬと力足を踏こたゆる途端、さのみに思はざりし前鼻緒のずるゝと抜けて、傘よりもこれこそ一の大事に成りぬ。

信如こまりて舌打はすれども、今更何と法のなければ、大黒屋の門に傘を寄せかけ、降る雨を庇に厭ふて鼻緒をつくるふに、常々仕馴れぬお坊さまの、これは如何な事、心ばかりは急れども、何としても甘くはすげる事の成らぬ口惜しさ、ぢれて、ぢれて、袂の中から記事文の下書きして置いた大半紙を掴み出し、ずん／＼と裂きて紙縷をよるに、意地わるの嵐またもや落し來て、立かけし傘のころと轉がり出るを、いま／＼しい奴めと腹立たしげにいひて、取止めんと手を延ばすに、膝へ乗せて置きし小包み意久地もなく落ちて、風呂敷は泥に、我着る物の袂までを汚しぬ。

見るに氣の毒なるは雨の中の傘なし、途中に鼻緒を踏み切りたるばかりは無し、美登利は障子の中ながら硝子ごしに遠く眺めて、あれ誰れか鼻緒を切つた人がある、母さん切れを遣つても宜う御座ん

すかと尋ねて、針箱の引出しから友仙ちりめんの切れ端をつかみ出し、庭下駄はくも鈍かしきやうに、馳せ出で、椽先の洋傘さすより早く、庭石の上を傳ふて急ぎ足に來たりぬ。

それと見るより美登利の顔は赤う成りて、何のやうの大事にでも逢ひしやうに、胸の動悸の早くうつを、人の見るかと背後の見られて、恐るく門の侍へ寄れば、信如もふつと振返りて、此れも無言に脇を流るゝ冷汗、跣足になりて逃げ出したき思ひなり。

平常の美登利ならば信如が難義の體を指さして、あれく彼の意久地なしと笑ふて笑ふて笑ひ抜いて、言ひたいまゝの悪まれ口、よくもお祭りの夜は正太さんに仇をするとして私たちが遊びの邪魔をさせ、罪も無い三ちゃんを擲かせて、お前は高見で采配を振つてお出なされたの、さあ謝罪なさんすか、何とで御座んす、私の事を女郎

女郎と長吉づらに言はせるのもお前の指圖、女郎でも宜いでは無いか、塵一本お前さんが世話には成らぬ、私には父さんもあり母さんもあり、大黒屋の旦那も姉さんもある、お前のやうな腥なまぐさのお世話には能うならぬほどに餘計な女郎呼はり置いて貰ひましょ、言ふ事があらば陰のくすくすならで此處でお言ひなされ、お相手には何時でも成つて見せます、さあ何とで御座んす、と袂とを捉らへて捲まくしかくる勢ひ、さこそは當り難うもあるべきを、物いはず格子のかけに小隠れて、さりとして立去るでも無しに唯うぢくと胸とゞるかすは平常の美登利のさまにては無かりき。

此處は大黒屋のと思ふ時より信如は物の恐ろしく、左右を見ずして直ひたあゆみに爲しなれども、生憎あやにくの雨、あやにくの風、鼻緒をさへに踏切りて、詮なき門下に紙縷を纏よる心地、憂き事さまざまに何うも堪へられぬ思ひの有しに、飛石の足音は背より冷水をかけられるが如く、顧みねども其人と思ふに、わな／＼と慄へて顔の色も變るべく、後向きに成りて猶も鼻緒に心を盡すと見せながら、半は夢中に此下駄いつまで懸りても履ける様には成らんともせざりき。

庭なる美登利はさしのぞいて、ゑゝ不器用な彼んな手つきして何うなる物ぞ、紙縷は婆々縷ばより、藁しべなんぞ前壺に抱かせたとて長もちのする事では無い、夫れ／＼羽織の裾が地について泥に成るは御

存じ無いか、あれ傘が轉がる、あれを疊んで立てかけて置けば好
いと一々鈍もどかしう齒がゆくは思へども、此處に裂れが御座んす、
此裂これでおすげなされと呼かくる事もせず、これも立盡して降雨袖に
侘しきを、厭ひもあへず小隠れて覗ひしが、さりとも知らぬ母の親
はるかに聲を懸けて、火のしの火が熾おこりましたぞえ、此美登利さん
は何を遊んで居る、雨の降るに表へ出ての悪戯は成りませぬ、又此
間のやうに風引かうぞと呼立てられるに、はい今行ますと大きく言
ひて、其聲信如に聞えしを恥かしく、胸はわくわくと上氣して、何
うでも明けられぬ門の際きはにさりとも見過しがたき難義をさまざまの
思案盡して、格子の間より手に持つ裂れを物いはず投げ出せば、見
ぬやうに見て知らず顔を信如のつくるに、ゑゝ例いづもの通りの心根と遣
る瀬なき思ひを眼に集めて、少し涕の恨み顔、何を憎んで其やうに

無情つれなきそぶりは見せらるゝ、言ひたい事は此方にあるを、餘りな人とこみ上るほど思ひに迫れど、母親の呼聲しばくくなるを侘しく、詮方なさに一ト足二タ足ゑ、何ぞいの未練くさい、思はく恥かすと身をかへして、かたくと飛石を傳ひゆくに、信如は今ぞ淋しう見かへれば紅入り友仙の雨にぬれて紅葉かたの形のうるはしきが我が足ちかく散ぼひたる、そゞろに床しき思ひは有れども、手に取あぐる事もせず空しう眺めて憂き思ひあり。

我が不器用をあきらめて、羽織の紐の長きをはづし、結ひつけにくるくると見とむなき間に合せをして、これならばと踏試るに、歩きにくき事言ふばかりなく、此下駄で田町まで行く事かと今さら難義は思へども詮方なくて立上る信如、小包みを横に二タ足ばかり此門をはなるるにも、友仙の紅葉眼に残りて、捨て、過ぐるにしのび

難く心残りして見返れば、信さん何うした鼻緒を切つたのか、其姿まゝは何だ、見ツとも無いなど不意に聲を懸どくる者のあり。

驚いて見かへるに暴れ者の長吉、いま廓内なよりの歸りと覺しく、裕衣を重ねし唐棧の着物に柿色の三尺を例の通り腰の先にして、黒八の襟のかゝつた新らしい半天、印の傘をさしかざし高足駄の爪皮も今朝よりとはしるき漆うるしの色、きわぐくしう見えて誇らし氣なり。

僕は鼻緒を切つて仕舞つて何う爲ようかと思つて居る、本當に弱つて居るのだ、と信如の意久地なき事を言へば、左様だらうお前に鼻緒の立ッこは無い、好いや己れの下駄を履いて行きねへ、此鼻緒は大丈夫だよといふに、夫れでもお前が困るだらう。何己れは馴れた物だ、斯うやつて斯うすると言ひながら急遽あわただしう七分三分に尻端折て、其様な結ひつけなんぞより是れが爽快さつぱりだと下駄を脱ぐに、お

前^{はだし}跣足になるのか夫れでは氣の毒だと信如困り切るに、好いよ、己
れは馴れた事だ信さんなんぞは足の裏が柔らかいから跣足で石ごろ
道は歩けない、さあ此れを履いてお出で、と揃へて出す親切さ、人
には疫病神のやうに厭はれながらも毛虫眉毛を動かして優しき詞の
もれ出るぞをかしき。信さんの下駄は己れが提げて行かう、臺處^{だいとこ}へ
抛り込んで置たら子細はあるまい、さあ履き替へて夫れをお出しと
世話をやき、鼻緒の切れしを片手に提げて、それなら信さん行てお
出、後刻^{のち}に學校で逢はうぜの約束、信如は田町の姉のもとへ、長吉
は我家の方^{かた}へと行別れるに思ひの止まる紅入の友仙は可憐^{いぢら}しき姿を
空しく格子門の外にと止めぬ。

十四

此年三の酉まで有りて中一日はつぶれしかど前後の上天氣に大鳥神社の賑ひすさまじく此處をかこつけに検査場の門より乱れ入る若人達の勢ひとしては、天柱くだけ、地維ちいかくるかと思はるゝ笑ひ聲のどよめき、中之町の通りは俄かに方角の替りしやうに思はれて、角町京町處々のはね橋より、さつさ押せくと猪牙ちよきがゝつた言葉に人波を分くる群もあり、河岸の小店の百轉もくさへづりより、優にうづ高き大籬おほまがきの樓上まで、絃歌の聲のさまぐくに沸き來るやうな面白さは大方の人おもひ出で、忘れぬ物に思おぼすも有るべし。正太は此日日がけの集めを休ませ貰ひて、三五郎が大頭おほがしらの店を見舞ふやら、團子屋の背高が愛想氣のない汁粉やを音づれて、何うだ儲けがあるかえと言

へば、正さんお前好い處へ來た、我れが餡この種なしに成つて最う
今からは何を賣らう、直様煮かけては置いたけれど中途お客は斷れ
ない、何うしような、と相談を懸けられて、智惠無しの奴め大鍋の
四邊に夫れッ位無駄がついて居るでは無いか、夫れへ湯を廻して砂
糖さへ甘くすれば十人前や二十人は浮いて來よう、何處でも皆な左
様するのだお前の店ばかりではない、何此騒ぎの中で好惡を言ふ物
が有らうか、お賣りお賣りと言ひながら先に立つて砂糖の壺を引寄
すれば、目ツかちの母親おどろいた顔をして、お前さんは本當に
商人に出來て居なさる、恐ろしい智惠者だと賞めるに、何だ此様な
事が智惠者な物か、今横町の潮吹き之處で餡が足りないッて此様や
つたを見て來たので己れの發明では無い、と言ひ捨て、お前は知
らないか美登利さんの居る處を、己れは今朝から探して居るけれど

何處へ行たか筆やへも來ないと言ふ、廓内なだらうかなと問へば、むゝ美登利さんはな今の先己れの家の前を通つて揚屋町の刎橋はねばしから這入つて行た、本當に正さん大變だぜ、今日はね、髪を斯ういふ風にこんな嶋田に結つてと、變てこな手つきして、奇麗だね彼の娘こはと鼻を拭つゝ言へば、大卷さんより猶美いいや、だけれど彼の子も華魁おいらんに成るのでは可憐さうだと下を向ひて正太の答ふるに、好いじやあ無いか華魁になれば、己れは來年から際物屋きはものやに成つてお金をこしらへるがね、夫れを持つて買ひに行くのだと頓馬を現はすに、洒落しやらくさい事を言つて居らあ左うすればお前はきつと振られるよ。何故々々。何故でも振られる理由わけが有るのだもの、と顔を少し染めて笑ひながら、夫れじやあ己れも一廻りして來ようや、又後に來るよと捨て臺辭して門に出て、十六七の頃までは蝶よ花よと育てられ、と怪しき

ふるへ聲に此頃此處の流行はやりぶしを言つて、今では勤めが身にしみてと口の内にくり返し、例の雪駄の音たかく浮きたつ人の中に交りて小さき身軀は忽ちに隠れつ。

揉まれて出し廓の角、向ふより番頭新造のお妻と連れ立ちて話しながら來るを見れば、まがひも無き大黒屋の美登利なれども誠に頓馬の言ひつる如く、初々しき大嶋田結ひ綿のやうに絞りばなしふさふさとかけて、鼈甲べっかうのさし込、總ふさつきの花かんざしひらめかし、何時よりは極彩色のたゞ京人形を見るやうに思はれて、正太はあつとも言はず立止まりしまゝ例いづもの如くは抱きつきもせで打守るに、彼方こなたは正太さんかとして走り寄り、お妻どんお前買ひ物が有らば最う此處でお別れにしましよ、私は此人と一處に歸ります、左様ならとて頭を下げるに、あれ美しいちゃんの現金な、最うお送りは入りませぬと

かえ、そんなら私は京町で買物しましよ、とちよこく走りに長屋の細道へ駆け込むに、正太はじめて美登利の袖を引いて好く似合ふね、いつ結つたの今朝かへ昨日かへ何故はやく見せては呉れなかつた、と恨めしげに甘ゆれば、美登利打しほれて口重く、姉さんの部屋で今朝結つて貰つたの、私は厭やでしょうが無い、とさし俯向きで往來を恥ぢぬ。

十五

憂く恥かしく、つゝましき事身にあれば人の褒めるは嘲りと聞なされて、嶋田の鬚のなつかしさに振かへり見る人たちをば我れを蔑む眼つきと察とられて、正太さん私は自宅うちへ歸るよと言ふに、何故今

日は遊ばないのだらう、お前何か小言を言はれたのか、大卷さんと喧嘩でもしたのでは無いか、と子供らしい事を問はれて答へは何と顔の赤むあからばかり、連れ立ちて團子屋の前を過ぎるに頓馬は店より聲をかけてお中が宜しう御座いますと仰山な言葉を聞くより美登利は泣きたいやうな顔つきして、正太さん一處に來ては嫌やだよと、置きざりに一人足を早めぬ。

お西さまへ諸共にと言ひしを道引違へて我が家の方かたへと美登利の急ぐに、お前一處には來て呉れないのか、何故其方へ歸つて仕舞ふ、餘りだぜと例の如く甘へてかゝるを振切るやうに物言はず行けば、何の故とも知らねども正太は呆れて追ひすがり袖を止めては怪しがるに、美登利顔のみ打赤めて、何でも無い、と言ふ聲理わけ由あり。

寮の門をばくゞり入るに正太かねても遊あそびに來馴れて左のみ遠慮

の家にもあらねば、跡より續いて椽先からそつと上るを、母親見るより、おゝ正太さん宜く来て下さつた、今朝から美登利の機嫌が悪くて皆なあぐねて困つて居ます、遊んでやつて下されと言ふに、正太は大人らしい惶かしこまりて加減が悪るいのですかと眞面目に問ふを、いゝゑ、と母親怪しき笑顔をして少し経てば愈なほりませう、いつでも極りの我まゝ様さん、嘸お友達とも喧嘩しませうな、眞實ほんじつやり切れぬ嬢さまではあるとて見かへるに、美登利はいつか小座敷に蒲團抱卷持出でゝ、帯と上着を脱ぎ捨てしばかり、うつ伏し臥して物をも言はず。

正太は恐るゝ枕もとへ寄つて、美登利さん何うしたの病氣なのか心持が悪いのか全体何うしたの、と左のみは摺寄らず膝に手を置いて心ばかりを悩ますに、美登利は更に答へも無く押ゆる袖にし

び音の涕、まだ結ひこめぬ前髪の毛の濡れて見ゆるも子細ありとは
しるけれど、子供心に正太は何と慰めの言葉も出ず唯ひたすらに困
り入るばかり、全体何が何うしたのだらう、己れはお前に怒られる
事はしもしないに、何が其様なに腹が立つの、と覗き込んで途方に
くるれば、美登利は眼を拭ふて正太さん私は怒つて居るのでは有り
ません。

夫れなら何うしてと問はれゝば憂き事さまざま是れは何うでも話
しのほかの包ましさなれば、誰れに打明けいふ筋ならず、物言はず
して自づと頬の赤うなり、さして何とは言はれねども、次第次第に
心細き思ひ、すべて昨日の美登利の身に覺えなかりし思ひをまうけ
て物の恥かしさ言ふばかりなく、成事ならば薄暗き部屋のうちに誰
れとて言葉をかけもせず我が顔ながむる者なしに一人氣まゝの朝夕

を経たや、さらば此様の憂き事ありとも人目つゝましからずば斯く
迄物は思ふまじ、何時までも何時までも人形と紙雛あひねさまとをあひ手
にして飯事まじごと許りして居たらば嘸かし嬉しき事ならんを、ゑゝ厭や厭
や、大人に成るは厭やな事、何故このやうに年をば取る、最う七月
十月とつき、一年も以前もとへ歸りたいにと老人としやうじみた考へをして、正太の此
處にあるをも思はれず、物いひかければ悉く蹴ちらして、歸つてお
呉れ正太さん、後生だから歸つてお呉れ、お前が居ると私は死んで
仕舞ふであらう、物を言はれると頭痛がする、口を利くと眼がまわ
る、誰れもくゝ私の處へ來ては厭やなれば、お前も何卒歸つてと例
に似合ぬ愛想づかし、正太は何故なにとも得ぞ解なきがたく、烟のうちに
あるやうにてお前は何うしても變てこだよ、其様な事を言ふ筈は無
いに、可怪しい人だね、と是れはいさゝか口惜しき思ひに、落つい

て言ひながら目には氣弱の涙のうかぶを、何とて夫れに心を置くべき歸つてお呉れ、歸つてお呉れ、何時まで此處に居て呉れ、ば最うお友達でも何でも無い、厭やな正太さんと憎くらしげに言はれて、夫れならば歸るよ、お邪魔さまで御座いましたとて、風呂場に加減見る母親には挨拶もせず、ふいと立つて正太は庭先よりかけ出しぬ。

十六

眞一文字に驅けて人中を抜けつ潜りつ、筆屋の店へをどり込めば、三五郎は何時か店をば賣仕舞ふて、腹掛のかくしへ若干金かをぢやらつかせ、弟妹引つれつ、好きな物をば何でも買への大兄様、大愉快の最中へ正太の飛込み來しなるに、やあ正さん今お前をば探して

居たのだ、己れは今日は大分の儲けがある、何か奢つて上やうかと
言へば、馬鹿をいへ手前に奢つて貰ふ己れでは無いわ、黙つて居る
生意氣は吐くなど何時になく荒らい事を言つて、夫れどころでは無
いと鬱ぐに、何だ何だ喧嘩かと喰べかけの餡ぱんを懷中に捻ぢ込
んで、相手は誰れだ、龍華寺か長吉か、何處で始まつた廓内か鳥居
前か、お祭りの時とは違ふぜ、不意でさへ無くば負けはしない、己
れが承知だ先棒は振らあ、正さん膽ツ玉をしつかりして懸りねへ、
と競ひかゝるに、ゑゝ氣の早い奴め、喧嘩では無い、とて流石に言
ひかねて口を噤めば、でもお前が大層らしく飛込んだから己れは一
途に喧嘩かと思つた、だけれど正さんは今夜はじまらなければ最う
是れから喧嘩の起りッこは無いね、長吉の野郎片腕がなくなる物と
言ふに、何故どうして片腕がなくなるのだ。お前知らずか己れも唯

今うちの父さんが龍華寺の御新造と話して居たを聞いたのだが、信さんは最う近々何處かの坊さん學校へ這入るのだとさ、衣を着て仕舞へば手が出ねへや、空つきり彼あんな袖のぺらくした、恐ろしい長い物を捲り上げるのだからね、左うなれば來年から横町も表も残らずお前の手下だよと煽そやすに、廢して呉れ二錢貰ふと長吉の組に成るだらう、お前みたやうのが百人中間に有たとて少とも嬉しい事は無い、着きたい方へ何方へでも着きねへ、己れは人は頼まない眞ほんの腕ツこで一度龍華寺とやりたかつたに、他處へ行かれては仕方が無い、藤本は來年學校を卒業してから行くのだと聞いたが、何うして其様に早く成つたらう、爲様のない野郎だと舌打しながら、夫れは少しも心に止まらねども美登利が素振のくり返されて正太は例の歌も出ず、大路の往來の夥たゞしきさへ心淋しければ賑やかなりとも

思はれず、火ともし頃より筆やが店に轉がりて、今日の酉の市目茶
く此處も彼處も怪しき事成りき。

美登利はかの日を始めにして生れかはりし様の身の振舞、用ある
折は廓の姉のもとにこそ通へ、かけても町に遊ぶ事をせず、友達さ
びしがりて誘ひにと行けば今に今にと空約束はてし無く、さしもに
中よし成けれど正太とさへに親しまず、いつも恥かし氣に顔のみ赤
めて筆やの店に手踊の活潑さは再び見るに難く成ける、人は怪しが
りて病ひの故かと危ぶむも有れども母親一人ほ、笑みては、今にお
俵きんの本性は現れまする、これは中休みと子細わありげに言はれて、知
らぬ者には何の事とも思はれず、女らしう温順しう成つたと褒める
もあれば折角の面白い子を種なしにしたと誹るもあり、表町は俄に

火の消えしやう淋しく成りて正太が美音も聞く事まれに、唯夜な
くくの弓張提燈、あれは日がけの集めとしるく土手を行く影そゞろ
寒げに、折ふし供する三五郎の聲のみ何時に變らず滑稽おどけては聞えぬ。

龍華寺の信如が我が宗の修業の庭に立出る風説うはさをも美登利は絶え
て聞かざりき、有し意地をば其まゝに封じ込めて、此處しばらくの
怪しの現象きさまに我れを我れとも思はれず、唯何事も恥かしうのみ有け
るに、或る霜の朝水仙の作り花を格子門の外よりさし入れ置きし者
の有けり、誰れの仕業と知るよし無けれど、美登利は何ゆゑとなく
懐かしき思ひにて違ひ棚の一輪ざしに入れて淋しく清き姿をめだけ
るが、聞くともなしに傳へ聞く其明けの日は信如が何がしの學林がくりんに
袖の色かへぬべき當日なりしとぞ。

使用書体

かな 欣喜堂SD ゆきぐみ ラージ W3

漢字 FOT 筑紫明朝 L

記号・約物 FOT 筑紫明朝 L

数字・欧文 Adobe Caslon Pro Regular

組版 小澤いずみ

公開 二〇一二年二月一日

たけくらべ

底本 「日本現代文學全集 10 樋口一葉集」講談社

一九六二（昭和三七）年一月一九日第一刷発行

一九六九（昭和四四）年一〇月一日第五刷発行

初出 「文學界」文學界雜誌社 一八九五（明治二八）年一

三、八、一、一二月、一八九六（明治二九）年一月

* 「文學界」に連載された後、「文藝俱樂部」一八九六（明治

二九）年四月に、一括掲載された。

* 底本では「乱」と「亂」、「烟」と「煙」、「蟲負」と「蟲負」

などの混在が見られますが、底本通りとしました。

入力 青空文庫

校正 米田進、小林繁雄

一九九七年一〇月一五日公開

二〇一一年四月三〇日修正

青空文庫作成ファイル

このファイルは、インターネットの図書館、

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、

ボランティアの皆さんです。

文
章

芥
川
龍
之
介

「堀川さん。弔辞を一つ作ってくれませんか？ 土曜日に本多少佐

の葬式がある、——その時に校長の読まれるのですが、……」

藤田大佐は食堂を出しなにかう保吉へ話しかけた。堀川保吉はこの学校の生徒に英吉利語の訳読を教えている。が、授業の合い間には弔辞を作ったり、教科書を編んだり、御前講演の添削をしたり、外国の新聞記事を翻訳したり、——そう云うことも時々はやらなければならぬ。そう云うことをまた云いつけるのはいつもこの藤田大佐である。大佐はやつと四十くらいであろう。色の浅黒い、肉の落ちた、神経質らしい顔をしている。保吉は大佐よりも一足あとに薄暗い廊下を歩みながら、思わず「おや」と云う声を出した。

「本多少佐は死なれたんですか？」

大佐も「おや」と云うように保吉の顔をふり返った。保吉はきのうずる休みをしたため、本多少佐の頓死を伝えた通告書を見ずにしまつたのである。

「きのうの朝歿なくなられたです。脳溢血のういつけつだと云うことですが、……
じゃ金曜日までに作って来て下さい。ちようどあさつての朝までにで
すね。」

「ええ、作ることは作りますが、……」

悟りさとの早い藤田大佐はたちまち保吉の先まわりをした。

「弔辞しよじを作られる参考には、後ほど履歴書りれきしよをおとどけしましょう。」

「しかしどう云う人だったでしょう？ 僕はただ本多少佐の顔だけ
見覚えているくらいなんです、……」

「さあ、兄弟思いの人だったですね。それから……それからいつ
もクラス・ヘッドだった人です。あとはどうか名筆よふを揮ふるって置いて下
さい。」

二人はもう黄色きいろに塗ぬった科長室ドアの扉ドアの前に立っていた。藤田大佐は
科長と呼ばれる副校長の役をしているのである。保吉はやむを得ず弔
辞しよじに関する芸術的良心ほうてきを抛擲ほうてきした。

「資性穎悟と兄弟に友にですな。じゃどうにかこじつけましよう。」

「どうかよろしくお願いします。」

大佐に別れた保吉は喫煙室へ顔を出さずに、誰も人のいない教官室へ帰った。十一月の日の光はちょうど窓を右にした保吉の机を照らしている。彼はその前へ腰をおろし、一本のバットへ火を移した。弔辞はもう今日までに二つばかり作っている。最初の弔辞は盲腸炎になった重野少尉のために書いたものだった。当時学校へ来たばかりの彼は重野少尉とはどう云う人か、顔さえはつきりした記憶はなかった。

しかし弔辞の処女作には多少の興味を持っていたから、「悠々たるかな、白雲」などと唐宋八家文じみた文章を草した。その次のは不慮の溺死を遂げた木村大尉のために書いたものだった。これも木村大尉その人とは毎日同じ避暑地からこの学校の所在地へ汽車の往復を共にしていたため、素直に哀悼の情を表すことが出来た。が、今度の本多少佐はただ食堂へ出る度に、禿げ鷹に似た顔を見かけただけである。のみ

ならず弔辞を作ることには興味も何も持っていない。云わば現在の堀川保吉は註文を受けた葬儀社である。何月何日の何時までに竜燈りゆうとうや造花を持って来いと云われた精神生活上の葬儀社である。——保吉はバツトを啣くわえたまま、だんだん憂鬱になりはじめた。……

「堀川教官。」

保吉は夢からさめたように、机の側に立った田中中尉を見上げた。

田中中尉は口髭くちひげの短い、まるまると顎あごの二重になった、愛敬あいきょうのある顔の持主である。

「これは本多少佐の履歴書だそうです。科長から今堀川教官へお渡ししてくれと云うことでしたから。」

田中中尉は机の上へ罫紙けいしを何枚も綴とじたのを出した。保吉は「はあ」と答えたぎり、茫然と罫紙へ目を落した。罫紙には叙任じよにんの年月ばかり細かい楷書かいしよを並べている。これはただの履歴書ではない。文官と云わず武官と云わず、あらゆる天下の官吏なるものの一生を暗示する象徴

である。……

「それから一つ伺いたい言葉があるのですが、——いや、海上用語じゃありません。小説の中にあつた言葉なんです。」

中尉の出した紙切れには何か横文字の言葉が一つ、青鉛筆の痕を残している。Masochism —— 保吉は思わず紙切れから、いつも頬に赤みのさした中尉の童顔へ目を移した。

「これですか？ このマソヒズムと云う……」

「ええ、どうも普通の英和辞書には出て居らんように思いますが。」
保吉は浮かない顔をしたまま、マソヒズムの意味を説明した。

「いやあ、そう云うことですか！」

田中中尉は不相変晴ればれた微笑を浮かべている。こう云う自足した微笑くらい、苛立たしい気もちを煽るものはない。殊に現在の保吉は実際この幸福な中尉の顔へクラフト・エビングの全語彙を叩きつけてやりたい誘惑さえ感じた。

「この言葉の起源になった、——ええと、マゾフと云いましたな。その人の小説は巧うまいんですか？」

「まあ、ことごとく愚作ですね。」

「しかしマゾフと云う人とはとにかく興味のある人格なんですか？」

「マゾフですか？ マゾフと云うやつは莫迦ぼかですよ。何しろ政府は国防計画よりも私娼保護ししょうほごに金を出せと熱心に主張したそうですからね。」

マゾフの愚を知った田中中尉はやっと保吉を解放した。もっともマゾフは国防計画よりも私娼保護を重んじたかどうか、その辺は甚だはつきりしない。多分はやはり国防計画にも相当の敬意を払っていたであろう。しかしそれをそう云わなければ、この楽天家の中尉の頭へんに変性慾たいせいよくの莫迦莫迦ぼかぼかしい所以ゆえんを刻きざみつけてしまうことは不可能だからである。……

保吉は一人になった後のち、もう一本バットに火をつけながら、ぶらぶら室内を歩みはじめた。彼の英吉利語イギリスを教えていることは前にも書いた

た通りである。が、それは本職ではない。少くとも本職とは信じていない。彼はとにかく創作を一生の事業とと思っている。現に教師になつてからも、たいてい二月ふたつきに一篇ひつぽうずつは短い小説を発表して来た。その一つ、——サン・クリストフの伝説を慶長版の伊曾保物語風いそほものがたりにちようど半分ばかり書き直したものは今月のある雑誌に載せられている。来月はまた同じ雑誌に残りの半分を書かなければならぬ。今月ももう七日なぬかとすると、来月号の締切り日は——弔辞ちようじなどを書いている場合ではない。昼夜兼行に勉強しても、元来仕事に手間てまのかかる彼には出上来るかどうか疑問である。保吉はいよいよ弔辞ちようじに対する忌いまいましさを感あじ出した。

この時大きい柱時計の静かに十二時半を報じたのは云わばニュウトンの足もとへ林檎りんごの落ちたのも同じことである。保吉の授業の始まるまではもう三十分待たなければならぬ。その間あいだに弔辞ちようじを書いてしまえば、何も苦しい仕事の合い間に「悲しいかな」を考えずとも好いい。も

つともたった三十分の間に資性穎悟にして兄弟に友なる本多少佐を追悼するのは多少の困難を伴っている。が、そんな困難に辟易するようでは、上は柿本人麻呂から下は武者小路実篤に至る語彙の豊富を誇っていたのもことごとく空威張りになってしまふ。保吉はたちまち机に向うと、インク壺へペンを突こむが早いか、試験用紙のフウルス・カッパへ一気に弔辞を書きはじめた。

×

×

×

本多少佐の葬式の日は少しも懸け価のない秋日和だった。保吉はフロック・コオトにシルク・ハットをかぶり、十二三人の文官教官と葬列のあとについて行った。その中にふと振り返ると、校長の佐佐木中将を始め、武官では藤田大佐だの、文官では栗野教官だのは彼よりも後ろに歩いている。彼は大いに恐縮したから、直後ろにいた藤田大佐

へ「どうかお先へ」と会釈をした。が、大佐は「いや」と云ったぎり、妙ににやにや笑っている。すると校長と話していた、口髭の短い栗野教官はやはり微笑を浮かべながら、常談とも真面目ともつかないよう、にこう保吉へ注意をした。

「堀川君。海軍の礼式じゃね、高位高官のものほどあとに下るんだから、君はとうてい藤田さんの後塵などは拝せないですよ。」

保吉はもう一度恐縮した。なるほどそう云われて見れば、あの愛敬のある田中中尉などはずっと前の列に加わっている。保吉は匆匆大股に中尉の側へ歩み寄った。中尉はきょうも葬式よりは婚禮の供にでも立ったように欣々と保吉へ話しかけた。

「好い天気ですなあ。……あなたは今葬列に加わられたんですか？」
「いや、ずっと後ろにいたんです。」

保吉はさっきの顛末を話した。中尉は勿論葬式の威厳を傷けるかと思うほど笑い出した。

「始めてですか、葬式に来られたのは？」

「いや、重野少尉の時にも、木村大尉の時にも出て来たはずです。」

「そう云う時にはどうされたですか？」

「勿論校長や科長よりもずっとあとについていたんでしよう。」

「そりやどうも、——大將格になった訣わけですな。」

葬列はもう寺に近い場末ばすえの町にはいつている。保吉は中尉と話しながら、葬式を見に出た人々にも目をやることを忘れなかった。この町の人々は子供の時から無数の葬式を見ているため、葬式の費用を見積みつもることに異常の才能を生じている。現に夏休みの一日前に数学を教えきりやまる桐山教官のお父さんの葬列の通った時にも、ある家の軒下のきしたに佇たたずんだ甚平じんべい一つの老人などは洩団扇しふうちわを額ひたいへかざしたまま、「ははあ、十五円の葬とむらいだな」と云った。きょうも、——きょうは生憎あいにくあの時のように誰もその才能を発揮しない。が、大本教の神主おおもときようかんぬしが一人、彼自身の子供らしい白しらっ子こを肩車かたぐるまにしていたのは今日こんにち思い出しても奇観である。保

吉はいつかこの町の人々を「葬式」とか何とか云う短篇の中に書いて見たいと思ったりした。

「今月は何とかほろ、上人しやうにんと云う小説をお書きですな。」

愛想の好い田中中尉はしつきりなしに舌をそよがせている。

「あの批評が出ていましたぜ。けさの時事、——いや、読売よみうりでした。後のちほど御覧に入れましょう。外套がいとうのポケットにはいつていますから。」

「いや、それには及びません。」

「あなたは批評をやられんようですな。わたしはまた批評だけは書いて見たいと思ってるんです。例えばシェクスピアのハムレットですな。あのハムレットの性格などは……」

保吉はたちまち大悟だいごした。天下に批評家の充満しているのは必ずしも偶然ではなかったのである。

葬列はとうとう寺の門へはいった。寺は後ろの松林の間に風ないだ海を見下みおろしている。ふだんは定めし閑静であろう。が、今は門の中は葬

列の先に立って来た学校の生徒に埋められている。保吉は庫裡の玄関に新しいエナメルの靴を脱ぎ、日当りの好い長廊下を畳ばかり新しい会葬者席へ通った。

会葬者席の向う側は親族席になっている。その上座に坐っているのは本多少佐のお父さんであろう。やはり禿げ鷹に似た顔はすっかり頭の白いだけに、令息よりも一層慄慄である。その次に坐っている大学生は勿論弟に違いあるまい。三番目のは妹にしては器量の好過ぎる娘さんである。四番目のは——とにかく四番目以後の人にはこれと云う特色もなかったらしい。こちら側の会葬者席にはまず校長が坐っている。その次には科長が坐っている。保吉はちょうど科長のま後ろ、——会葬者席の二列目にズボンの尻を据えることにした。と云っても科長や校長のようにちゃんと膝を揃えたのではない。容易に痺れの切れないように大胡坐をかいてしまったのである。

読経は直にはじまった。保吉は新内を愛するように諸宗の読経をも

愛している。が、東京乃至東京近在の寺は不幸にも読経の上にさえたいていは墮落を示しているらしい。昔は金峯山の蔵王をはじめ、熊野の権現、住吉の明神なども道明阿闍梨の読経を聴きに法輪寺の庭へ集まったそうである。しかしそう云う微妙音はアメリカ文明の渡来と共に、永久に穢土をあとにしてしまった。今も四人の所化は勿論、近眼鏡をかけた住職は国定教科書を諳誦するように提婆品か何かを讀み上げている。

その中に読経の切れ目へ来ると、校長の佐佐木中将はおもむろに少佐の寝棺の前へ進んだ。白い綸子に蔽われた棺はちようど須弥壇を正面にして本堂の入り口に安置してある。そのまた棺の前の机には造花の蓮の花の仄めいたり、蠟燭の炎の靡いたりする中に勳章の箱なども飾ってある。校長は棺に一礼した後、左の手に携えていた大奉書の帛辞を繰りひろげた。帛辞は勿論二三日前に保吉の書いた「名文」である。「名文」は格別恥ずる所はない。そんな神経はとうの昔、古い革

砥とのように擦すり減へらされている。ただこの葬式そうしきの喜劇きげきの中に彼自身も弔辞ひつじの作者さくしやと云う一役ひとやくを振ひられていることは、——と云うよりもむしろそう云う事実じじつをあからさまに見みせつけられることはとにかく余り愉快えきげきではない。保吉たけきちは校長けいちょうの咳せき払いばらいと同時に、思おもわず膝ひざの上うへへ目を伏ふせてしまった。

校長けいちょうは静しずかに読よみはじめた。声こゑはやや錆さびびを帯おびた底そこにほとんど筆ふで舌したを超越ちやうえつした哀切あいきげの情なさけをこもらせている。とうてい他人たにんの作つくった弔辞ひつじを讀よみ上げていいるなどとは思おもわれなない。保吉たけきちはひそかに校長けいちょうの俳優はいゆう的てき才能さい能に敬服けいぷくした。本堂ほんだうはもとよりひっそりしている。身動みぶきささえ滅多めつたにするものはない。校長けいちょうはいよいよ沈痛しんづうに「君きみ、資性しせい穎悟えいご兄弟ごうていに友ともに」と讀よみつづけた。すると突然とつぜん親族しんぞく席せきに誰たれかくすくす笑わらい出したものがある。のみならずその笑わらい声こゑはだんだん声高こゑたかになって来きるらしい。保吉たけきちは内心しんぎよっとしなながら、藤田大佐ふじただいさの肩越かたこしに向むかう側がわの人々ひとびとを物色ぶつしやくした。と同時に場所柄ばしよがらを失うした笑わらい声こゑだと思おもったものは泣なき声こゑだっ

たことを発見した。

声の主は妹である。旧式の束髪を俯向けたかげに絹の手中を顔に当てた器量好しの娘さんである。そればかりではない、弟も——武骨そうに見えた大学生もやはり涙をすすり上げている。と思うと老人もしっきりなしに鼻紙を出してはしめやかに鼻をかみつづけている。保吉はこう云う光景の前にまず何よりも驚きを感じた。それからまんまと看客を泣かせた悲劇の作者の満足を感じた。しかし最後に感じたものはそれらの感情よりも遙かに大きい、何とも云われぬ気の毒さである。尊い人間の心の奥へ知らず識らず泥足を踏み入れた、あやまるにもあやまれない気の毒さである。保吉はこの気の毒さの前に、一時間に亘る葬式中、始めて悄然と頭を下げた。本多少佐の親族諸君はこう云う英吉利語の教師などの存在も知らなかったのに違いない。しかし保吉の心の中には道化の服を着たラスコルニコフが一人、七八年たった今日もぬかるみの往来へ跪いたまま、平に諸君の高免を請いたいと

思っているのである。……………

葬式のあった日の暮れがたである。汽車を降りた保吉は海岸の下宿へ帰るため、篠垣ばかり連った避暑地の裏通りを通りかかった。狭い往来は靴の底にしつとりと砂をしめらせている。靄ももういつか下り出したらしい。垣の中に簇った松は疎らに空を透かせながら、かすかに脂の香を放っている。保吉は頭を垂れたまま、そう云う静かさにも頓着せず、ぶらぶら海の方へ歩いて行った。

彼は寺から帰る途中、藤田大佐と一しよになった。すると大佐は彼の作った弔辞の出来栄えを賞讃した上、「急焉玉碎す」と云う言葉はいかにも本多少佐の死にふさわしいなどと云う批評を下した。それだけでも親族の涙を見た保吉を弱らせるには十分である。そこへまた同じ汽車に乗った愛敬者の田中中尉は保吉の小説を批評している読売新聞の月評を示した。月評を書いたのはまだその頃文名を馳せていた

N氏である。N氏はさんざん罵倒ぼとうした後のち、こう保吉に止めとどを刺して
いた。——「海軍××学校教官の余技は全然文壇には不必要である」！

半時間もかからずに書いた弔辞は意外の感銘を与えている。が、幾
晩も電燈の光りに推敲すいこうを重ねた小説はひそかに予期した感銘の十分の
一も与えていない。勿論彼はN氏の言葉を一笑に付する余裕よゆうを持つて
いる。しかし現在の彼自身の位置は容易いっしょように一笑に付することは出来な
い。彼は弔辞には成功し、小説には見事に失敗した。これは彼自身の
身になって見れば、心細い気きのすることは事実である。一体運命は
彼のためにいつこう云う悲しい喜劇の幕を下おろしてくれるであろう？

……

保吉はふと空を見上げた。空には枝を張った松の中に全然光りのな
い月が一つ、赤銅色しやくどういろにはつきりかかっている。彼はその月を眺めてい
るうちに小便をした気がした。人通りは幸い一人もない。往来の左
右は不相変あいかわらずひっそりした篠垣の一系列である。彼は右側の垣の下へ長な

がと寂しい小便をした。

するとまだ小便をしているうちに、保吉の目の前の篠垣はぎいと後ろへ引きあげられた。垣だとばかり思っていたものは垣のように出来た木戸きどだったのであろう。そのまた木戸から出て来たのを見れば、口髭ひげを蓄たくわえた男である。保吉は途方とほうに暮れたから、小便だけはしつづけたまま、出来るだけゆっくり横向きになった。

「困りますなあ。」

男はぼんやりこう云った。何だか当惑そのものの人間になったような声をしている。保吉はこの声を耳にした時、急に小便も見えないほど日の暮れているのを発見した。

(大正十三年三月)

本文書体 和字:SDときわぎロマンチック W3

漢字:游明朝体 M

公開 2021年9月25日

組版 今田欣一

底本:「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987(昭和62)年2月24日第1刷発行

1995(平成7)年4月10日第6刷発行

底本の親本:「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971(昭和46)年3月～1971(昭和46)年11月

入力:j.utiyama

校正:かとうかおり

1999年1月8日公開

2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル:

このファイルは、インターネットの図書館、

青空文庫(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。

入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さんです。

余と万年筆

夏目漱石

此間魯庵君ろあんに会った時、丸善の店で一日に万年筆が何本位売れるだろうと尋ねたら、魯庵君は多い時は百本位出るそうだと答えた。夫それでは一本の万年筆がどの位長く使えるだろうと聞いたら、此間横浜よこのもので、ペンはまだ可なりだが、軸じくが減ったから軸丈だけ易かえて呉くれと云って持って来たのがあるが、此人は十三年前に一本買ったざりで、其一本を今日まで絶えず使用していたのだというから、是これがまあ一番長い例らしいと話した。して見ると普通の場合ではいくら残酷に使っても大抵六七年の保証は付けられるのが、一般の万年筆

の運命らしい。一本で夫程長く使えるものが日に百本も出ると云えば万年筆を需用する人の範圍は非常な勢を以て広がりがりつつあると見ても満更見当違いの觀察とも云われない様である。尤も多し中には万年筆道楽という様な人があつて、一本を使い切らないうちに飽が来て、又新しいのを手に入れたくなり、之を手に入れて少時すると、又種類の違つた別のものが欲しくなるといった風に、夫から夫へと各種のペンや軸を試みて嬉しがるそうだが、是は今の日本に沢山あり得る道楽とも思えない。西洋では煙管に好みを有つて、大小長短色々取り交ぜた一組を綺麗に暖炉の上などに並べて愉快がある。単に蒐集狂という点から見れば、此煙管を飾る人も、盃を寄せる人も、瓢箪を溜める人も、皆同じ興味に駆られるので、同種類のものうちで、素人に分らない様な微妙な差別を鋭敏に感じ

分ける比較力の優秀を愛するに過ぎない。万年筆狂も性質から云えば、多少実用に近い点で、以上と区別の出来ない事もないが、強いて無くても済むものを五つも六つも取り揃えるのだから今挙げた種類の蒐集狂と大した変りのある筈がない。ただ其数に至っては、少なくとも目下の日本の状態では、西洋の煙管氣狂の十分の一も無からうと思う。だから丸善で売れる一日に百本の万年筆の九十九本迄は、尋常の人間の必要に逼られて机上若くはポケット内に備え付ける実用品と見て差支あるまい。して見ると、万年筆が輸入されてから今日迄に既に何年を経過したか分らないが、兎に角高価の割には大變需要の多いものになりつつあるのは争う可らざる事実の様である。

万年筆の最上等になると一本で三百円もするのがあるとかいう話

である。丸善へ取り寄せてあるので既に六十五円とかいう高価なものがあるとか聞いた。固もとより一般の需要は十円内外の低廉ていれんな種類に限られているのだろうが、夫それにしても、一つ一銭のペンや一本三銭の水筆に比べると何百倍という高価に当るのだから、それが日に百本も売れる以上は、我々の購買力が此の便利ではあるが贅ぜい沢品と認めなければならぬものを愛玩あいかんするに適当な位進んで来たのか、又は座右ざいゆうに欠くべからざる必需品として価の廉不廉に拘かかわらず重宝ちゆうぼうがられるのか何方どちらかでなければならぬ。然しかし今其原因を一つに片付けるのは愚ぐの至として、又事実の許す如く、しばらく両方の因数が相合して此需要を引き起したとして、余はとくに余の見地から見、後者の方に重きを置きたいのである。

自白すると余は万年筆に余り深い縁故もなければ、又人に講釈す

る程に精通していない素人しろうとなのである。始めて万年筆を用い出してから僅か三四年にしかならないのでも親しみの薄い事は明らかに分る。尤も十二年前に洋行するとき親戚のものが餞別せんべつとして一本呉れたが、夫はまだ使わないうちに船のなかで器械体操の真似まねをしてすぐ壊して仕舞しまった。夫から外国にいる間は常にペンを使って事を足していたし、帰ってから原稿を書かなくてはならない境遇に置かれても、下手な字をペンでがしがし書いて済ましていた。それで三四年前になって何故万年筆に改めようと急に思い立ったか、其理由は今一寸思ちよつとい出せないが、第一に便利という実際のな動機に支配されたのは事実には違ない。万年筆に就つて何等の経験もない余は其時丸善からペリカンと称するのを二本買って帰った。そうして夫をいまだに用いているのである。が、不幸にして余のペリカンに対する感想

は甚だ宜しくなかつた。ペリカンは余の要求しないのに印氣を無暗にぼたぼた原稿紙の上へ落したり、又は是非墨色を出して貰わなければ濟まない時、頑として要求を拒絶したり、随分持主を虐待した。尤も持主たる余の方でもペリカンを厚遇しなかつたかも知れない。無精な余は印氣がなくなると、勝手次第に机の上にある何んな印氣でも構わずにペリカンの腹の中へ注ぎ込んだ。又ブリュー・ブラックの性来嫌な余は、わざわざセピヤ色の墨を買つて来て、遠慮なくペリカンの口を割つて吞ました。其上無經驗な余は如何にペリカンを取り扱ふべきかを解しなかつた。現にペリカンが如何に出洩つても、余は未だかつて彼を洗濯した試がなかつた。夫でペリカンの方でも半ば余に愛想を尽かし、余の方でも半ばペリカンを見限つて、此正月「彼岸過迄」を筆するときには又一と時代退歩して、

ペンとそうしてペン軸じくの旧弊な昔に逆戻りをした。其時余は始めて離別した第一の細君を後から懐なつかしく思う如く、一旦見棄いったんみすてたペリカんに未練の残っている事を発見したのである。唯ただのペンを用い出した余は、印氣インキの切れる度毎たびごとに墨壺すみつぼのなかへ筆を浸ひたして新たに書き始める煩わづらわしさに堪たえなかつた。幸にして余の原稿が夫程それほどの手数はぶが省けたとて早く出来上る性質のものでもなし、又ペンにすれば余の好むセピヤ色で自由に原稿紙を彩いろどる事が出来るので、まあ「彼岸過迄」の完結迄はペンで押し通す積つもりでいたが、其決心の底には何どうしても多少の負惜しみが籠こもっていた様である。

余の如く機械的の便利には夫程重きを置く必要のない原稿ばかり書いているものですら、又買い損なつたか、使い損なつたため、万年筆には多少手古擦てこざっているものですら、愈いよいよ万年筆を全廢すると

なると此位の不便を感じずる所をもって見ると、其他の人が価の如何に拘わらず、毛筆を棄てペンを棄てて此方に向うのは向う必要があるからで、財力ある貴公子や道楽息子どうらくむすこの玩具に都合のいい贅沢品ぜいたくひんだから売れるのではあるまい。

万年筆の丸善に於る需要をそう解釈した余は、各種の万年筆の比較研究やら、一々の利害得失やらに就て一言の意見を述べる事の出来ないのを大いに時勢後れの如くに恥じた。酒呑さけのみが酒を解する如く、筆を執る人が万年筆を解しなければ済まない時期が来るのはもう遠い事ではなからうと思う。ペリカン丈だけの経験で万年筆は駄目だという僕が人から笑われるのも間もない事とすれば、僕も笑われないうちに、少しは外の万年筆も試してみる必要があるだろう。現に此原稿は魯庵君ろあんが使って見ろといつてわざわざ贈つて呉れたオノトで

書いたのであるが、大変心持よくすらすら書いて愉快であつた。ペリカンを追い出した余は其姉妹に当るオノトを新らしく迎え入れて、それで万年筆に対して幾分か罪亡つみほろぼしをした積つもりなのである。

使用書体

かな／欣喜堂お、はなぶさM

漢字・約物・記号／リュウミン Pro W2

欧文・数字／Adobe Garamond Pro Regular

公開 二〇二三年二月一日

組版 @yundtom

底本

「筑摩全集類聚版 夏目漱石全集 10」筑摩書房

一九七二（昭和四七）年二月一〇日第一刷発行

※吉田精一による底本の「解説」によれば、発表年月は、一九二二（明治四五）年六月三〇日。

入力

Zana ohbe

校正

米田進

二〇〇二年五月一〇日作成

二〇五年二月四日修正

青空文庫作成ファイル

このファイルは、インターネットの図書館

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

修禪寺物語

岡本綺堂

(伊豆の修禪寺しゆぜんじに頼家よりいえの面おもてといふあり。作人も知れず。由来もいれず。木彫きでんの仮面かりんにて、年を経たるまま面目分明ならぬと、いわゆる古色蒼然こしきそうぜんたるもの、觀来くわんたつて一種の詩趣をおぼゆ。當時を追懐おぼしてこの稿成る。)

登場人物

面おもて作つく師り

夜や叉や王おう

夜叉王の娘

かつら

同

かえで

かえでの婿

春彦

源げん左ざ金きん吾ご頼ご家

下か田げ五や郎す景安

金かな窪くぼ兵ひょう衛えい尉ゑい行ぎょう親しん

修禅寺の僧

行親の家来など

第一場

伊豆の国狩野かののの庄、修禅寺村（今の修善寺）桂川のはとり、夜叉王の住家。

藁葺わらぶきの古びたる二重家体。破れたる壁に舞樂の面などをかけ、正面に紺暖簾こんのれんの出入口あり。下手に炉を切りて、素焼の土瓶どびんなどかけたり。庭の入口は竹にて編みたる門、外には柳の大樹。そのうしろは畑を隔てて、塔の峰つづきの山または丘などみゆ。

元久元年七月十八日。

（二重の上手につづける一間の家体は細工場さいくわばにて、三方に古りたる蒲がま簾すだれをあうせり。庭さきには秋草の花咲きたる垣かきに沿うて荒むしろを敷

き、姉娘桂、二十歳。妹娘楓、十八歳。相對して紙砧かみざねを擣うつてゐる。

かつら (やがて砧の手をやめろ) 一ときあまりも擣ちつづけたので、

肩も腕うでも痺しびるるような。もうよいほどにして止やみようでな

いか。

かえで とは言うものの、きのうまでは盆休みであつたほどに、き

ようからは精出して働こうではござんせぬか。

かつら 働きたくはお前ひとりとこで働くがよい。父様ととにも春彦どのに

も褒ほめられようぞ。わたしはいやいや、いやになつた。(投

げ出すように砧を捨つ)

かえで 貧てわざの手業てわざに姉妹きょうだいが、年ごろ擣うちなれた紙砧かみざねを、とかくに飽

きた、いやになつたと、むかへに變かるお前まへがこのごろの素

振りば、どうしたことでござるかおう。

かつら

(あざ笑う) いや、昔とは変らぬ。ちつとも変らぬ。わたいは昔からこのようなことを好きではなかった。父さまが鎌

倉くらにおいてなされたら、わたいらもこうはあるまいものを、

名聞うやうもんを好まれぬ職人氣質かたぎとして、この伊豆いずの山家に隠れ栖すま、

親につれて子供までも鄙ひなにそだち、いようことなうに今の

身の上トヤ。さりとしてこのままに朽ち果てようとは夢にも

思わぬ。近いためは今わたいらが擣うつてゐる修禪寺紙、

はじめは賤いやしい人の手につくられても、色好紙いろあしがみとよばれて

世に出づれば、高貴のお方の手にも触ふる。女子おなごとてもそ

の通りトヤ。たとい賤いやしゆう育つても、色好紙の色よくば、

関白大臣將軍家のおそばへも、召い出されぬとは限かぎるまい

に、賤しずの女めがなりわいの紙砧しぢん、いつまで擣うちおぼえたとして
何なにとなろうぞ。いやになつたと言いうたが無む理りか。

かえて

それはおまえが口癖くぐせに言うことどやが、人には人それぞれ
の分ぶんがあるもの。將軍家のお側近そばぢんう召めいさるふなどと、夢の
ようなことをたのみにして、心ばかり高たかう打ちあがり、末
はなんとなろうやら、わたしは案あんじられてなりませぬ。

かつら

お前まへとわたしとは心が違ちがう。妹いもうとのおまえは今年十八で、春
彦はるひこという男おとこを持もつた。それに引きかえて姉あねのわたしは、
二十歳はたちという今日の今いままで、夫おつともさだめずに過あしたは、あ
たら一生いっせいを草くさの家やに、住すみ果みつまいと思おもえばこそどや。職しやく
人風情ふでいの妻つまとなつて、満足まんじつして暮くすおまえらに、わたし
の心こころはわかわかかるまいのう。(空嘯そらうそく)

(楓の婿春彦、二十余歳、奥より出づ。)

春彦 桂どの。職人風情とさも卑しい者のように言われたが、職

人あまたあるなかにも、おもてつくりに面作師といえは、世に恥かゝから

ぬ職であらうぞ。あらためて申すに及ばねど、わが日本開ひら

びやく闢以来、はじめて舞樂のおもてを刻まれたは、もつたいな

くも聖徳太子、つづいて藤原淡海公、弘法大師、倉部くらべの

春日かすが、この人々より伝えて今に至る、由緒正ゆいしよき職人とは

知られぬか。

かつら それは職が尊いのでない。聖徳太子や淡海公という、その

人々が尊いのトヤ。かの人々も生業なりわいに、面作りはなされま

いが……。

春彦 生業に―ては卑しいか。さりとは異なことを聞くものトヤ

の。この春彦が明日にもあれ、稀代の面おもてをつくり出して、

天下一の名を取つても、お身は職人風情と侮あなどるか。

かつら 言かんでもないこと、天下一でも職人は職人トや、殿上人や

弓取りとは一つになるまい。

春彦 殿上人や弓取りがそれほどに尊いか。職人がそれほどに卑

しいか。

かつら はて、くだい。知れたことトやに……。

(桂は顔をそむけて取り合わず。春彦、むつと一語詰りよるを、楓は

あわてて押し隔てる。)

かえで ああ、これ、一旦こうと言ひ出したら、あくまでも言ひ募

るが姉あねさまの氣質、逆ううては悪い。いさかいはもう止

てくだされ。

春彦 その氣質を知ればこそ、日ごろ堪忍していれど、あまりと

言えば詞が過ぐる。女房の縁につながりて、姉と立つれば

つけ上り、ややもすればわれを軽むる面憎さ。仕儀によ

つては姉とは言わさぬ。

かつら おお、姉と言われずとも大事ござらぬ。職人風情を妹婿に

持ったとて、姉の見得にも手柄にもなるまい。

春彦 まだ言うか。

(春彦はまたつめ寄るを、楓は心配して制す。この時、細工場の簾の

うちにて、父の声。)

夜叉王 ええ、騒がしい。鎮まらぬか。

(これを聴きて春彦は控える。楓は起って蒲簾をまけば、伊豆の夜叉

王、五十余歳、烏帽子、筒袖、小袴にて、鑿と槌とを持ち、木彫の

飯面いひめんを打うつてゐる。膝ひざのあたりには木の屑くずなど取り散らちたり。

春彦 由なきことを言いひ募もつて、細工こぎのおさまたげをも省しみぬ不

調法てうぽう、なにとぞ御料簡ごりょうけんくたさりませ。

かえて これもわたしが姉様あねさまに、意見いけんがまましいことなど言いうたが基もと。

姉様あねさまも春彦はるひこどのも必かなず叱しかつて下くださりまするな。

夜叉王やしやおう おお、なんで叱しかろう、叱しかりはせぬ。姉妹あねいもうとの喧嘩いさかひはままある

ことトヤ。珍めづらしいゆうもあるまい。時に今日けふももう暮くるる

ぞ。秋あきのゆう風かぜが身みにみるわ。そちたちは奥おくへ行いつて夕ゆふ

飯いひめの支度しだ、燈火あかりの用意よういでもせい。

二人 あい。

(桂けいと楓ふうは起おつて奥おくに入いる。)

夜叉王やしやおう のう、春彦はるひこ。妹いもうととは違ちがうて氣きがさの姉あねトヤ。同どうト屋根やねの下した

に起き臥ふすれば、一年三百六十日、面白からぬ日も多か
ろうが、何事もわゝに免まれて料簡せい。あれを産んだ母親
は、そのむかし、都の公家衆くげしゅうに奉公したものの、縁あつてこ
の夜叉王と女夫めかどになり、あずまへ流れ下つたが、育ちが育
ちとて氣位高く、職人風情に連れ添うて、一生むなく朽
ち果つるを悔みながらに世を終つた。その腹を分けた姉妹、
おなたぬと胤たぬとはいいながら、姉は母の血をうけて公家氣質、
妹は父の血をひいて職人氣質、子の心がちがえば親の愛も
違うて、母は姉びい胤き、父は妹い胤き。思い思いに子どもの胤
肩争しいから、埒らちもない女夫喧嘩けんなどしたこともあつたよ。
ははははははは。

春彦

そう承われれば桂どのが、日ごろ職人をいやみ嫌い、世に

きこえたる殿上人か弓取りならでは、夫に持たぬと誇らるるも、母御ほはごの血筋をつたえしため、血は争われぬものでござりまするな。

夜叉王

ドヤによつて、あれが何を言おうとも、滅多に腹は立てまいぞ。人を人とも思わず、氣位きぐらい高う生まれたは、母の子なれば是非がないのドヤ。

(暮の鐘きこゆ。奥より楓は燈台を持ちて出づ。)

春

彦 おお、取り紛れて忘れていた。これから大仁おほひとの町まで行つ

て、このあいだ詛あつちえておいた鑿うみと小刀さすがをうけ取つて来ねばなるまいか。

かえて きょうはもう暮れまゐた。いつそ明日あすになさされては……。

春 彦 いや、いや、職人には大事の道具ドヤ。一刻も早う取り寄

せておこうぞ。

夜叉王 おお、職人はその心がけがのうてはならぬ。更ふけぬ間に、

ゆけ、行け。

春彦 夜とは申せど通いなれた路、一ときほどに戻つて来まする。

(春彦は出てゆく。楓は門かどにたちて見送る。修禅寺の僧一人、燈籠とうろうを

持ちて先に立ち、つづいて源の頼家卿、二十三歳。あとより下田五郎

景安、十七八歳、頼家の太刀をささげて出づ。)

僧 これ、これ、將軍家のおいのびドヤ。粗相こそうがあつてはなり

ませぬぞ。

(楓ははつと平伏ひれふす。頼家主従すすみ入れば、夜叉王も出て迎える。)

夜叉王 思おもいもよらぬお成りとして、なんの設けもござりませぬが、

ままずあれへお通りくださりませ。

(頼家は縁に腰をかける。)

夜叉王 して、御用の趣は。

頼家 問わずとも大方は察しておろう。わが面体を後のかたみに残さんと、さきにその方を召し出し、頼家に似せたる面を作れと、絵姿までも遣わしておいたるに、日を経るも出来せず、幾たびか延引を申し立てて、今まで打ち過ぎは何たることトヤ。

五郎 多寡が面一つの細工、いかに丹精を凝らすとも、百日とは費すまい。お細工仰せつけられは当春の初め、その後すでに半年をも過ぎたるに、いまだ献上いたさぬとはあまりの懈怠、もはや猶予は相成らぬと、上様の御機嫌さんざんトヤぞ。

頼家

予は生まれついでに性急トヤ。いつまで待てど暮せど埒あ
かず、あまりに齒痒はがゆう覚ゆるまま、この上は使いなど遣わ
すこと無用と、予がトきトきに催促にまいった。おのれ何
ゆえに細工を怠りおるか。仔細をいえ、仔細を申せ。

夜叉王

御立腹おそれ入りまゝしてござりまする。もったいなくも征
夷大將軍、源氏の棟梁とうりょうのお姿を刻めとあるは、職のほまれ、
身の面目、いかでか等閑なみだりに存ぞままようや。御用うけたま
わりてすでに半年、未熟ながらも腕限り根かぎりに、夜昼
となく打ちまゝても、意にかなうほどのもの一つもなく、
さらに打ち替え作り替えて、心ならずも延引に延引をかさ
ぬまましたる次第、なにとぞお察みくくださりませ。

頼家

ええ、催促の都度におなトことを……。その申まわけは聞

き飽いたぞ。

五郎

この上はただ延引とのみで相済むまい。いつのころまでにはかならず出来するか、あらかどめ期日をさだめてお詫を申せ。

夜叉王

その期日は申し上げられませぬ。左に鑿をもち、右に槌を持ってば、面はたやすく成るものと思し召すか。家をつくり、塔を組む、番匠ばんしやうなどとは事変りて、これは生なき粗木あらきを削り、男、女、天人、夜叉、羅刹らせつ、ありとあらゆる善悪邪正のたましいを打ち込む面作師。五体にみなぎる精力ぢりきが、両の腕かひなにおのずから湊あつまる時、わがたましいは流るるごとく彼に通いて、はじめて面も作られます。ただその時は半月の後か、一月の後か、あるいは一年二年の後か。わ

れながら確しかとはわかりませぬ。

僧

これ、これ、夜叉王どの。上様は御自身も仰せらるふごとく、至って御性急ごせいきうでおわします。三島の社の放はなししなせを見らうように、ぬらりくらりと取止めのないことばかり申し上げたら、御疳癖ごかんせきがいよいよ募もううほどに、こなたも職人しやくじん冥利みょうり、いつのころまでと目を限きって、いかと御返事を申すがよかろうぞ。

夜叉王

トヤと申うて、出来ぬものはのう。

僧

なんの、こなたの腕うでで出来ぬことがあろう。面教師も多くあるなかで、伊豆の夜叉王といえ、京鎌倉までも聞えた者トヤに……。

夜叉王

さあ、それゆえに出来ぬと申うのトヤ。わしも伊豆の夜叉

王と言え、人にも少くは知られたもの。たとひお咎め受
きようと、己が心に染まぬ細工を、世に残すのはいかに
も無念トヤ。

頼家 なに、無念トヤと……。さらばいかなる祟りを受きようと
も、早急には出来ぬというか。

夜叉王 恐れながら早急には……。

頼家 ひひ、おのれ覚悟せい。

(癩癖募り頼家は、五郎のささげたる太刀を引取って、あわや抜

かんとす。奥より桂、走り出づ。)

かつら まあ、まあ、お待ちくださいませ。

頼家 ええ、退け、のけ。

かつら まずお鎮まりくださりませ。面はただ今献上いたします。

のう、父様。

(夜叉王は黙して答えず。)

五郎 なに、面はずでに出来ておるか。

頼家 ええ、おのれ。前後不揃いふぞろいのことを申し立てて、予をあざむこうでな。

かつら いえ、いえ、嘘うそいつわりではござりませぬ。面はたくかに出来ております。これ、父様。もうこの上は是非がござんすまい。

かえで ほんにそうドヤ。ゆうべようやく出来たというあの面を、いつそ献上なされては……。

僧 それがよい、それがよい。こなたも凡夫ドヤ。名も惜おぼかろうが、命も惜おぼかろう。出来た面があるならば、早う

上様にさゝあげて、お慈悲をねがうが上分別ドやぞ。

夜叉王 命が惜しいか、名が惜しいか。こなた衆の知ったことでは

ない。黙っておいやれ。

僧 さりとて、これが見ていらりようか。さあ、娘御。その面

を持って来て、ともかくも御覧に入れたがよいぞ。早う、

早う。

かえて あい、あい。

(かえては細工場へ走り入りて、木彫の仮面めんを入れたる箱を持ち出づ。

桂はうけ取りて頼家の前にささぐ。頼家は無言にて桂の顔をうちまも

り、心少しく解けたる体なり。)

かつら いつわりならぬ証拠、これ御覧くださりませ。

(頼家は仮面を取りて打ちながめ、思わず感嘆の声をあげる。)

頼家 おお、見事トヤ。よう打ったぞ。

五郎 上様おん顔に生写トヤ。

頼家 ひひ。(飽かず打ち成る)

僧 さればこそ言わぬことか。それほど物が出来ていな

ら、とこう決つておられたは、夜叉王どのも氣の知れぬ男

トヤ。ははははは。

夜叉王 (形をあらためる) 何分にもわが心になわぬ細工、人には

見せどと存どまいたが、こう相成つては致し方もござりま

せぬ。方々にはその面をなんと御覧なされます。

頼家 さすがは夜叉王、あっぱれの者トヤ。頼家も満足したぞ。

夜叉王 あっぱれとの御賞美はばかりながらおめがね違い、それ

は夜叉王が一生の不出来。よう御覧トませ。面は死んでお

りまする。

五 郎 面が死んでおるとは……。

夜叉王 年ごろあまた打つたる面は、生けるがごとくと人も言い、

われも許しておりました、不思議やこのたびの面に限つ

て、幾たび打ち直しても生きたる色なく、たましいもなき

死人の相……。それは世にある人の面ではござりませぬ。

死人の面ではござりまする。

五 郎 そちはさように申しても、われらの眼にはやはり生きたる

人の面……。死人の相とは相見えぬがのう。

夜叉王 いや、いや、どう見直しても生いもうある人ではござりませぬ。

いかも眼まなこに恨みを宿し、何者をか呪のろうがごとき、怨靈怪異おんりょうあやかい

なんどのたぐい……。

僧 あ、これ、これ、そのような不吉のことは申さぬものトヤ。

御意ごいにかなえばそれで重畳ちゆうとう、ありがたくお礼を申されい。

頼家 ひひ。ともかくにもこの面は頼家の意にかのうた。持ち

帰かへるぞ。

夜叉王 強たかつて御所望ごしやもうとござりますれば……。

頼家 おお、所望トヤ。それ。

(頼家は頤あごにて示せば、かつら心得て仮面を箱に納め、すこしく媚こびを含みて頼家にささぐ。頼家はさらにその顔をトつと視る。)

頼家 いや、なあかさねて主人あふトに所望がある。この娘を予が手も

とに召つかう仕つかいとう存ぞんずるが、奉公つかさする心はないか。

夜叉王 ありがたい御意にござりますが、これは本人の心まかせ、

親の口から御返事は申まう上げられませぬ。

(桂は臆せず、すすみ出づ。)

かつら 父様。どうぞわたくしに御奉公を……。

頼家 うい奴ドヤ。奉公をのぞむと申すか。

かつら はい。

頼家 さらにこれよりその面をささげて、頼家の供へてまいれ。

かつら かゝこまりました。

(頼家は起つ。五郎も起つ。桂もつづいて起つ。楓は姉の袂たもとをひかえ

て、心もとなげこころもとに囁く。)

かえで 姉さま。あまえは御奉公に……。

かつら あまえは先ほど、夢のような望みと笑うたが、夢のような

望みが今かのうた。

(かつらは誇りがに見かえりて、庭に降り立つ。)

僧 やれ、やれ、これで愚僧もまず安堵あんどいたした。夜叉王どの、

あすまた逢あいまーようぞ。

(頼家は行きかかりて物につまづく。桂は走り寄りてその手を取る。)

頼家 おお、いつの間にか暗うなった。

(僧はすすみ出でて、桂に燈籠を渡す。桂は仮面の箱を僧にわたし、

われは片手に燈籠を持ち、片手に頼家をひきて出づ。夜叉王はどつと

思案の体なり。)

かえて 父さま、お見送りを……。

(夜叉王は初めて心づきたるごとく、娘とともに門口に送り出づ。)

五郎 そちへの御褒美ごほうびは、あらためて沙汰さたすぞ。

(頼家らは相前後して出てゆく。夜叉王は起ち上りて、しばらく黙然

としていたりしが、やがてつかつかと縁にあがり、細工場より槌を持

ち来たりて、壁にかけたるいろいろの仮面を取り下し、あわや打ち碎

かんとす。楓はおどろきて取り継すぐ。

かえて ああ、これ、なんとなさる。おまえは物に狂われたか。

夜叉王 せっぱ詰まりて是非におよばず、拙つたなき細工を献上したは、

悔んでも返らぬわが不運。あのような面が將軍家のおん手

に渡りて、これぞ伊豆の住人夜叉王が作と宝物帳しよにも記さ

れて、百千年の後までも笑いをのこさば、一生の名折れ、

末代の恥辱、所詮しよせん夜叉王の名は廢すたった。職人もきよう限り、

再び槌は持つまいぞ。

かえて さりとは短気でござりまうよう。いかなる名人上手でも細

工の出来不出来は時の運。一生のうち一度でもあつばれ

名作が出来ようならば、それがすなわち名人ではござりま

せぬか。

夜叉王　むむ。

かえて　拙い細工を世に出したをそれほど無念と思ひ召さば、これ
からいよいよ精出して、世をも人をもおどろかすほどの立
派な面を作り出し、恥を雪いでくださりませ。

(かえては継りて泣く。夜叉王は答えず、思案の眼を瞑とじている。日
暮れて笛の声遠くきこゆ。)

第二場

おなぐく桂川のはとり、虎溪橋こけいききょうの袂。川辺には柳幾本いくもとたちて、
芒すすきと芦あしとみだれ生いたり。橋を隔てて修禪寺の山門みゆ。同ト
日の宵。

(下田五郎は頼家の太刀を持ち、僧は仮面めんの箱をかかえて出づ。)

五郎 上様は桂どのと、川辺づたいにそぞう歩き遊ばされ、お供

のわれわれは一足先へまいれとの御意であったが、修禪寺
の御座所ももはや眼のまえトヤ。この橋たもとの袂にたたずみて、
お帰りを暫時相待とうか。

僧 いや、いや、それはよろ―ゆうござるまい。桂殿たかやめという嬪女

をお見出しあつて、浮れあるきに余念もおわさぬところへ、われわれのごとき邪魔外道げだうが付き纏まとうては、かえつて御機嫌を損ずるでござらうぞ。

五郎 なにさまのう。

(とは言いながら、五郎はなお不安の体にてたたずむ。)

僧 ことに愚僧はお風呂ふろの役、早う戻もどつて支度をせねばなるまい。

五郎 お風呂とておのずと沸いて出づる湯ゆトヤ。支度を急ぐこともあるまいに……。まずお待ちやれ。

僧 はて、お身にも似合わぬ不粹をいうぞ。若き男女おとこめがむつまじゆう語らうていとところに、法師や武士は禁物トやよ。

ははははは。さあ、ござれ、ござれ。

(無理に袖をひく。五郎は心ならずも曳かふるままに、打ち連れて橋を渡りゆく。月出づ。桂は燈籠を持ち、頼家の手をひきて出づ。)

頼家 おお、月が出た。河原づたいに夜ゆけば、芒にまどる芦の

根に、水の声、虫の声、山家やまがの秋はまたひとゝおの風情かぜいト

やのう。

かつら 馴なれてはさほどにもおばえませぬが、鎌倉山の星月夜とは

事変りて、伊豆の山家の秋の夜は、さぞお寂さびしゆうござり

ましよう。

(頼家はありあう石に腰打ちかけ、桂は燈籠を持ちたるまま、橋の欄に凭よりて立つ。月明らかにして虫の声きこゆ。)

頼家 鎌倉は天下の覇府はふ、大小名の武家小路、薨いらをならべて綺羅きら

を競えど、それはうわべの榮えにて、うらはおそろき罪
の巷ちまた、悪魔の巢ぞ。人間の住むべきところでない。鎌倉な
どへは夢も通わぬ。(月を仰ぎて言う)

かつら

鎌倉山に時めいておわくならば、日本一の將軍家、山家そだ

ちのわれわれは下司げすにもお使いなされまいに、御果報拙つたない

がわたくしの果報よ。忘れもせぬこの三月、窟詣いわせもでの下向げこう

路うち、桂谷の川上で、はじめて御目見得をいたしよした。

頼家

おあ、その時そちの名を問えば、川の名とおなド桂と言う
たな。

かつら

まだそればかりではござりませぬ。この窟ふたもとのみなかみには、

二本の桂の立木ありて、その根よりおのずから清水を噴き、

末は修禪寺にながれて入れば、川の名を桂とよび、またそ

頼家

の樹をめかて女夫の桂と昔よりよび伝えてありますると、お答え申し上げましたれば、おまえ様はなんと仰せられました。

非情の木にも女夫はある。人にも女夫はありそうな……と、つい戯たわれに申したのう。

かつら お戯れかは存じませぬが、そのお詞ことばが冥加みょうかにあまりて、こ

の願がんかならずかなうようと、百日のあいだ人にも知らさず、窟へ日参いたせしに、女夫の桂のくしありて、ゆくえも知れぬ川水も、嬉うれしき逢瀬あうせにながれ合ひ、今月今宵おん側近う、召し出されたる身の冥加……。

頼家

武運つたなき頼家の身近うまいるがそれほどに嬉うれしいか。そちも大方は存じておろう。予には比企ひきの判官能員はんがんよくわの娘若狭わかといえり側女そばめありしが、能員はろびその砌みぎりに、不憫あびんや

若狭も世を去った。今より後はそちが二代の側女、名もそのままだに若狭と言え。

かつら　あの、わたくしが若狭の局つばねと……。ええ、ありがとうござりまする。

頼家　あたたかき湯の湧くところ、温かき人の情も湧く。恋をう

くないく頼家は、ここに新いき恋を得て、心の痛みもようやく癒えた。今はもうもうの煩惱ぼんごうを断って、安らけくこの地に生涯を送りたいものトヤ。さりながら、月には雲の障さわりあり。その望みもはかなく破れて、予に万一のことあらば、そちの父に打たせたるかのおもてを形見と思え。叔父の蒲殿かぼどのは罪のうして、この修禅寺の土となられた。わが運命も遅かれ速かれ、おなト路をたどろうも知れぬぞ。

(月かくれて暗し。籠手、臍当、腹巻したる軍兵二人、上下よりうかがい出でて、芒むらに潜む。虫の声にわかにかやむ。)

かつら あたりにすだく虫の声、吹き消すように止みまゝたは……。
頼家 人やまいりし。心をつけよ。

(金窪兵衛尉行親、三十余歳。烏帽子、直垂、籠手、臍当にて出づ。)

行親 上、これに御座遊ばされまゝたか。

頼家 誰トヤ。

(桂は燈籠をかざす。頼家透しみる。)

行親 金窪行親でござりまする。

頼家 おお、兵衛か。鎌倉表より何とてまいった。

行親 北条殿のおん使いに……。

頼家 なに、北条殿の使い……。さてはこの頼家を討とうがため

な。

行親　これは存^ぞも寄らぬこと。御機嫌伺いとして行親参上、は

かに仔細もござりませぬ。

頼家　言うな、兵衛。物の具に身をかためて夜中の参入は、察す

るところ、北条の密意をうけて予を不意撃ちにすゝ巧みで

あろうか……。

行親　天下ようやく定まりとは申せども、平家の残党はう^つび殲

さ^ず。かつは函根^{はこね}より西の山路に、盗賊^{はう}ども徘徊^{はいかい}する由

きこえまゝたれば、路次の用心としてかようにいかめし^ゆ

う扮装^{いつてた}ち申した。上に対したてまつりて、不意撃ちの狼藉^{ろうじせき}

など、いかで、いかで……。

頼家　たといいかように陳ずるとも、憎き北条の使いなどに対

面無用トヤ。使いの口上聞くにおよばぬ。帰れ、かえれ。

(行親は騒がず。いずかに桂をみかえる。)

行親 これにある女性にょしやうは……。

頼家 予が召仕いの女子かぢごトヤよ。

行親 おんつっ謹みの身をもつて、素性すしやうも得知れぬ賤いやの女子どもを、

おん側近つう召されは……。

(桂は堪えず、すすみ出づ。)

かつら 兵衛どのとやら、お身は卜者うらやか人相見か。初見ういげんざん参のわらわ

に対して、素姓賤すじやうき女子などと、迂濶うかつに物を申されな。

妾わらわは都のうまれ、母は殿上人にも仕え者ぞ。まゝて今は

將軍家のおそばに召されて、若狭の局とも名乗る身に、一

応の会釈もせて無礼の雑言ぞうごんは、鎌倉武士というにも似ぬ、

さりとは作法をわきまえぬ者のう。

(冷笑あざわらわれて、行親は眉をひそめる。)

行親 なに。若狭の局……。して、それは誰に許された。

頼家 おお、予が許した。

行親 北条どのにも謀はからせたまわず……。

頼家 北条がなんどや。おのれらは二口目には北条という。北条

がそれほどに尊いか。時政も義時も予の家来どやぞ。

行親 さりとて、尼御台あまみだいもおわりますに……。

頼家 ええ、くどい奴。おのれらの言うこと、聴くべき耳は持た

ぬぞ。退すまれ、すされ。

行親 さほどにおむずかり遊ばされては、行親申し上ぐべきよう

もござりませぬ。仰せに任せて今宵はこのまま退散、委細

は明朝あらためて見参の上……。

頼家 いや、重ねて来ること相成らぬぞ。若狭、まいれ。

(頼家は起ち上りて桂の手を取り、打ち連れて橋を渡り去る。行親はあとを見送る。芒のあいだに潜み一軍兵出づ。)

兵一 先刻より忍んで相待ち申したに、なんの合図もござりませ

ねば……。

兵二 手を下すべき機もなく、空しく時を移し申した。

行親 北条殿の密旨を蒙り、近寄って討ちたてまつらんと今宵ひ

そかに伺候したるが、さすがは上様、早くもそれと覺られて、われに油断を見せたまわねば、無念ながらも仕損じた。

この上は修禅寺の御座所へ寄せかけ、多人数一度にこみ入って本意を遂ぎようぞ。上様は早業の達人、近習の者ども

にも手だれあり。小勢の敵と侮りて不覚を取るな。場所は狭し、夜いくさどや。ううたえて同士撃ちすな。

兵 ばつ。

行親 一人はこれより川下へ走せ向うて、村の出口に控えたる者どもに、即刻かかれと下知を伝えい。

兵 一心得申した。

(一人は下手に走り去る。行親は一人を具して上手に入る。木かげより春彦、うかがい出づ。)

春彦 大仁の町から戻る路々に、物の具したる兵者が、ここに五

人かくこに十人屯して、出入りのものを一々詮議するは、合点がゆかぬと思うたが、さては鎌倉の下知によって、上様を失いたてまつる結構な。さりとは大事どや。

(遠近かちこちにて寝鳥ねとりのかどろき起つ声。下田五郎は橋を渡りて出づ。)

五郎 常はさびーき山里の、今宵は何とやらん物さわがーく、事

ありげにも覚ゆるぞ。念のために川の上下かみしもを一わたり見廻うまわ

ろうか。

春彦 五郎どのではおわさぬか。

五郎 おお、春彦か。

(春彦は近づきてささやく。)

五郎 や、なんと言う。金窪の参入は……。上様を……。ーかと

左様か。むむ。

(五郎はあわただしく引返ゆかんとする時、橋の上より軍兵一人長巻ながまきをたずさえて出で、無言にて撃つてかかる。五郎は抜きあわせ、たちまち斬きつて捨つ。軍兵数人、上下より走り出で、五郎を押し

取りまく。）

五郎 やあ、春彦。ここはそれがうが受け取った。そちは御座所

へ走せ参ドて、この趣を注進せい。

春彦 はっ。

（春彦は橋をわたりて走り去る。五郎は左右に敵を引き受けて奮闘す。）

第三場

もとの夜叉王の住家。夜叉王は門にたちて望む。修禪寺にて早鐘を撞く音きこゆ。

(向うより楓は走り出づ。)

かえて 父様。夜討ちドヤ。

夜叉王 おお、むすめ。見て戻ったか。

かえて 敵は誰やらわからぬが、人数はおよそ二三百人、修禪寺の御座所へ夜討ちをかけたぞ。

夜叉王 にわかనికిこゆる人馬の物音は、何事かと思うたに、修禪

寺へ夜討ちとは……。平家の残党か、鎌倉の討手か。こりや容易ならぬ大変ドヤのう。

かえて

生憎あやにくに春彦どのはありあわさず、なんとしたことでござりまゝような。

夜又王

われわれがうろうろ立ち騒いだとてなんの役にも立つまい。

ただそのなりゆきを観ているばかりドヤ。まさかの時にはかやこ父子が手をひいて立ち退くまでのこと。平家が勝とうが、

源氏が勝とうが、北条が勝とうが、われわれにはかかり合

いのないことドヤ。

かえて

それドヤと言うて不意のいくさに、姉様あねさまはなんとなさりよ

うか。もゝ逃げ惑うて過失あやまちでも……。

夜又王

いや、それも時の運ドヤ、是非もない。姉にはまた姉の覚

悟がわろうよ。

(寺鐘と陣鐘とまどりてきこゆ。楓は起ちつ居つ、幾たびか門に出てて心痛の体。向うより春彦走り出づ。)

かえて おお、春彦どの。待ちかぬまゝした。

春彦 寄せ手は鎌倉の北条方、いかも夜討ちの相談を、測らず木かげで立聴きして、その由を御注進申し上ぎようと、修禅寺までは駈けつけたが、前後の門はみな囲まれ、翼なれば入ることかなわず、残念ながらおめおめ戻った。

かえて では、姉様の安否も知れませぬか。

春彦 姉はさておいて、上様の御安否さえもまだわからぬ。小勢ながらも近習の衆が、火花をちらして追っつ返しつ、今が

合戦最中トヤ。

夜叉王 なにを言うにも多勢に無勢、御所方^{ごしよがた}とても鬼神^{くわんじん}ではあるま

いに、勝負は大方知れてある。とても逃れぬ御運の末トヤ。

蒲殿^{ふで}といい、上様^{かみさま}と言ひ、いかなる因縁かこの修禪寺には、土の底まで源氏の血が沁^ひみるのう。

(寺鐘烈しくきこゆ。春彦夫婦は再び表をうかがい見る。)

かえで おお、おびただしい人の足音……。鎬^{しのぎ}を削る太刀の音……。

春彦 ここへも次第に近づいてくるわ。

(桂は頼家の飯面を持ちて顔には髪をふりかけ、直垂^{ひたたれ}を着て長巻を持

ち、手負^{てか}いの体にて走り出で、門口に來たりて倒る。)

春彦 や、誰やら表に……。

(夫婦は走り寄りて扶^{たす}け起し、庭さきに伴い入るれば、桂はまた倒れ

る。)

春彦 これ、傷は浅うござりまするぞ。心を確かに持たせられい。
かつら (息もたゆげに) おお妹……。春彦どの……。父様はどこに
トヤ。

夜又王 や、なんと……。

(夜又王は怪しみて立ちよる。桂は顔をあげる。みなみな驚く。)

春彦 や、侍衆さむらいとかもいのほか……。

夜又王 おお、娘か。

かえで 姉さまか。

春彦 して、この体ていは……。

かつら 上様お風呂を召さるる折から、鎌倉勢が不意の夜討ち
……。味方は小人数、必死にたたかう。女めでこそあれこの

桂も、御奉公はどめの御奉公納めに、この面おもてをつけてお身

がわりと、早速さそくの分別……。月の暗きを幸いに打物とつて庭におり立ち、左金吾頼家これにありと、呼ばわり呼ばわり走せ出づれば、むらがる敵は夜目遠目に、まことの様ぞと心得て、うち洩もらさどと追つかくる。

夜叉王

さては上様お身替りと相成つて、この面にて敵をあざむき、ここまで斬り抜けてまいったか。(血に染みたる仮面めんを取りてドットと視る)

春彦

われわれすらも侍衆と見あやまったほどなれば、敵のあざむかれたも無理ではあるまい。

かえで

とは言うものの、あさましいこのお姿……。姉様死んで下さりまするな。(取り継りて泣く)

かつら

いや、いや。死んでも憾うらみはない。賤しずが伏屋ふせやでいたずらに、

百年千年生きたとて何となろう。たとい半とき一ときでも、
將軍家のおそばに召し出され、若狭の局という名をも給わ
るからは、これで出世の望みもかのうた。死んでもわたし
は本望トヤ。

(云いかけて弱るを、春彦夫婦は介抱す。夜叉王は仮面をみつめて物
言わず。以前の修禪寺の僧、頭より袈裟けさをかぶりて逃げ来たる。)

僧　大変トヤ、大変トヤ。かくもうて下され、隠もうてくださ
れ。(内に駆け入りて、桂を見てまたおどろく) やあ、ここに
も手負いが……。おお、桂殿……。こなたもか。

かつら　して、上様は……。

僧　お悼いたわーや、御最期トヤ。

かつら　ええ。(這い起きてきつと視る)

僧 上様ばかりか、御家来衆も大方は斬り死……。わーらも傍そば

杖づえの怪我せぬうちと、命からがら逃げて来たのドヤ。

春彦 では、お身がわりの甲斐かひもなく……。

かえて ついにやみやみ御最期か。

(桂は失望してまた倒る。楓は取りつきて叫ぶ。)

かえて これ、姉さま。心を確かに……。のう、父様。姉さまが死

にまするぞ。

(今まで一心に仮面をみつめたる夜叉王、はじめて見かえる。)

夜叉王 おお、姉は死ぬるか。姉もさだめて本望であらう。父もま

た本望ドヤ。

かえて ええ。

夜叉王 幾たび打ち直してもこの面に、死相のありありと見えたる

は、われ拙きにあらず。鈍きにあらず。源氏の將軍頼家卿
がかく相成るべき御運とは、今という今、はじめて覺つた。
神ならでは知らしめされぬ人の運命、まづわが作にあらわ
れしは、自然の感応、自然の妙、技芸神しんに入るとはこのこ
とよ。伊豆の夜叉王、われながらあつばれ天下第一トヤのう。

(快げに笑う)

かつら
(おなづく笑う) わたしもあつばれお局様トヤ。死んでも思
いおくことない。ちつとも早う上様のおあとを慕うて、冥めい
土のおん供……。

夜叉王
やれ、娘。わかき女子が断末魔の面、後の手本に写してあ
きたい。苦痛を堪こらえてしばらく待て。春彦、筆と紙を……。

春彦
はつ。

(春彦は細工場に走り入りて、筆と紙などを持ち来たる。夜叉王は筆を執る。)

夜叉王 娘、顔をみせい。

かつら あい。

(桂は春彦夫婦に扶けられて這いよる。夜叉王は筆を執りて、その顔を模写せんとす。僧は口のうちにて念仏す。)

—幕—

使用書体

かな／欣喜堂 KOずりM

漢字・約物・記号／Ra花蓮華

欧文・数字／Hoefler Text Regular

組版

島崎肇則

公開

二〇一九年七月三一日

底本

「日本の文学 七七 名作集(一)」中央公論社

一九七〇(昭和四五)年七月初版発行

初出

「文芸倶楽部」

一九一一(明治四四)年一月

入力

土屋隆

校正

小林繁雄

二〇〇六年四月三〇日作成

青空文庫作成ファイル

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。